

せん。然し貴方にでしたら安心して、喜んでお願ひします。貴方の好きな所でそれを上演して下さい。ワイマールでだけでも一向構ひません。貴方が、その上演のために出来得る限りの、凡ての大切な手段をとつて下さることも、貴方のなさることなら、世の中の人々が何の非難もないことをよく知つてゐます。どうかローエングリンを上演し、その中なる生の歩みを貴方自身の作曲として下さい。」

この手紙を受取ると直ちに、非常に友情に富んだ友リストは、この歌劇をその年の夏に初演する豫定を立て、練習に着手した。ワグナーは勿論、遠く離れたパリから出来るだけ練習を指導した。彼は一度ならず自分が上演の際、微行でワイマールに行けるやうに宮廷に乞うてくれと、リストに頼んだ。然し残念ながらそれは出来なかつた。ワイマールの劇場の設備は、過去の歌劇手法とは全然異つてゐるこの作品の新しさには、全く不十分であつたが、みんなはリストの燃えるやうに熱心な指揮の下に、人間の最高能力を發揮した。「この上演に際して、監督は人類發生以來ワイマールでは初めての二千ターレルに近い大金を支出した。」とリストは手紙に書いてゐる。

かうしてゐる中に、一八五〇年八月二十八日のゲーテ記念日に大變な事件が起つた。その前に尙ヘルダー祭が催されてゐた。八月二十五日にシアラーによつて模型が作られ、最初の詩人の立像として成功したヘルダーの立像の除幕式祝典が行はれた。午後にはリストの指揮の下に祝典演奏會が行はれ、ゲナストが装置し、リストが作曲したヘルダーの「鎖りを離れたプロメテイス」が演奏された。リストはそのために、序曲一つ——彼はこの序曲を後に交響詩プロメテイスとして、殘餘の部分から切離した——と八つの大合唱曲とを十四日間といふ信ずることの出来ない程の短かい期間に作曲した(リヒアルド・ポールは後ヘルダーのテキストとエシロスの合唱断片によつて一つのプロローグとそれを結びつけるテキストとを作つた。この新しい形態で、この作品は一八五七年四月二十一日にワイマールで

行はれた初演の際素晴らしい成果を擧げ、それ以後今日まで常に演奏會場で使はれてゐる)。リストはヘルダーのヒューマニティーを目指したこの高尚な歌を深く把握し、同じやうに天才的な作曲をした。例へば裁斷師の合唱や、葡萄作りの合唱のやうな、この作曲の中の二三の部分はリストの作品の中でも最も立派なものである。三日後、ディンゲルシュテット、グッコフ、ベッティーナ、テオドール・ウーリヒ、ヨアヒム、ラッフ・ハンス・フォン・ビューローのやうな多數の他郷人の出席の下に、ローエングリンが上演された。夕方にはディンゲルシュテットの作つた祝典序詩が朗讀された。ワイマールの人々はこの上演に餘り來ず、大公妃が澤山の切符を買上げて贈られたので、やつと満員になつてゐた。この結果はタンホイザーに重大なる影響を及ぼした。聴衆は新しい様式には全然不慣れであつた。彼等は先づ第一に教育されねばならなかつた。然しリストは次の言葉によつて勵まされた。「貴方のローエングリンは初めから終りまで崇高な作品です。あちらこちら澤山のところで、私は心から涙を流しました。この歌劇は徹頭徹尾驚くべきものです。私はどこの場面がよかつたとか、組み合わせがよかつたとか、効果がよかつたとか、取り立て、貴方にお褒めすることは出来ません。」

この上演後、彼は樂團から銀の指揮棒を贈られた。天才の代表者、タンホイザー、ローエングリン兩歌劇の指揮者に。リストはこの多くの反感と敵視によつても困惑しなかつた。彼は失敗の原因が作品の中にあるのではないといふ事をよく知つてゐたので、急速に引續いて再演をし、友の作品に活氣をつけようと思つた。「この際單に歌手と管絃樂員に注意を與へ、歌劇に役立つやうに劇的部分を改革するといふことだけが必要であるのではなく、何よりも第一に、寧ろ公衆に高い教養を教へ込んで、今まで彼等が彼等の空想と服従心と、劇場で養つてゐたやうな下俗な娛樂ではなく、もつと高度な藝術に對する共感と理解によつて、大衆が創作品に對して興味を持てるやうな能力を彼等



に與へるといふことが必要なのである。敵は單に歌手の咽喉の中に隠れてゐるのではなく、寧ろもつと本質的に馬鹿々々しいが、同時に横暴な聴衆の不慣れさの中に隠れてゐる。」

作品が出来るだけ速く理解されるためにリストは、以前にタンホイザーのために書いたやうに、長い論説を書いて理窟を云つたり、變に藝術家かぶれしたりしては出来ない大膽な感激をすることによつて、ローエングリンを理解出来るやうにした。ワーグナーは、リストのこの論説に對する彼の感嘆の念を就中次のやうな言葉で表現してゐる。「私がこの文章を何度も非常に熱心に通讀した際に、どういふ風に感じたかといふことを、貴方に申し上げなければならぬ。私としても、私は殆ど何も云ひ表すことは出来ないでせう。どうか、こんな言葉で充分だとして下さい。私は自分の努力や歌劇や藝術上での闘争に對し、完全に報いられたと思ひ、私がそれらによつて貴方にどんな印象を與へたかを知ることが出来ます。完全に理解され度いといふことは私の唯一の慾望ですし、完全に理解されてゐるといふことが私の望みの最も幸福な満足です。」

リストによるローエングリンの上演といふ藝術上の大行事は、この他にもう一つの非常に重要な結果を有してゐる。即ちワーグナーを刺戟して外面的な効果を得るための凡ゆる「歌劇作曲」を中止させ、彼の藝術改革を惹き起した。リストはこの行ひを以つてワーグナーの前に進み出てこんな風に言つてゐたやうに思はれた。「吾々はもうみんなやつてしまつた。さあもう一つ新しい作品を作つて下さい。さうしたら又どしどしやりませう!!」——「實際新しい藝術活動に對する反對が起つた時に、私の中にそれに對抗する非常に力強い決心を自醒めさせたのはリストのこの勵ましであり、この忠告でありました。私は非常な速さで詩を一つ書き始め完成しましたが、その詩の作曲はもう既に出来上らうとしてゐます。直ちに實行される筈の上演に對しては、私は唯リストと私が極く最近の經驗によつて、ワイマー

ルといふ地方的な概念の下にひつくるめてしまつたやうな私の友達だけを思ひ浮べました。」ワーグナーは、ずっと前に出来ては居たが、パリに居た間は鍛冶屋のウィーランドを作るために暫くの間手をつけずに居つた詩、ジューグフリードの死を作曲し始めた。この既に舞臺に上演出来るやうにスケッチした臺本を彼は、リストが何かうまい作曲を思ひついた時には彼の處に送つてくれるやうに、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人に送つた。「然し今はかう申しませう。私達にすつかり完成して見せて下さい。つまりお書き下さい、そして間もなく歌劇が出来上るでせう!」

リストはこの申し出を感謝はしたが、然し拒絶した。「貴方のウィーランドを訂正するやうにと私にどんなに御依頼になりましたも、私はどんな場合にも決してドイツ歌劇は作曲しないといふ決心を固守せざるを得ません。私の最初の歌劇をイタリア劇場で上演し、それが失敗でない場合でも外國語のまゝであるといふことは私にも都合なのです。ドイツ語は貴方一人のものであり、貴方のやうな人があるといふことはドイツ語にとつて名譽なことです。」

リストはワイマーの宮廷に乞うて、ワーグナーが新しく作曲した作品を或る程度まで上演することを許された。彼はこの契約を一八五二年七月一日まで結び、仕事の中に物質的な苦惱をなからしめるために、その契約に對して前拂ひで次々と五百ターレルの金を得たといふことである。それにも拘はらず彼はぐづぐづしてゐた。彼のこの作品は從來の歌劇なる概念とは非常に異つてゐるべきであり、彼の歌劇を上演するためには演技者も大衆の鑑賞力も現今の處では充分とは申し難いといふことが益々彼の意識に明らかになつて來た。そこで彼は手引きとなるやうな大變理解し易い戯曲を作るといふ一つの解決を見出した。即ち「若いジューグフリード」は後の作品を理解する準備になされたものであつた。彼はこの計畫をリストに知らせたが、リストは熱心にこれに次のやうに答へた。「それぢや若いジューグフリードは私共が待ち受けてゐたものなのだ。君は本當に全く素晴らしい男だ。君の前ではみんなは帽子を三度とるん



だ。この事件がうまく終つたので、私は心から悦んで君の作品のことを何時でも考へてゐる！」三週間といふ信じ難い程の短期間で、詩の方は出来上つた。それにも拘らず詩人ワグナーはその詩の原稿を友達に送つてやる決心をすることが出来なかつた。

「私は自分の詩をこんなに遠慮なしで貴方にお目にかけるといふことに或る恥かしさを、貴方に御見せすることに對してではなく、そんなに無遠慮な自分自身に對する恥かしさを感じます。それで私は近々の中に貴方にお會ひ出来ますかどうかといふことを、お聞き合はせするやうな氣持になりました。……もしお會ひ出来ましたら、私は非常に平靜な氣持になることが出来るでせう——原稿は此處にあります。——私は恐ろしい——私のもくろみに用ひるためには非常にまづいんですが——然し私は貴方にその詩を大きな聲で——然し私のつもりでは暗示的に——朗讀して貴方に私の詩を私が豫期してゐるやうな印象を以てすつかり呑み込ませることが出来ます。」

残念にもこの計畫は今度は實行出来なかつた。その間にワイマールではワグナーが誰にでも理解出来るやうにすつかり全部を示すことが出来、彼のジグフリードの計畫をもう一度續けて、ニーベルンゲンの神話全體を戯曲にしなければならぬといふ確信が出来上つてゐた。彼は現在のやうな四部作のスケッチを提出した。然しこの時にはもうワイマールで此の作品を上演するといふやうなことは考へられてゐなかつた。この作品はその頃では上演出来ないやうになつてしまつてゐたのである。そこで彼はワイマールとの間に結ばれてゐた契約を解除し、今までに受取つてしまつた金を賠償した。それから彼はリスト自身に多少の不安を有つて彼の大計畫を打ち明けた。他の人々はみんなその當時は確實に出来るといふ見込の全然ない大膽な計畫を、空想であるか、さうでなければ全く常軌を逸したものだと思つたことであらう。然しワグナーと同じ氣持を持つてゐたリストは直ちにこの大目的を認めた。「貴君は貴君

獨特の常軌を逸したやり方で、人々の思ひもよらない目的に到達した。ニーベルンゲンの敘事詩を三部作の戯曲に作り、それに作曲しようといふやうな問題は、貴君に相應しいものであり、私は貴君の作品が記念碑的な價値を有つて完成するといふことには全然疑ひを抱かない。」此のやうに彼が直ぐ即座にワグナーの目的を理解したために、ワグナーは明るい喜ばしい氣持になつた。「私の近くにゐた誰も彼もに、私は貴君の畫簡を見せて、こんな風に申し度い、御覽、私はこんな友達を持つてゐるんだぞ!!」

リストは友人の作品に對して大膽に援助を與へたため、殆ど音樂界全部と氣まづくなつた。確に非難は作品自身に向けられてゐるといふより、寧ろその作品を實現しようとする事に向けられてゐたのであつた。反對者は進歩のため、リストの大膽で擽まざる努力と、彼等の保守的な舊弊さが「新しきもの」自身よりもずつと危険になり得ることを感じてゐたのであつたが、それは正しいことであつた。それ故にどんな手段を採つてでも、此の「新しきもの」を無効にするといふことが確に必要であつた。この際に彼等とは容易な方法を持つてゐた。それは専門雜誌も含めて凡ゆる刊行物が、殊に素人の間では既に有名で勢力を持つてゐる刊行物が、彼等の自由になるといふことであつた。然しリストに對する凡ての反對は、一度何かを正しいと認めたらどんな反對に遭つても斷乎として自分の道を進んで行くこの男、リストの鐵のやうな精力と偉大なる創造力に突當つてはね返された。反對者達はリストが保護してゐる作品をたゞきつけて、勝利を獲得するといふことは出来なかつたが、彼等の非常な怒りによつてその代りに、リスト自身及びリスト自身の作品に汚點をつけることが出来た。リスト自身の作品は十年ばかりの間は威壓を蒙つてゐたために、その實演は不可能となつてゐた。特に作者リストは他人のためには驀らに進んで行つたけれども、自身のためには氣高い謙虛の情を有ち、戦ふことはしなかつた。他人のためには氣高い闘士となつたリストが天才的



な自己創造者を害つたことは如何にも悲劇的な現象である。ワーグナーには彼と世間とを直接に結びつけてゐるリストがあつた。それなのにリストには——誰もあなかつたのだ。而も彼自身嘗て援助した多くの人全部が、後になつては彼のために時間を割くといふやうなことはなかつた。例へばバイロイトでは今日に至るまでリストの音楽が公開席で鳴り響いたといふやうなことは殆どなかつた。そしてワーグナーは一生涯——又その後年にはバイロイト基金のための演奏會で——リストの作品を指揮したことは一度もなかつた。

一八五〇年ローエングリンの上演直後に一般的に起つた激しい反對が、その頃勢力を占めた。凡ての人の眼は小ワイマールに向けられ、少數の活動力に満ちた若人は、リストのために、リストの味方となつて進歩のために戦はうとして集まつた。この中に就中ワーグナーの友、テオドール・ウーリヒ、一八五四年にリストが退去するまで引續いてワイマールに住み、ホプリット(古代ギリシヤの甲兵)といふ假名を使ひ、力強く新しい方向のためにとりなしをしたりヒアルド・ポール、音楽理論家のルイス・ケーラー(一八五三年以來リストと友達になつた)、Fr.ワイツマン、更にフェリックス・ドレーセケ、ベルタスト(ローマの小盾を持つた戰士)といふ假名で、反對者と激しい論争を交はしたハンス・フォン・ビューローのやうな人々があつた。然し之等の人等のみならず、意見發表のためには、唯一つの雜誌——即ち初めはシューマンによつて創刊されて、現在はこの新運動への助力に全く身を捧げてゐる熱心で有能なフランツ・ブレンデル博士によつて編輯されてゐる「新音楽雜誌」——だけが思ひのまゝに使はれた。ブレンデルは、自分達につけられた「未來の音楽家」といふ諷刺名を誇を以て旗頭に大書し、後に人々が「新ドイツ派」と名づけた方向への道を均した小さな集まりの主腦指導者であつた。凡ての新聞雜誌の音楽批評家の大軍が彼等の敵であつた。主なる反對は、文學史家ユリアン・シュミットとモーツァルト傳記作家オットー・ヤーンが編輯してゐた「グレンツボー

ン」、「アウグスブルグ一般新報」(Al.フォン・ウォルツォーゲン)、「ライン音楽新報」、(L.ビシヨッフとF.ピルラー)、「ヨーロップ時報」(G.キニーネ)と、後になつては「新自由新聞」(エドアルド・ハンスリック)等が筆を揃へて書いた。

ワイマール自體に於ても激しい反對の嵐が起つた。猜疑と嫉妬と無理解が、公然と、又陰然とリストに對して行はれようとし、彼の行く途には數々の困難が横はつてゐた。人々は彼が保護してゐる新しい作品に對して反對し、彼自身に矛盾と不正とをたゞきつけた。といふのはリストは一面新しいものと全然同一視されたし、又他面然し、マイヤー・ベールの歌劇やそれに類するものに基く幻想曲を公けにしようとして、迷ふことなしに突進してゐたからである。

「私が唯、ファウスト交響樂とダンテ交響樂を完成したとしたり、私の友達に鱒と冷たいシャンペン等を一緒にして出すやうなことはしないだらう。」と云つたやうなリストの言葉は、この矛盾を容易に解決してゐる。リストはこのいやらしい事件をすつかり解決してしまはない間に、ワイマールを去つた。一八五〇年十月中旬に、彼は侯爵夫人と令嬢とを伴つて再びアイルゼン温泉に行つた。その際の彼の歌劇「アルフレッド王」を完成するためにワイマールに歸つてゐた助手のラッファが、彼に次のやうな手紙を出してゐる。「今年中にすべき私の劇場での仕事全部は、ワーグナーの歌劇(人々がそれを再演し、私のやうなつまらない者が指揮者に任命された場合には)と、アルフレッド王とに限られてしまふことせう。私が自分のよい名を曝すことをしないでは、最早現在の管理人の中に入ることは出来ないといふのは、容易に理解出来るでせう。——凡ゆる樂しみを抛棄してまで、私が指揮者の職からなるべく去らないといふことは、少くとも、残念ながら唯大衆の馬鹿加減さと無趣味さによつて今まで保たれて來た現在までの慣習に對する確實な反抗として役立つことせう。」



この度のアイルゼン滞在は正しく不運の連続であつた。侯爵夫人は思ひも掛けず母が死んだといふ通知を受取り、彼女がこの痛手から回復するかしないかの中に、マリー姫がチブスに罹つた。リストは深い悲しみに擱へられた。「貴方が、私は大變悲しい氣持になつて居り、憂鬱になつてゐるとお考へになるのは、決して誤つてはなりません。」彼はラッフへの手紙に書いてゐる。「私は益々深く憂鬱な氣持になつてゐます。多分今では外からでも認められることでせう。然し決して私以外の人々がこんな時にやつてゐるやうに、虚榮心や自己愛を氣にして、こんな様子をしてゐるではありません。私には自分の悲しみを誰かと分つことによつて和げるといふやうなことは許されてゐませんし……。ハイネは何處かでこんなことを言つてゐます。『けれど私はそれを忍んでゐるのだが、どうしてかとは問はないで下さい。』——最近私は外面的には平靜であり、しつかりして居りました。そして私が全く自分の内に沈潜し、それを使ひ切つてしまふ時も近づいてゐます。」

リストがワイマールを留守にしてゐる間、其處ではシェラールが指揮を取つてゐた。ゲナストは一八五〇年十一月二十八日に、それについてアイルゼンにから報じてゐる。「魔王ローベルトの上演は實にまつかつた!! 無知なシェラールが何時も笑つた顔つきをしてゐたのだが、あんな馬鹿げた者のことを貴方にお話する氣にもならないし、又話してみてもちつとも面白いことではありません。私が自分の座席で何か變だなど思つてゐたのに、彼は笑つてゐました。殆ど一つの場面だつて誤りなしで過ぎてはゐなかつたと言つてよいでせう。明日は『ヴェスタターリン』(竈の女神)が上演されるとのことです。もう二回練習しましたが、二回目は一回目より悪くなりました。あの男はひどく疲れてしまつたのでせう。管絃樂團員や歌ひ手達は、もう減茶々々になつてしまひました。どうぞ吾々の處へすぐ歸つて来て下さい。」

丁度これと同じやうなことを、一ヶ月経つた後ヨアヒム・ラッフが報じてゐる。「吾々の劇場はもうずつとみじめなものです。かういふ状態で次々と二つの歌劇の上演がありました。『魔彈の射手』と『魔笛』がありました。全く無邪氣な非音樂的な人達でさへも、最早耐へられないものでありました。といふのは餘りに間違ひだらけで、どんなに辛抱強い人だつて我慢が出来ませんでしたから。もし貴方の不在が二三月も續いたとしたら、私共は残らずもう此處にはゐなくなると思つてよろしいでせう。こんな馬鹿々々しい音樂を聞かなければならんし、さうでなければ全く一人ではゐなければならぬのですもの。こんなみじめな處に集つてゐる人間は、まるで血の氣のない人間ばかりだし、さういふ人達と私共は交際しなければならぬんですもの。吾々は藝術に對して信仰と快樂を持ち、喜んで仕事をすることはなくなるのですから。」

マリー姫の容體の危険がなくなつたので、リストは一人で歸つて來た。それは大公の誕生日に上演される事に決つてゐたラッフの歌劇アルフレッド王の稽古を指導しなければならなかつたからである。痛々しい氣持を抱いて、リストは侯爵夫人と別れたのであつた。毎日彼は彼女に長い、やさしい愛情の手紙を書き、彼がやつてゐることを知らせそして彼女の淋しさを慰めようとしてゐた。一八五〇年の秋以來、ワイマールの宮廷樂團に所屬した所の、チェリストのコスマンとヨゼフ・ヨアヒムと共に、リストはこの時代に室内樂をいつもやつてゐたが、彼等は多くの宮廷演奏會でも共演した。アルフレッド王の稽古は殆んど終つた。——リストは既に侯爵夫人に次のやうなことを報じてゐる。「それは此處で今まで上演したものである中で一番よいものとなるでせう。」——ところがその時、女流歌手のアグテーが病氣をして、祝典上演は行はれなかつた。その代りに大急ぎで、祝典大演奏會が準備されたが、リストが大公妃のために、自分も演奏しようと言ひ、而もマイヤーペール作の豫言者に基く幻想曲を弾くといふので、特別な光輝を放



つたのである。次の日リストはアイルゼンに歸つて來た。此處でさうしてゐる間に、マリイの容體は大變よくなつたので、歸途につくことを考へ得る程になつた。ところが娘のために獻身的に看護してゐた侯爵夫人が、今度は同じ病氣に倒れ、而もその病狀があまり悪かつたので、人々は彼女が死んだのではないかと何度も思つた程であつた。リストは勿論彼女の許に留つてゐた。そしてラッフは其の歌劇を一八五一年三月九日に自分で指揮しなければならなかつた。侯爵夫人の病狀の危険がなくなつた後に、リストは四月三日ワイマールに歸つて來た。「だがこの旅行中、私は此處で私の精神、私の愛情全部を病床に棄て去らなければならなかつたのだから、この旅行の想ひ出といふものは、私にとつてひどいものです。」とリストはワーグナーに手紙を書いてゐる。五月廿一日までリストは獨りでアルテンブルグにゐなければならなかつた。殆ど毎日のやうに彼は侯爵夫人に宛てた手紙の中で、この事に就いて彼の悲哀を述べてゐる。そして再び一緒にゐる日を待ちこがれてゐる。侯爵夫人は又離れてゐても、リストの日程を定めてやらうと心配をしてゐた。彼女は彼がワイマールの活動と社交的な義務によつて、彼の仕事を餘りひどく抛棄しないやうにと、特に毎朝ミサに出かけるやうにと彼に忠告してゐる。侯爵夫人は非常に敬虔な人であつた。そして「私が貴女から受けた凡ゆる好意の中で、確に一番大きなものは、私の若い頃の信仰に私を全く戻してくれたといふことです。」と、リストは彼女に感謝してゐる。リストも亦深い宗教的な人であつた。そして如何に彼が心豊かに、そして朗らかになつたとしても、彼が死ぬまで自然科学の凡ゆる業績に對して、或は哲學の凡ゆる體系や論說に如何に熱心に關與しよう、かゝる哲學上の問題の論論に如何に熱心に參加しようとも、常に彼の心の片隅には、凡ゆる疑を押しつけてしまふことの出来ないもの、即ち或る無邪氣な、信神深い氣持が、いつも戻つて來るのであつた。「神の存在に關する凡ゆる形而上學的な證明が、哲學上の論争によつて否定されるといふことが、若しも確定されたにせよ、而も尙い

つも何處までも克服され難いものが残つてゐた。吾々の恐怖による神の肯定、吾々が神を求める要求、神の愛を求る吾々の精神の情熱、以上の事が私の心につばいである。そして私の最後の息を引取る時まで信じて疑はないのだから、私にはもう何も證明などは必要でない。」

一八五一年四月十日リストは管絃樂團員の未亡人及び孤兒の年金のために管絃樂の大演奏會を催した。彼はベルリオーツのハロルド交響樂を初演したが、この交響樂を彼は高く評價してゐた。この曲に對して後年彼の素晴らしい論說「ベルリオーツとそのハロルド交響樂」に於て世人の理解を呼び覺まさうとしたのであつた。この時ワイマールの人はこの曲に對して餘りにも興味を示さなかつた。そして會場は慈善の目的にも拘らず半分も入らなかつた。

リストがもう數回歌劇を指揮し、その中には二度もローエングリンがあつたのであるが、その後彼は五月末に再びアイルゼンに歸つて來た。アイルゼン滞在のこの時に當つて、彼の友ショパンの想ひ出に捧げられた、彼の大著の原稿の訂正を加へたのであつたが、この本はワイマールで侯爵夫人と一緒に完成し、先づ以て「ラ・フランス・ミュジカール」誌に印刷された。

七月の終りになつてやつと侯爵夫人が全快したために歸還の旅に就くことが出來たが、色々な處に寄道をしたので十月までかゝつた。ケルンやボンを通つてラインを渡り、先づフランクフルトへ行つたが、そこでリストはローエングリンの準備をしてゐた樂長グスタフ・シュミットと親しく交はるやうになつた。この時代のことから次のやうなエピソードが傳へられてゐる。フランクフルトでリストは或る日のことアンドレのピアノ倉庫で、或るデンマークのピアノ名手に出會つたが、この人は自分の新しく作つたピアノ協奏曲を弾いて聞かせようとした。でも彼は管絃樂の各パートのピアノスコアを持ち合はせて居らず、唯三十の組織で書かれた總譜を持つてゐた。「私は自分でもそれを弾く



のに骨が折れます。此の總譜をあつさりと讀んでのけるやうなピアニストを今まで見たことはありません。」——リストは答へた。「お、私は唯の平凡な音楽家ですが、どうぞ一度やらせて下さい。勿論私は貴方によく見ていたゞかなければなりません。」リストは葉巻に火をつけてそしてピアノの上に置いた。彼はピアノで如何にもこて／＼した樂器法で出すやうな耳をつんざく程のえらい管絃樂的效果を出したので、間もなく獨奏してゐるなどとは何人も聞けなくなつた。それは演奏中時々機智に富む言葉を發したり、時としては一方の手だけで演奏し、他方の手では耳たぶを丸めてみたり、葉巻をくゆらしたりした。聽いてゐる人は石のやうに固くなつて坐つてゐた。曲が終つた時にリストはこのデンマーク人の凡ゆるお世辭をさへぎつてかう云つた。「樂器法といふのはピアノの音に比べれば反つて音の充實をたやすくすることになるのでせう。貴方は全く立派な手記の樂譜を持つてゐましたね。だが二三、人間らしい間違ひがチヨ／＼入つてゐました。いゝですか、その頁を折つて見ませうか、此處には第二ファゴットの所にハ音の前のシャープが抜けてゐますね。またありますよ、Bクラリネットを移調することを忘れてはなりませんよ。あゝまだチヨ／＼ありますね。」

ドレーズデンではシューマン夫妻を訪れた。この時の會合も不調和に終つた。リストは多くの彼の最近の作品を彈いて聞かせた。「がどうだらう、此の作曲はひどいものでした。私共は二人でそれを聞いて、全く悲しい氣持になりました。すつかり憂鬱になりました。リスト自身狼狽してゐたやうに思つたので、私共は何も云ひませんでした、心の中で憤慨した時は誰だつて何も云へないものです。」とクララはこの事について彼女の日記に書いてゐる。一八五一年十月十二日にとり／＼ワイマールに再び到着した。「リストは暫くゐなかつたので、今やもう一度人々に全く明らかに次のことを表明したのである。即ち彼がゐなければ、又は彼の名前の輝きがなかつたなら、そして又彼の天才的な

個性の働きがなかつたら、ワイマールの音樂生活は衰微するといふこと、及び彼がワイマールを必要とするのではなく、寧ろワイマールが彼をどうしても必要とするといふことが、はつきりと判つたのである。」とビュローは彼の姉妹に報じてゐる。この年の終りまでリストはたゞ三回だけ劇場で指揮をした。といふのはメモバーが少くなつたし、又彼がゐない間に衰弱した習慣が、凡ゆる藝術的な行爲を不可能にしてゐたからである。彼の友ゲナストに宛て、リストは次のやうなことを書き送つてゐる。「あなた方のやうな立派な藝術家にとつては、混亂がこんなに永引かされたのでは、痛風よりもつと我慢が出来ません。どうぞ直ぐ正當な忠告と善良な行爲を以て助けて下さい。あなたは古い泥沼から立派な物を作り出すことに慣れてゐますからね。私のやうなつまらない者でも全然ないことはないのですが、あなたは本當に私に同情してあなたが私に示してくれたやうな深い而も事情によく即した改革をすることについて、何處までもやつて行くやうにさせて下さい。藝術に對しても亦吾々の名辭に對しても現在の狀態にしつかりこびりついてゐることは全く破滅的なことだといふことが、どうしても決つてゐます。従つて中途半端なことや山師的なことは全く取り除かなければならないし、どうしてもキチンとした標準を掴まなければならぬのです。」

リストがゐない間にワイマールで非常に繁茂した激しい陰謀や敵意は、その親分は主としてその年の間年金を貰つてゐた樂長シェーラルであつたが、この陰謀や敵意は成る程リストがやがて來ると黙つてしまつたけれども、歌劇の水準を再び高めるといふことは困難であつた。それにもつと困難にした事情があつたのだが、それは監督のツイーゲザールが眼病のために一時隱退し、フォン・ボーリュー氏が差しあたり（一八五二年以後は常任）この仕事をすることになつたからである。かくして歌劇については何も述べべきこともなかつたので、リスト及び彼を取り巻くグループは他のことで働かうとした。最も手近かなものとしてワイマールの演奏會を改革することが問題になつた。此處では



尙凡て旨く行かなかつたといふのは大演奏會をするに適するやうな演奏場がなかつたので、これは何時も劇場で行はれた。そして獨奏會などは非常に少かつたのである。そこで樂團の最も優れた人々、例へばヨアヒム、シュテール（一八五一年十二月以後エーベルワインの後繼者として指揮者の任にあつた）ワルブリュール及びコスマンが絃樂四重奏團を創立したが、これは毎冬四回の室内樂の夜會を催し、それには普通リストの弟子の一人がピアニストとして共演したのであつた。

アルテンブルグのリストの最初の弟子の中にはアレキサンダー・ウインターベルガーがあつた。一八五一年六月半ばにはハンス・フォン・ビュローが彼の後を追うた。リストがアイルゼンから歸るまではビュローはアルテンブルグに泊つてゐた。そしてヨアヒム・ラッフはリストの代りに、彼のために教へなければならなかつた。その他ディオニス・ブルックナー、ハンス・フォン・ブロンズアルト、カール・クリンドウォルトがやつて來たが、此のクリンドウォルトはアイルゼンでリストを知つたのであつた。後になつて少年のタウジヒ（一八五五年）、ユリウス・ロイブケなども之に加つた。このグループにはその他尙ビアニストでないペーター・コルネリウス（一八五二年以後）とフェリックス・ドレーセケも擧げられるが、このドレーセケは然しワイマールにずっと永く生活してはゐなかつた。この弟子の仲間には後年の「宮庭庭園」のグループとはまるで違つたものである。此處には特に眞面目な音樂家達が居り、そして彼等はリストを通じて凡ゆる領域に於ける總括的な音樂の教養を受け、そしてみんなで一緒に新しき道で創作し、努力しようとしたのである。そして素晴らしき勞作がなされ、偉大なる事柄が行はれたのである。「吾々の藝術の努力が過去とか過去の巨匠を研究することにあらねばならず、時代の變遷衰退の中に絶えず變つて行き、衰んで行く形式を盲目的に模倣してはならないといふ確信、そして又人間全部は音樂家とともに昂揚されなければならない故に、特別な教

育、一面的な熟練さ、一面的な學問では、藝術家にとつて最早充分でないといふ確信を、藝術家達が獲得する時にのみ、音樂は將來を持つ事が出来るのである。教へ子がその先生から、眞の音樂家にならうとするには十九世紀に於ける一人の重要な人間であらねばならないといふことを教へられる時に初めて、藝術はその威力を持ち、大衆に注意を喚起させるのである。」

弟子達の數人は何處までもその重點をピアノに置かずして、リストと作曲を勉強することに置いてゐた。ピアニスト達は毎週三回教授を受けたが、その教授は大抵演奏とか、音樂的な事柄に限られてゐた。そして技巧的な事柄には殆ど觸れられなかつた。リストは非常に澤山演奏して見せ、感激的な藝術の門弟たちは彼の示した手本に就いて勉強した。「さまよへる和蘭人の動機は星なき闇に於ても吾々の目じるしであつた。ローエングリンの王様のファンファールはリストと別れる時の吾々の最後の挨拶であつた。」アルテンブルグ時代の多くの弟子達は勿論一般的に言つて、保守的な人であつた。そして彼等はリストとワグナーに眩惑して混沌としてしまひ、且つこの混沌は後年彼等にとつて致命的なものとなり、彼等をして背徳者、脱黨者と呼ばしめるに至つた。彼等の心の亂れと内的不調和の原因は本當は自分達にあつたのであるが、彼等は以上の事態そのものに責を負はせた。

凡ての弟子達の中でリストの愛弟子はハンス・フォン・ビュローであつた。そしてリストは彼を人間としても藝術家としても尊重してゐた。彼は一八五一年の秋から一八五三年の二月まで彼を息子のやうに愛して居り、リストの所に滞在してゐた。それは、これから巨匠の援助を得てウィーンに演奏家として打つて出るためであつた。ハンスは作曲の仕事もやつた。そしてリストの指導の下に、就中一八五一年十二月七日にはビュローはシェークスピアのジュリアス・シーザーのために音樂を作り、好評を博したのであつた。一八五二年の初めにヘンリエッテ・ゾンタークが



ウィーンで多くの旅興行を終へた時、ビューローはその有名な「少數者の意見」に於て勇敢にも彼女の非音楽的な巧妙なる演技に對して試合を申出た。そして若しも彼が多くの點で何かと非常に鋭敏に擱んだとするなら、彼の明敏なる論説は全く彼を取り巻く藝術の理想の空氣、リストの中に具體化された藝術の理想の空氣を吸つて居るのである。そしてそれは、人々が大抵の劇場で依然として共存し續けてゐた無頓着に對する公けの抗議であつた。

ワイマールに於ても状態は尙根本的には變つてゐなかつた。そこでリストは當時の局面を明らかに暴露した長い文書を大公妃に宛てて書き、その助力を求めると思つた。といふのは、さもなくば彼はもはや從來通り歌劇を自分の指揮下に戻すといふ榮譽ある道を歩み續けることは出来ないと思つてゐたからである。此處には就中次のやうなことが述べられて居る。「演劇は次の範疇に分類することが出来る。即ち第一は營業的企畫、之は公衆にとつて日の享樂の對象を作り、買ひ手を惹きつける對象を作り、そして通常はその時々公衆の趣味の方向の善惡と同時にその趣味の迷ひや日常の無知を表すものであります。第一の場合には支出が収入に合はねばならないといふことは言ふまでもありません。が第二の場合には収入といふものが決して作品の選擇や上演に影響を及ぼしてはならないことは私には明瞭なことに思はれます。ワイマールは、上演された作品の眞の價値を評價し得る公衆を全然持つてゐないので、その演劇は隣接諸都市の興味に訴へる時にもみ榮光を得ることが出来るのです。此の公衆を獲得せんがためには、吾々はどうしても次のやうな作品に限つて上演されねばならない。即ちその作品と言ふのは、その評判が理解力ある公衆を惹きつける時に、初めてその眞の成果が體驗されるやうなものである。」

かくしてリストはワイマール劇場の最も著しき缺點を指摘した。非常に劇的なローエンダールの練習の時間に目立つて來た缺點を認めて、彼は改良の提案を出し、次のやうに結んでゐる。「從來私は最も必要なことばかりを要求し

て來たのである。……然るに今や、征服した地方を、私が從來指示して來た方法で以て確保するといふことは、私にはこれ以上出来ない。否これ以上前進することが出来ないといふ瞬間が來てゐる。熟練といふものは、メムバーの數のやうに物質的な力を増大することは出来る。更に増加することも出来る。が然しそれは限界を持つてゐる。そして望ましい目標に到達せんがために、物質的な力の價値を三重にすることが必要ならば、唯單に熟練にのみ頼るといふことは益なきことである。何故ならば人々は遅かれ速かれ完全に失望するだらうから。」

リストは然るになほ新しい行動の準備をした。彼は幼な友達ベルリオツの作品のことを想ひ出した。ベルリオツの作品は未だドイツではそんなによく知られてゐなかつたのである。リストはワグナーのやうな輝かしい勝利の道が自分に開けてゐなかつた時にも先づベルリオツのことを考へ、出世の絲口を開いてやつたのである。そして後にはビューロー、フェリックス・モットル等もかうして世に出ることが出來たのである。ベルリオツの歌劇ベンベヌート・チェリーニは既に一八三八年にパリで、次にロンドンで上演されてゐたが、目覺ましい成功は收めず、間もなく忘れられてしまつてゐた。リストは今やその作品をリッチウスの翻譯によつて甦生させようと計畫した。大公妃の誕生日にその上演は行はれることになつてゐた。そしてベルリオツは既に出席する約束をしてゐたのであつたが、テノールのベックの病氣のためにその上演は延期されねばならなかつた。そしてベルリオツはロンドンで演奏會の契約をしてゐたので、後程の上演には出席することが出来なかつた。三月二十日にその作品は遂に脚光を浴び、そして直ちに二回繰返された。ブレンデルは之に關して次のやうに「新音樂雜誌」に書いて居る。「リストの指揮によるワイマールでのチェリーニの上演は、ベルリオツの如きドイツ精神に實に類似した藝術家の全的無知と誤解に對する賑やかな抗議であつた。ワイマールのリストの活動は最も賞讃すべき最も模範的なものである。以前はワイマール



は詩歌のために存在したのであるが、今や音楽のためのものとなつて居るかのやうに思はれる。ワイマールは今やその方法の偉大さによつてではなく、實に其處に支配する精神によつて、ドイツの最も重要な音楽の町となつた。ワイマールの劇場の観客は他の都市のそれよりもよくなく、未だひどいものである。が然し、時が経つにつれて完全によい趣味を示し、單なる娯樂の喜びよりも一層高い興味を示してゐる極く佳かの人々は、リストの藝術活動の淨化された生氣ある影響を受けて修養して行くのである。が然し、首腦部の人々は依然として此處でも如何なる鑑賞も出來ず、而も鑑賞する場合に、自分の凡庸さを反映してゐるものしか喜ぶことが出來ず、且つそれも秣槽に向つてゐる馬のやうに、受動的に進むことが出來ないのである。そしてその際には偏見邪推に充ちた、その上に尙無見識と、情熱的な態度をするのである。この公衆が今度チェリーニの初演を見に行き、自然的な好奇心と當地の地方新聞のために煽動せられて起つた此の新作に對する不都合な先入見と混合した一つの氣分で見に行つたのである。そして地方新聞が前以てリストの活動に關して掲げる凡ゆる表現が悪評であるといふことは、決してよい結果となるのである。それ故第一回の上演はかなり冷やかで控へ目のやうに思はれた。第二回は前よりも観客は幾分少かつたが、激しい喝采裡に進んで行つた。」

このベルリオツ祭は、十一月十四日より廿一日まで催された「ベルリオツ週間」でもつと盛んに繰返された。リストは之に關してマゲデブルグの一人人に次のやうな手紙を書き送つてゐる。「十一月十五日にベルリオツがこゝへやつて來ました。十八日と二十日には『チェリーニ』が演奏され、二十一日には交響樂『ロメオとジュリア』と『ファウスト』の演奏が行はれます。貴方は現代藝術に於て一層高い意義を確かに有つてゐるベルリオツの作品に關する私の見解を御存じの筈です。かうした作品をドイツで最早無視してゐることが出來ないから、私がこゝで取扱

つてゐるのは全くさゝやかな手段ではあるが、こんなことには頓着せずに、その作品を、兎も角少くともワイマールで保持することは私の義務であり、榮譽であります。」

この演奏の試演のことに就いて、それに參加した或る人は、私に次のやうなエピソードを話してくれた。

「宮廷劇場の舞臺で行はれた試演に際してリストは、パルケット(前部平土間)に席を占め、屢々ベルリオツと意見を交はしてゐました。ベルリオツが活潑に、彼の細い腕を動かしてゐる有様、そして白髪のは今でもありありと私の目前に浮んで來ます。私共第一級の學生が唱はねばならない學生の合唱は、なか／＼うまく行きさうもありませんでした。Jan nox beate velamina panditを詩脚に分けて讀むのは、大變なことだつたと思ひます。その時突然リストは、彼の長い脚で舞臺の上に攀ぢ登つて來て、嚮導者として、私共の少人數に加はつて歌つてくれました。——すると今度は立派に出來ました。ベルリオツはリストに握手し、リストは又もパルケットへ降りて行きました。」

リストによつて指揮されたチェリーニの演奏には、ビュロー、ブルックナー及びグリンドウォルトも管絃樂で打樂器を受持つた。ベルリオツは感激を以て祝はれ、宮廷から鷹の勳章を貰つた。議事堂に於ける藝術家の祝宴が、この愉快な日の最後を飾つた。

而も、このベルリオツ祭の間にあつた夏の數箇月には、注目すべき色々な事件が起つた。一八五二年三月十四日には、ローベルトとクララ・シューマンがライプツヒで大きなシューマン演奏會を催したが、之にはリストがヨアヒムと一緒にワイマールから出かけた。この時シューマンは、リストに對して又もや非常に消沈せる態度を示したが、それでも「マンフレッド」をシューマンの音樂をつけて、ワイマールで上演しようといふリストの提案に感激して同



意した。マンフレッドは六月の中に、三回も上演されたが、大した成功も収めなかつた。クララはそれを自然リストの「悪い」「間違つた」見解の責任に歸した。それでもリストはシューマン派の人々によつて、彼に與へられた色々な敵對によつて、シューマンの作品に對する彼の宣傳を鈍るやうなことをしなかつた。一八五五年に、彼は以前ライプツヒで失敗し、全然姿を隠してしまつた歌劇ゲノフェアをワイマールで上演した。それに又、彼はクララの希望により、ワイマールの宮廷で演奏する招待をクララに得させるやうに取り計らつた。そして同時に、大きな公開のシューマン演奏會を目論んだが、その時は、彼女はリストの指揮の下に、イ短調協奏曲を演奏した。その後間もなく、彼は二つの素晴らしい論說「ローベルトとクララ・シューマン」を發表したが、その中で彼は、シューマンの現象に名譽ある記念碑を置き、そしてクララのピアノリストとしての優秀さにも公平な判断を下してゐる。以前、シューマンの作品を捧げられたのに對して、彼は彼の最も大きなピアノ作品、ロ短調ソナタを捧げて、之に返禮をした。ところがシューマンは既に精神的に破綻を來して居り、不成功によつて心を痛めてゐたので、リストの努力に對して理解を感じることが出来なかつた。ワーグナーの音楽を、シューマンは「素人臭い」と思つてゐたのであるが、このワーグナーに、リストが心酔してゐることは、シューマンを非常に面白くなくした。そして保守的なクララは、もつとひどくリストを嫌ふやうになつた。ウィーンでモーツァルト祭（一八五六年）に共演するのを、彼女が拒絶することをやつてのけたのは、唯常にリストが指揮をしたからであり、同様にツウィッカウでの記念額の除幕式に共演しなかつたのは、リストがゐるためであつたのだ。リストのピアノ演奏に就いても、彼女はどうしても悪い批評をした。それどころか之は彼が關係した凡てのことにまで押し及ぼしたのであつた。「リスト以前は、ピアノを演奏したのですが、リスト以後はピアノを打つのであり、唯ぶん／＼鳴らすのです。彼はピアノ演奏の没落を知つてゐたのでせうか。」又或る時

には「リストの演奏は、物凄くもので、恐ろしいものです。」と云つた。彼の弟子達でも、もつとよいといふことは出来ない。タウジヒはビュローが云つてゐるやうに、「太鼓叩きです。そして而も、最も退屈なピアノリストです。といふのは、熱情とか感激などといふものは少しもありません（彼はペテルスブルグで二回、成功裡にリストの夕べを催したことがあつた）。ゾフィー・メンテルもクララの眼からすれば、少しも同情されなかつた。クララが、それからローベルトの死後、彼女の夫の作品の改訂をやつた時、この新版にシューマンがリストに捧げたといふことが簡単に隠されてしまつた。このやうな無禮、そしてシューマン派の者がリストに向けた追ひ立てる氣持は、勿論リストに苦痛に感ぜられたに違ひないが、リストは死ぬまでシューマンの作品に對して正直に感謝し、それを彼の弟子達を通して世界に擴めることを惜しまなかつたし、又クララをいつも保護して立派に援助をしてゐたのである。

ワイマールの大膽なる行爲が世界に知れ渡つたので、リストは到る處から演奏會を指揮したり、劇場の上演その他を指導するやうにとの申込に忙殺された。次のやうな未だ公けにされてゐない、マग्デブルグの友人に宛てた手紙にあるやうな拒絶は、かうした申込に對するリストの態度を明らかに知らせてくれるものである。「私のこの責任上、私はワイマールから特に冬の間は、時々でも離れることは出来ない状態なのです。劇場關係でも、又宮廷演奏會に關しても私がゐることは絶対に必要なのです。時々私をもつと活潑にすることは私にとつても結構なことですが、この樂しみも數日を必要としたり、或は屢々行はれる此處の要求に衝突する場合には、私は度々斷らねばならないことがあります。——それに私がタンホイザー序曲の指揮者として參加するなどといふことは餘計なことだと思ひます。貴方には不遜に見えるかも知れませんが、一般に普通の演奏會には、私のやうな者はもう必要でないといふことを申し上げねばなりません。若しもしつかマग्デブルグで何か特別なものをやつて見ようといふことになり、そしてその時、



私を結局指揮者として選び、全體の指圖を任せて下さるやうな事になつたら（私は全然呼ばれ度いとは思つて居ませんが）、別に又御相談に應じ一定の申合せを致しませう。それを私は全然拒絶したりは致しません。私の理想の仕事にピッタリと合つたことですから。——唯、然しこのやうな特別な場合だつたら、マゲブルグのために、私の微力を盡し度いと思つてゐます。といふのは、私は今まで永い間、そして今でも尙、出来るだけ演奏會には原理的に出ないことにしてゐますし、又この意味で凡ての申出にお答へしてゐたのです。」

一八五二年六月、リストはバレンシュテットの第三回音楽祭の指揮を引き受けたが、それには彼によつて提案されたプログラムと、それに相應した効果が實現されることを承諾するといふ條件の下であつた。この音楽祭の大なる意義は、初めてワイマールの勢力範圍外で新しい方向をとらせるといふところにあつた。プログラムは次の通りであつた。

第一日 六月二十二日

- 一、「タンホイザー」の序曲……………リヒアルド・ワーグナー
- 二、「さまよへるオランダ人」よりの二重唱（ミルデ夫妻）……………リヒアルド・ワーグナー
- 三、音楽の力……………フランツ・リスト 管絃樂伴奏、ソプラノ獨唱（ミルデ夫人）
- 四、合唱幻想曲……………ベートーヴェン（ピアノ、ハンス・フォン・ビューロー）
- 五、オルフォイスの一部……………グルック（シュレック嬢）
- 六、第九交響曲……………ベートーヴェン

第二日 六月二十三日

- 一、「アルフレッド」の序曲……………ヨアヒム・ラッパ
- 二、天使の愛餐……………リヒアルド・ワーグナー
- 三、ハロルド交響樂……………エクトール・ベルリオーズ
- 四、ワルブルギス祭の前夜……………メンデルスゾーン
- 五、「タンホイザー」の序曲（要求によつて繰返された）……………リヒアルド・ワーグナー

ハンス・フォン・ビューローは、この兩日の經過について次のやうに報じてゐる。「リストは實に奇蹟を行つた。三日間に亘る前稽古は皆順調であつた。而も種々な所から集まつて来て、お互に見知らぬ共演者達（約三百人）が丁度みんな一つところに屬してゐるかの如くに練習したのである。指揮する時のリストの人格は凡ゆる者を感じさせ、心を奪つてしまつたのである。企畫者、旅館主、最も禮義正しい教養のある者は、凡ての事をかなり非實際的に行つてゐた。幾つかの好意を持たない陰險なる新聞記事は、折悪しくもこの催しを無効に終らせようといふ肚だつた。かういふ新聞記事が、たとへば初めは共演することを固く約束してゐたシュテルン合唱團の参加を邪魔してしまつたのである。デッサウの老いぼれたシュナイダーも、吾々に悪性の悪戯をやつたのである。その樂團は共演することを約束し、シュナイダーも適宜に協力することを公表してゐたが、彼は自分の作曲が一つも演奏されず、おまけに指揮もリストと分擔してやらねばならないといふことを非常に憤慨してゐたので、彼はこつそりと樂團の全樂員に、一人々々自分に對する忠誠から、自分が同行しないならば誰一人として参加しないといふ證書に署名させたのである。案の定今誰も來てゐない。管絃樂はベルンブルグやゾンデルスハウゼン、ワイマール管絃樂團の最上クラスから成つてゐた。



そして近邊から来る筈の、夫々の音楽家達は未だ来てゐなかつた。合唱に参加した團體は、次のやうなものだつた。即ちベルンブルグとケーテンの聲樂協會、そして特にライプツヒの學生合唱協會、即ち樂長の指導の下に、みんな新鮮な美しい聲に恵まれてゐる、數にしても六十人の歌手達からなるパウラーネル合唱團であつた。ローベルト・フランツも亦、ハルレから三十人の男女を連れて到着し、ベルリンの人やライプツヒの人も若干やつて來た。演奏は拔群の成果を以て進んで行つた。プログラムは、彼の極めて特徴のある傾向にも拘らず、物凄く喝采を博した。第二回の演奏會は午前中は稽古に向けられねばならなかつたので、午後三時にやつと開かれた。非常に熱心にやつたにも拘らず、皆元氣であつた。ベルリオーツの交響樂は、割り當てられた時間が僅かだつたので、唯中間の二樂章しか演奏することが出来なかつた。之に反してワルブルギス祭の前夜の後では、物凄く要求に應じてタンホイザー序曲が繰返され、その序曲は今度の催し全體の鎖の第一環と最終環をなしたのである。結果は實に法外なものだつた。二回とも萬歳と喝采の聲を以て迎へられたリストは、最後に列席の夫人達全部から投げられた花飾りを受取つた。

市は祝典の終つた後で、ハルツ山の最も優れた場所の景色のついた豪華なアルバムをリストに贈つた。リストは演奏會の終了後、直ちにワイマールへ歸らなければならなかつた。それはこの夏に二三週間アルテンブルグに彼を訪ねて來た母が、彼の留守中に、エルフルトへ歸る途中、足を挫いたからであつた。だが、その事故は悪い結果を伴ふやうなことはなかつた。リスト夫人は、次の年の五月まで留り、即座にエルフルトへ急行した侯爵夫人に手厚く介抱された。然しこの素朴な女は、このやうな宮廷風な環境には幸福を感じなかつた。そして彼女のフランツの所に引續いて定住するといふ考へは、又もや間もなく棄て去られてしまつた。

リストが休暇旅行を放棄してしまつたこの夏に、ワイマールの仲間は今一段と非常に喜ばしい成長を遂げたのであ

つた。即ちペーター・コルネリウスが仲間になつたのである。コルネリウスは一八五二年三月に彼の伯父とシュレージンガーの紹介狀を持つて、リストの口から、自分に音楽家としての才能があるかどうかを適當に判斷して貰はうとワイマールへ急行して來たのであつた。彼は非常に親切にもてなされ、この事に關して兄のカールに手書き送つてゐる。「私の當地での滞在は、確固たる勉強と、最高の藝術享受とに分たれて、貴方がお考へのやうに、私の未來の全生活にとつて決定的なものとなつてゐます。リストは私の勞作に絶えず、非常に細々とした注意をしてくれました。彼の音樂の友達と一緒にそれらを繰返し繰返し演奏したりしました。彼の窮極の判斷と忠告は、私が斷乎たる決意を以て教會音樂に突進しなければならぬといふことでした。……貴方には、リストが如何に善良であり、偉大であるか分りません。彼は凡ての方面に對しての、最高の實際的な完全さと、若者を教育して行く能力とを兼備してゐます。」ペーターの人となり非常に關心を持つてゐたリストは、その無数の作曲の試みを唯條件付で褒めることが出来、彼には凡ゆる音樂に、どうしても必要だと思はれたやうな、生々した精神とか、獨自の表現能力の或るものをペーター自身の教會的作品の中にだけ見出したのである。コルネリウスは經濟的事情のために、暫くしてワイマールを去る心算であつたが、一八五三年三月に歸つて來て、アルテンブルグにリストの客となつた。秋からはずつと彼はワイマールに定住して、そこでハンス・フォン・ブロンズアルトと一緒に住んだ。巨匠が經濟的にも彼を援助しようとして、斡旋した個人教授と文筆の仕事（彼はリストの多くのフランス語の論文を翻譯した）が、彼の生計を助けたのである。コルネリウスはこゝで、ビューロー、ブロンズアルト、ダムロッシュと友人關係を結んだ。侯爵夫人も彼に非常に暖かい關心を持ち、彼を動かしアルテンブルグへ、一八五六年に完全に移らせたが、彼は嘗てその「お抱へ詩人」であつたことがある。リストとコルネリウスとの間の關係は、やがて非常に親密なものとなつた。「私達の友情は、藝術



と宗教に於ける同一の信念に根ざしてゐます。後者、即ち宗教の點では、凡ゆるその他の友人の誰一人として私とのやうには、彼と一致する者はありません。彼は又私を非常に優遇してくれ、凡ゆる態度の中に非常な友情を表はします。而もリストは、私が爲し能ふ最上のものを持つてゐることになるのです。何故ならば、彼は偉大なる、一點の非の打ちどころのない友人であり、數世紀に亘つて渴望される偉人の一人であるのですから。」

之に反して、友人の他の一人、ヨーゼフ・ヨアヒムは一八五二年の終りに、ハンノーヴァーの樂長の地位に就くために、ワイマールから離れて行つた。友人達は、彼のために盛大なる告別祭を催し、その告別祭はリストとヨアヒムによるクロイツェルソナタの共演によつて音樂的に清められたのである。

一八五三年の初めにはリストはワーグナーの作品を彼の大膽なる仲間の頭に頂くと同時に、二月廿七日から三月五日までワイマールだけの力で、オランダ人、タンホイザー、ローエングリンを上演したワーグナー週間を催すことによつて、彼のこれまでのワイマールでの活動の最も榮えあるものとした。そしてそれらの中でオランダ人は祝典上演として二月十六日にワイマールでの初演が行はれたのであつた。これは當時の手段としては冒險的であると同時に、驚くべき行爲であつた。だが然しリストは又これを以て、彼のワイマールでの活動の限界をなすものと思つた。そして彼は段々と耐へ難きまでに目立つて來る缺點の改良といふことは、もうその經驗に照らして期待することが出来なかつたので、大公に辭職することを願ひ出た。書面には次のやうに述べられてゐる。「歌劇が此處では餘り重く見られないといふ吝嗇な條件であつたら、私は自分の活動を何等かの仕方で行くことは不可能なことだと思ひます。ワイマールの諸侯達が色々と面倒を見てくれたために名聲を擧げたのですが、それとともに私達が努力したために特徴が出來て、名聲が出來たのであります。それ故吾が大公殿下には、私が將來、全く期待を裏切る事情にあつて、

そして又萬一當事者がワイマールの演劇を促進すために爲された努力を無視するやうな事情にあつては、永久的な協力を中止するといふこと、且つよく／＼考へた擧句、私が自分の思ふまゝに行動するといふことは極く當り前のことと思召されることせう。大公殿下は善意を以て私に敬意を表されたのだと思つてゐます。といふのは私は自分の時間と才能をより有益に使ひましたので、その性質に於ても數に於ても克服することが出來ない多くの困難に付き纏はれるやうな無駄をすることなく、私の最上の年を過したのだと思つてゐます。大公殿下は、前以て充分なる方法が講ぜられる時のみ問題となり得る性質の音樂學校の設立とか、その他の計畫について、又もや私に語られましたので、私は安心して殿下が本當に藝術を促進することを望んでゐられるのだらうと信じてゐます。この状態に於ては、少くとも二三年の間、人々が自ら進んでやらうとする方法を、この流儀で行つて一定の意義を得ると思はれる一事のみ集中せしめるといふことが望ましいことせう。若しもこの劇場がまだ貴殿がたの愛顧を受けてゐるとしますならば、私がさう宣言したやうなこの消極的な状態は、私が何回も／＼詳細に述べたこの提議を、人々が完全に聞き届けなくなつたのですから、私の方に責任があることになるわけかも知れません。私は人々が將來にどうしてもなくてはならないやうな必須のことだけを求めました。即ち合唱の根本的改革と、管絃樂の適度なる増大を。」

「新音樂雜誌」にこの時に關する次のやうな短評が載つてゐる。「既に日頃より氣遣はれてゐた、而も反抗的なフランス・リストのワイマール樂團長の辭職が今や眼前に迫つてゐるといふことには十分なる根據があると思はれる。リストは最善を盡してその組織の多くの制約を受けつつ滯つて來たのだつた。そしてこのリストの樂長の地位の廢棄といふことは、必ずやその組織に臆病な不實行といふことを結果するであらう。リストが引退する時は、單にワイマールだけでなく、ドイツもその最も天才的な最も精神的な樂長を失ひ、ドイツ歌劇はその最も立派な誇りと最も強力な



る足場を失ふのである。」

大公はその願ひを聞き届ける代りに又もや唯リストの文書に對して美しい言葉で返事を送つただけであつたので、藝術家リストは差し當つて歌劇の樂長であることを斷念した。そして永年に亘つてワイマールの誇りとしてゐた上演目録も全部彼と共になくなつてしまつた。四週間に亘つて歌劇はもうすつかり休演した。リストは之に反して宮廷演奏會には幾度も指揮し、そしてカール・フリードリヒ大公の行政廿五周年記念祭を機とする祝典の準備をしたのであつた。六月十五日に行はれた祝典にはザクセンの皇帝も臨御された。この機會にリストは、大公の調停によつて、既に永い間非常に熱望してゐたワーグナーの赦罪を實現させようとした。だが未だそれは不可能であつた。

この夏には又永い間熱望されてゐたリストのチューリヒ訪問も行はねばならなかつた。彼は七月二日（一八五三年）にチューリヒに着いた。ワーグナーは馬車で彼を迎へに出て、ツェルト街の彼の住居に恭しく案内した。リストは翌日侯爵夫人に手紙で到着したことを書き送つてゐる。「ワーグナーは話し聲の中で何か若鷲のやうな叫び聲を出します。彼は私と再會した時、少くとも十五分間は喜びの餘り泣いたり笑つたり大騒ぎしたりしました。健康さうには見えませんが、四年前に比べると遙かに瘦せてゐます。彼の顔つき、特に鼻や口は精細な線と非常に目立つ鋭い表現をもつて來ました。衣服は本當に粹なものです。彼は淡い薔薇色の帽子をかぶり、決して平民的な態度は見せません。そして廿回以上も私に斷言しました。彼が當地に滞在して以來、彼は逃亡者の黨派とは完全に交際を斷つてしまひ、實にその上、市民やカントン貴族の上流社會で喜んで訪問を受け、何時も歓迎をして來ました。音楽家達に對する彼の關係は大將軍を思はせるものです。藝術家に對する要求は殘酷なる峻嚴さを有つてゐます。彼は私に對しては全心的な愛を持つてゐます。そして何時も「まあ僕がどんなものかと思ふかね」と云ひます。——彼の名聲や人

氣に關する事柄が話題に上る時には——彼は一日に二十回も私の頸に抱きつきます。——彼はそこら中をころげ廻り、口をバク／＼させて、何時も馬鹿げたことを云ひます。——そしてその時更に、彼にあつては廣い意味の一般概念であるユダヤ人を罵るのです。そして彼が火花を散らす時には、何かヴェスヴィアス火山のやうな偉大な壓倒的な性格の言葉をわめきながら、炎の束と同時に、薔薇や接骨木ニハトコの花束を撒き散らすのです。」

その翌日更にリストは次のやうに述べてゐる。「もし彼のかうした態度を誰かに云つて聞かせれば、もう魔術にかけられたやうな氣がするでせうし、そしてとてもはつきりその姿を思ひ浮べることは出來ないと云つてゐます。彼に熱心に服従する人々に對してさへも、上の方から見下ろすのが彼の癖です。彼は何處までも主權者の態度舉動を持つてゐます。そして誰のことも顧慮しませんし、或は少くとも隠しごとなど少しもしません。だが私に對しては完全に例外です。昨日も彼は私に『私にとつては全ドイツが君の人格の中に一致してゐます』と云ひました。そして彼は如何なる機會にも友人知己にこのことを感じさせるやうにしてゐます。」

殘念なことにリストの滞在は僅か八日に過ぎず、この八日は飛ぶが如くに過ぎて行つた。又ワーグナーのチューリヒの友人達、特に「グリネトリの兄弟」と後年名づけられたジョージ・ハーウェーとやがて親密な關係が結ばれた。といふのはハーウェーがグリネトリのフィールワルトシュテット湖へ小旅行をしたときに、兩人は兄弟の契りを結んだのである。リストはこれから詩人ハーウェーがその歌詞を書くことになつてゐたオラトリオ「キリスト」の計畫を彼と語り合つた。それは計畫されたまゝであつた。或る晩ワーグナーがハーウェーのところまでニーベルンゲンの中の幾ヶ所かを讀んで聞かせたとき、リストはワルクニールの最後の場面にあるウォータータンとブリュンヒルデのやりとりの長さに對して意見を述べた。彼の騎士的な感覺としてはこの「争ひの二重唱」は嫌だつたのである。彼はワーグナ



「に「良き趣味と詩の名」に於てそれを縮めるやうに求めた。ワーグナーは然し、その場面が本當に長過ぎるものであるかどうか、自分がこの場面を縮める決心を棄てるべきかどうかといふことは、作曲してみれば直ちにわかるであらうと思つた。それからつとこの場面はそのまま變へられず、而もリストを非常に讚歎させたのである。——なほ今一つの計畫がその時考へられた。即ち三人の友達でワーグナー傾向の藝術のための宣傳雜誌を創刊しようとしたのである。そしてその主宰はハーウェーの手に委ねられることになつた。リストはそれと似た考へを以前彼がバハの受難樂のためにキリスト受難日にライプツヒに滞在したとき、ブレンデルと一緒に考へてゐたのであつた。ブレンデルは新音樂雜誌と並行して尙新しい傾向のために「未來の藝術作品」といふ機關誌を創刊しようと思つた。だが然しその計畫は兩者とも差し當つて實行されなかつた。ブレンデルはその代りに一八五六年から「藝術、生活、學問の獎勵」を發刊した。

チューリヒの祝典週間の體驗に關してワーグナーは次のやうにオットー・ウェーゼンドンクに報じてゐる。「荒々しい、興奮した——而も素晴らしい週間を私はリストと一緒に過しました。色々のことを報告し合ふといふ激情は私達の間にはなくなりました。即ち名狀すべからざる程のこの人間に對する私の喜びは、彼の非常に力強い忍耐力のある様子やこの前の會見に照して私が想像し得たよりも一層優れた彼の健康を見出したといふことよりも遙かに大きかつたのです。私達は信ぜられない程多くのことを語り合はねばなりません。何故ならば私は以前は何時もほんの數日を違しく彼と過したのに、此處では私達は根本的に初めて人となりをよく知り合つたからです。そこで彼が今度専ら私のために與へてくれた一週間は、實に力強い内容に充ち満ちてゐましたので、私はそのために今も殆ど麻酔にかかつてゐるやうです。第一日目にもう私は歌つて聞きました。そのために次に彼は一人で音樂を引き受けねばなりません。」

せんでした。彼は信ずることが出来ないほど見事に演奏しました！ 私は彼とフィアワルトシュテット湖へ素晴らしい小旅行をしました。そして最後に彼は自分から、又來年には少くとも四週間は來訪するといふ約束をして別れました。」

別れの時が來たとき、ワーグナーとハーウェーは馬車で友人を送つた。「吾等君を見送りし後ジョージと何も語らざりき。靜かに歸路に就きたるに、到るところ沈黙支配す！ かくて君の別れ祝はれぬ——君よ愛する人間よ、なべての輝き吾等によりて消え失せぬ！ おゝ來れすぐふたゝび！ 吾等と共に永く滞れ！ 神の如き足跡を君こゝに残し、なべてのもの高貴と溫和になれば、吾等の心に偉大さ甦へる——悲しみなべてのものをつゝみかくさん！」

リストはカールスルーエで秋に行はれる音樂祭の下相談をしたのだつたが、そのカールスルーエやフランクフルトやワイースバーデンを通つて、チューリヒからワイマールに歸つて來た。到着した日（七月十六日）に彼はそれより先、娘と一緒にカールスバードへ保養に行つてゐた侯爵夫人に、次のやうに書き送つてゐる。「十五日に亘る旅行中、何かを書くといふ事は私にはどうしても不可能でした。——而も私は確かに平衡を保つために樂譜を書き度いといふ要求を持つてゐます。もし數日間も五線紙なしに過さねばならないとすれば、私は乾上つてしまひさうに感じます。私の腦髓は弛み切つてゐます。そして外界の事物に對して趣味を見出すといふ能力は私にはないのでせう。幾度も私はこんな觀察をしました。そして此の種の病氣は年々昂つて來ました。音樂は私の心の呼吸です——音樂は同時に私の祈りであり、私の仕事です。」

リストがワイマールにゐなかつた時に、カール・フリードリヒ大公が逝去され、七月八日にカール・アレキサンダーが即位された。だが公式の祭典は八月廿八日に初めて催されることになつてゐた。このためにリストは大公の御希



望により誓忠行進曲を作曲した。リストはそれから又カールスバードへ赴き、八月半ば侯爵夫人と娘をテブリッツとドレーズデンへ同行した。彼等は此處でビュローと會つた。ビュローは九月十二日にドレーズデンで演奏會を開き、リストの作品で大成功を収めたのである。詩人オットー・ルドヴィヒも二回リストをロシュウィッツに訪れた。「彼はハイドリッヒの古くさいピアノで弾きました。貴君が私達のところにゐたらと思ひます。私はいま二度と再びこんなピアノが生れるだらうとは殆ど思はれません。」このやうに詩人は報した。

九月十七日にリストはビュローを同伴してカールスルーエへ旅立つた。それは十月三日より五日に亘つて催される音楽祭の準備を始めるためであつた。侯爵夫人と娘はこの練習と仕事の時を利用して、ミュンヘンに旅行をしたが、十月二日には祭典のためにカールスルーエへやつて來た。これは一般に南ドイツの第一回の音楽祭であつた。そしてリストが指揮者に選ばれたのは音楽好きなバーデンのフリードリヒ攝政親王に負ふものであつた。管絃樂や合唱は、ダルムシュタット、マンハイム、カールスルーエ諸市の劇場メンバーから集められ、共演者は二百六十人に上つた。リストは個々の練習を指導するため三市に亘つて巡回旅行したのであるが、全體を集めては僅か二回しか練習することが出来なかつた。演奏された凡ゆる作品は共演者達に完全に分つてゐなかつたといふこの状況や事實を考へるならば、その結果は何處までも賞讃されなければならない。今尙充分に價値ありとは認められない古典的作品と同時に、主としてその時代に出來た作品が率先して載つたプログラムは次の如くであつた。

一八五三年十月三日 月曜日

タンホイザー序曲……………ワーグナー  
演奏會用アリア……………ベートーヴェン

十月五日 水曜日

ヴァイオリン協奏曲(作曲家の演奏による)……………ヨアヒム  
ローレライ終曲……………メンデルスゾーン  
「マンフレッド」への序曲……………シューマン  
「藝術家に寄す」……………リスト  
第九交響曲……………ベートーヴェン  
「シュトルーエンの湖」序曲……………マイヤーベール  
「テイトス」のアリア……………モーツァルト  
「シャコンヌ(ヨアヒムの演奏による)」……………バハ  
ベートーヴェンの「アテネの廢墟」によるピアノと  
管絃樂のための幻想曲(ハンス・フォン・ビュローの演奏による)……………リスト  
交響樂ロメオとジュリエット……………ペルリオーツ  
「豫言者」からのアリア……………マイヤーベール  
ローエングリン拔萃……………ワーグナー  
「タンホイザー」序曲(希望により再演)……………ワーグナー

リストの祝典歌曲「藝術家に寄す」には當時はまだ管絃樂は附いて居らず、管樂器の伴奏による男聲合唱のためのものだつた。その祝典歌曲はかなり受けが悪かつたが、その反對にビュローが實に堂々と演奏したリストのピアノ



幻想曲は荒れ狂ふやうな喝采を博した。タンホイザー序曲は前年のバレンシュテットに於けると同じやうに、非常な成功を収めたので、第二日目に再演されねばならなかつた。そしてローエングリンも澤山の賛同者を得、その劇の全體を知り度いといふ希望の聲を高からしめた。

音楽祭終了後新聞界には、あんなにも即興的なものでありながら兎も角成功したといったやうな、二三の作品に關して起つた中傷と聯關して悪評が起り、リストはもう指揮出来ない程だつた。これは一部分リストが選ばれたために自分が輕蔑されたと思つた土地の樂長の嫉妬のためと、又一部分保守的陣營から出た攻撃のためにこれほど大きくなつたので、リストは次のやうな自分の指揮の理想を明示した公けの防禦文をつきつけることが必要であると思つた。

「私が公然と私の讚歎と熱愛とを表明してゐる諸作の過半数は、多少とも名ある樂長、特に所謂『老練なる』樂長が彼等の人格的な共感を以てしては、殆ど或は全然價値を認めないやうなものに屬するのである。この諸作は私の考へるところよりすれば、演奏する管絃樂の側から一進歩——吾々は今それに接近しつゝあるものと思ふが——を要求する、強調法の中に、律動法の中に、細部に於ける一定の箇所を樂句々々に切つたり、抑揚をつけたりする仕方の中にそして全體に於ける明暗を附ける仕方の中に、即ち演奏そのものの様式に於ける一進歩といふ言葉と共にこの進歩は演奏者と指揮者との間に、ずる／＼と唯拍子をとるといつた指揮者によつて結ばれる結びとは別な結びを作るのである。多くの場所で拍子や個々の拍子の部分の生硬な維持は、含蓄ある理解力ある表現を妨げてゐるかの如くである。かくすれば到る處に文字は精神を殺してゐる。——これ即ち私が決して署名しないであらうところの死刑の宣告である。ベートーヴェンやベルリオーヅやワーグナーの作品について私は今尙、その他の作品に比べて、指揮者が自分の指揮に對して風車の役目をなし、そして顔に汗を流して、自分の樂員に對し、感激の熱を通じさせようとするといふ

ことから起り得るやうな優越を見出してゐるのではない。殊にそこで重要なのは、悟性と感情、精神的飽和、藝術と詩の中の美と偉大と眞實の享受に於ける精神的全體に對する心の燃焼なのである。即ちそこでは最早自己満足とか、在り來りの樂長たちの職人的老練さでは満足さすことは出来ないばかりでなく、更に藝術の品位と高潔なる自由ささへも相反するものとなつて來ると思はれる——樂長の眞の課題は私の考へによれば、自分が明らかに無用なものであるといふことを認め——且つ自分の機能と共に、出來れば身を引くといふことにある。吾々は舵手であつて、決して漕手ではないのである。」

ポールがこの公開文をカールスルーエの音楽祭に關するパンフレットの中で公表したのであるが、リストは彼に次のやうに書き送つてゐる。「貴方が謬見といふ言葉を用ひたことは全く理路整然としたことです。それは私達に對立してゐる雜駁なる一派に對して貼られた最も正しい表徴です。一方眞實と公明と度量——他方謬見と偽善と無力といふ二つのもの間には、鬭争は避くべくもありません。ですからそれを通り抜けて通り越して行きませう！」

指揮者としてのリストはピアノ演奏家としてのリストと根本に於て共通してゐる。即ち彼は主要目標を藝術品の精神的把握と作曲家と同精神の再形成といふことに置いたのである。純粹に技巧的なものは、彼はピアノ演奏の場合にも管絃樂指揮の場合にもこれを無視した。彼はこの訓練的仕事を超越してゐた。彼の意見よりすれば、殊に指揮者は、演奏家の凡てに對して正確に彼等が加はつて來る場所を示してやるといふ役目を持つてゐるのではなく、作品の中にある内容を掘み出すといふ役目を持つてゐるのである。リストがワイマル管絃樂と共に獲得した偉大なる成果は次のやうなことにある。即ち自分で慣らした一群の人々にあつては、指揮者としても最大のことを爲し得るといふことだつた。且つ時々他所の樂士がリストの指揮の下では演奏することが出來ないと云ひ張る時には、その原因は唯



單に、その指揮者の長年に亘る舊弊のために、リストの指揮をつまらぬものとしてゐるに過ぎないといふことだとした。勿論そのために屢々面倒な事故も起きて來た。例へばハンス・フォン・ビュローが第一ピアノ協奏曲を演奏したエルフルトの音楽祭では、練習のとき全員が少しもじつくりやらうとしなかつた。そこでビュローは「愛するバパー 貴方はいまま少しつかりと拍子を取つてくれないと、私達はどうにもなりません！」と叫んだ。リストは「ああやらう、おしやまん！」と答へた。そして、今度は拍子を「打ち」出した。彼は笑ひながら周りの人々に向つて「まだ、私達はこんな風には出來ないので」と云つた。

カールスルーエ音楽祭終了後、久しぶりでパリーにある子供達に會ひ、そして彼等のことで色々な整理をするために、其處へ行き度いと思つてゐたリストは、彼が馬で行つたこの日のことをさう呼んでゐたのであるが、「朗かな夏の日」を追憶して、數日間ワグナーとバーゼルで會ふことに決めたのであつた。然しその時ワグナーは彼についてパリーに隨行し度いと云ひ出した。といふのはワグナーはその大作ニーベルンゲンの作曲に着手する前に尙數日間氣晴らしと有頂天騒ぎを欲したからである。そして友人が傍に居て愉快に過ごすことは彼に最上の結果を齎すものと思はれたのである。再會するまで彼は非常な焦燥に充されてゐた。そして毎日毎時間を指折り數へてゐた。遂に十月六日がやつて來て、その日にバーゼルの「ツデー・デン・ドライケーニゲン」宿舎で會見されることに決つた。リストはワイマールの弟子達や一黨の人々を伴つてやつて來た。そして彼等はみんな巨匠に面識を得んと熱望してゐた人々だつた。特にハンス・フォン・ビュロー、ヨアヒム、P・コルネリウス、R・ポールがゐた。ローエングリン第三幕序奏のトロンボーンの主題と共にその著名なる藝術家の一群は「バーゼルのドライケーニゲンの物々しい入場」を迎へたのである。第一番にやつて來たワグナーは、この宿舎の食堂で彼等を待ち構へてゐた。此の日はまるで有頂天の歡

呼の聲と本當に熱狂的な若々しい感激そのものだつた。リストとビュローは櫻桃のブランデーを飲んで兄弟の契りを結んだ。翌日にはウィットゲンシュタイン侯爵夫人も娘と一緒に到着し、そして今度は第一日の有頂天騒ぎはなくなつて一層眞面目な藝術上の事柄が話された。

ワグナーは自叙傳の中にその二人の婦人の姿を次のやうに描いてゐる。「吾々の心を惹きつける凡てのことに對する侯爵夫人の稀に見る旺盛さと活潑なる傾倒には逆らふことが出來なかつた。吾々を動かした非常に大きな問題にも亦、吾々が世の中と個人的に交はつてゐる最も偶然的な一つ一つのことにも、同じ興味を以て、彼女は誰でも或る程度まで有頂天に喜ばした。そこで誰でも自分が出來るやうなものだつたら何でも、全部さらけ出してしまはねばならないと思つたのである。之に反してやつと十五になるかならぬかの侯爵夫人の娘は幾分空想的な表現をしてゐた。そして彼女は服裝や態度に於て丁度初めて乙女になつたばかりの娘のやうに見え、私は『子供』といふ尊稱で呼んだ。議論や或ひは純粹に嬉しさうな感情の現れが時折り湧き立つ時には、彼女の空想的な黒い眼は美しい聰明な静けさを保つて來た。そしてそのとき吾々は知らず識らずに、吾々を興奮させた事柄に就いての無邪氣な智力を彼女が表してゐるといふことを感じたのである。」

ワグナーが自作の指環の詩から幾つかを讀んで聞かせたところ、ヨアヒムは非常に感激して、初演にはコンサートマスターとしてやつて見度いものだと云ひ、そこでワグナーは彼を君と云ふ親しい言葉で呼ぶことを申出たほどだつた。ワグナーの讀んで聞かせた指環の詩の見本を、彼はマリー姫の別れに際して「ニーベルンゲンの嫉妬と苦惱、ウェルズンゲンの歡喜と悲哀、みな愚かなるリヒアルドの想ひ出のため、賢明なる子供に」といふ題字を書いて贈つた。ワグナーの希望によつて選ばれたベートル・ヴェンの百六番のソナタを演奏してリストはみんなに忘るべか



らざる満足を與へたのである。ニーベルンゲンの指環の上演は自づと主な話題となつた。更にみんなに非常に好意を持つてゐたストラスブルグを上演のために期待するといふことまで考へられた。それから翌日、一行は揃つてストラスブルグへ出發した。然し此處は大分道程が離れてゐた。そして若い音楽家達はドイツへ歸つて行つたが、一方ワーグナーとリストと婦人達はパリへ向けて旅程を延ばした。ここではリストの娘達は——ダニエルはボナバルド學校に居つた——カジミール・ペリエ街六番地に居つた。そしてダニエルは、以前ウィットゲンシュタイン侯爵夫人の教師をして居り、そのため侯爵夫人から選ばれてゐた家庭教師パテルシー夫人と一緒にゐたのである。八年ぶりで父子は幸福なる數日を過した。ワーグナーも大抵は居合はせた。そしてワーグナーは、後年彼にとつて重大な意味を有つことになつたリストの娘コジマといふ人と此處で初めて會つたのである。僅か一週間そこ／＼でもう辛い別れの時がやつて來た。そしてリストと侯爵夫人は娘をつれて直接ワイマールへ歸り、ワーグナーは熱情をこめてラインの黄金の作曲に没頭するために、再び我家へと急いだ。

ワイマールでは彼は劇場から遠ざかつてゐたので、特に大部分既にスケッチの出來てゐた作品を完成さすために靜かな時を利用した。といふのは次の多その作品を先づワイマールで試演し、それから公開しようと思つてゐたからである。その他の作品の構想の中の大抵のものは、以前の年々にまで遡つてゐる。リストは彼が世界の藝術的内容を傳へることを考へた以前に、最も廣い感覺と擴がりの形式を捉へるといふ事を選んでゐたのだつた。彼が往時の大作に對する畏敬の念から抜け出して、完全なる藝術的成熟の域へ入り込まうと思つたその藝術の領域へ、餘りに性急なる歩みを進めることなく、彼は自分に對して如何に永い間制作能力の缺乏と獨自な發明の不毛を非難しなければならなかつたことか。今や以前のピアノ作品の多くは新しく改作せられた。そしてワーグナーが「凡ゆる概念を超越して美

しく偉大で愛すべく深く高尚な」と云つたロ短調ソナタは新しく出來た。同じやうに兩ピアノ協奏曲とハンガリア狂詩曲の幾つかも新しく出來た。更に順禮の曆の最後の巻はこの時作られたのである。「この作品と共に私は暫らくピアノと關係を絶たうと思ひます。それは専ら管絃樂の作曲に従事するためと、この領域に於て私にとつて既に永い間内面的必然となつてゐた多くのことをやつて見度いたためです」交響詩は九つ殆ど完成され、そして一八五二年八月にワイマールで初演された四部の男聲のためのミサ曲は、リストの偉大なる天分と、最初のうちに抱いてゐた教會音樂の領域に於ける彼の革新的努力とを既に認めさせるものである。

一八五三年十二月初めにベルリオーヅはライブチヒで二つの演奏會を催し、リストはそれに出かけて行つた。此處で彼はヨハネス・ブラームスとも會つた。ブラームスはハンノーヴァーのヴァイオリニスト、レメニーと共にヨアヒムのところからやつて來て、前年既に六週間の永い間アルテンブルグでリストの客となつて居り、今はライブチヒに住んでゐた。リストはブラームスの作品四番のホ短調スケルツォを、讀むことが出來ない程の草稿から驚くばかり完全に演奏して、作曲したブラームスや居合はせた友人ブロンスアルトやクリンドウォルトを恍惚とさせたのである。リストはそのときブラームスに就いて次のやうに意見を述べた。「私はあそこでブラームスに會ひました。正直のところ彼には興味を持つてゐます。そして私がライブチヒに滞在してゐた間は、彼はベルリオーヅに敬意を表すために、私に對しては非常に氣の利いた上品な態度を示してゐました。私は又度々彼を食事に招待しました。そして私は『新しき道』(シューマンの論説)が將來はやはり彼をワイマールに近づけて行くだらうといふことを信ずるやうになつてゐます。人々はハ調の彼のソナタに満足してゐます。それは確にその作品の中で、彼の作曲能力を最もよく分らせるものです。



ビューローの斡旋でドレーズデンでもベルリオツの演奏會を契約しようといふリストの試みは當分實現しなかつた。

一八五四年の初めに、リストは多くの人々に促されてまた再び歌劇の指揮を引き受けた。その歌劇は今度は二三の新契約によつて少くとも部分的には改良されてゐた。それと同時に彼はこの冬、理解力ある大衆の教育に努力しようとした。そしてそこでワイマール新聞の雜録欄で、ワイマールのシーズンに演奏されて來た古い作曲の音樂的なものに關する多くの大小の論文を公表したのである。その中の幾つかはその地方臭味を取去つて、非常に敷衍されて新音樂雜誌（一八五四年）に印刷されてゐる。そして後年「演劇論集」といふ題目の下に本の形で公刊せられた。一月廿二日にベルリンの宮廷樂長ハインリヒ・ドルンの歌劇ニーベルンゲンの初演が行はれた。リストがこのつまらぬ作品を受け容れたには實に次のやうな二つの意圖があつたのである。即ち先づ彼はワグナーの大計畫のことを考へて、ニーベルンゲンの神話に對する一般の共感を喚起しようと思ひ、そして次に吾々はそれに就ては後程話を展して語るだらうが、ベルリンでの色々なタンホイザー事件に對するドルンの援助を期待し得るやうに、その作曲家をも手に入れて置かうと思つたのである。それに續いて二月十六日には祝典上演としてリストの改作によるゲルックのオルフォイスが行はれた。練習によつて感激させ、そして二週間で作られた同名の交響詩は歌劇よりも優れてゐるとされ、この初演の時には非常に立派な成果を收めた。オルフォイスに續いて一ヶ月後、管絃樂團員年金資金のための公開演奏會でプレリユードと、カールスルーエの音樂祭の經驗に照して今度改作完成された祝典合唱曲「藝術家に寄す」の初演が行はれた。三月廿日にリストは、その歌劇「サンタ・キアラ」の練習と上演を行ふやうにといふエルンスト・フォン・コーブルグ侯の招待に従つた。そして二週間に亘つて侯の客となつて、コーブルグの宮廷に滞つた。第三回

目の上演の後に候は自らこの藝術家に侯家勳章の十字章を贈られた。——復活祭にはワイマールに大演奏會が準備されてゐた。復活祭の前日には宮廷の禮拜堂で教會演奏會が催された。そしてそこで古い教會作品と同時に彼自身オルガン弾いて、彼のアヴェ・マリアが歌はれた。數日後（四月八日）の宮廷演奏會にはヴェータンがやつて來て、そこで自作のヴァイオリン協奏曲を演奏し、ハープ演奏家ポール夫人が共演し、ベルリオツの多くの作品と、同時にリストの新しく改作されたタッソーが演奏された。そして續いて復活祭の日曜には公開演奏會でベルリオツのリヤ王序曲とリストのマゼッパが演奏され、その効果的な構成と息の止まりさうな重壓のために、素晴らしい喝采を博した。今度の劇場演奏期の最後として、大公の誕生日を祝ふために、六月二十四日、シュニベルトの歌劇アルフォンゾとエストラが初演せられた。この作品は決して永續的な演奏計畫の増大を意味し得ないといふことは、最初からリストはよく知つてゐた。彼はその上演を、ドイツ國民が歌曲の大天才に對して持つ榮譽ある負債の償却として見てゐたのである。その夕べはルビンシュタインの祝典序曲で開き、シュターデの祝典行進曲で閉ざされた。

去年の冬の間にはワイマールの仲間はある注目すべき人物、即ちホフマン・フォン・ファレルスレーベンを周つて一段と増加した。大公は彼が自由的政治精神を持つてゐたにも拘らず、リストの提議を容れて、彼に或る地位を與へたのであつた。その詩人はオスカー・シャーデと共にワイマール年刊の發行者に任せられた。ゲーテ財團の意味で考へ出されたその計畫は、宮廷がその方法を殆ど許可せず、ワイマールの協力者達はほんの一寸した原因から協力を拒んだため、音沙汰なしに消滅させようと、三年間憐れな存在を續けたのである。ホフマンはリストの仲間と親しく交はり、アルテンブルグの常客となつた。そして彼はその住人のやうに凡ゆる祝典の機會にアルテンブルグを詩歌に詠じ、その意味を次の感激的な詩句に謳歌してゐる。



アルテンブルグに寄す！

そは老いたる人の城にあらす

若人もそこにては意のままに振舞ふべし。

そは城なり、リストの旗旌のもと、

藝術をこととする者の集ひて競ふ。

親しき御手より受け取るは何ぞ

歡喜と感謝に報ゆる賜を。

そは城なり騎士道の城

時代と共に新しく甦へる。

人何を持つやを問ふ勿れ

人何なりや、人何能ふか。

學びの道と藝術の道に示すは何ぞ

愛なり誠なり、はたまた好意なり。

笑ひと機智とユーモアにも

心はみづからその戸を開き

厳しきことにも必要あらば

入るを拒まじ何時にても

生の喜びと惱みの上に

心開かるれば何ぞ空しからん。

なべての人來れといはん

情と心に俗人なし。

ホフマンの祝典の辭は間もなく非常な評判となつて來た。彼はリストの誕生日に厚いアルバムを贈り、その中にはリストの仲間に関係した乾杯の辭や詩がみんな詠み込まれてゐた。このアルバムは後ずつと繼續せられて、リスト家年代記の一つとなることが出來たのである。

七月八日にリストはネーデルランド音楽協會の財團記念祭に賓客として出席するためにロツテルダムへ旅立つた。その協會はアムステルダム音楽の促進のために彼を名譽會員に推舉した。ケルンと、クララ・シューマンを訪れたデュッセルドルフを通つて、彼はワイマールへ歸つて來た。此處では、彼が「惡魔に憑かれた人のやうに」作曲したファウスト交響樂の仕事が丁度彼を待ち受けてゐた。四十臺の初めに既に起草され、實にリストの全創作の精華たるこの作品は、九月の終りにはもう完成された。が然し初めて演奏されたのは一八五七年であつた。一八五四年九月の初めにアントン・ルビンシュタインがアルテンブルグにやつて來た。リストは一八四〇年ルビンシュタインが十歳の子供の時パリでその偉大なる才能を認め、喜んでピアノの教授をしてやつた時以來、既に彼を知つて居り、又愛してゐた。ルビンシュタインが今永年のロシア滞在の後再びドイツへ來た時、リストは彼がベートーヴェンによく似てゐたので「ファン二世」と呼んだのであるが、彼をワイマールに招き、そこで彼の歌劇シベリアの獵師を上演しようと思つたのである。それは一八五四年十一月九日に上演せられた。この日には大公妃の母君マリア・パウロフナの即位三十年記



念祭が行はれた。それは丁度シラーの藝術の忠誠の初演五十年記念祭と同じ時であつた。そして大公妃は當時そのためにワイマールに迎へられてゐたのである。そこで祝典プログラムは王妃御自身の作曲から組立てられた音楽伴奏付きの藝術の忠誠で始まつた。リストの今までに一度も演奏されなかつた交響詩祝典樂やルビンシュタインの歌劇は此處で實に趣きある夕べの最後をなした。

一八五四年の十二月はワイマールの生活に急變を齎したが、これは固陋な住民達を非常に不快にしたものであつた。町の社交生活は全く一定の範圍にのみ集中された。ワイマールの多くの封鎖された社交界では「娛樂」といふことが最も偉大な、最も高尚なものであつた。この社交界はそれのみならず、大公をメンバーとする榮譽を得た。それに出るといふことは一般に餘り熱心でなかつた。多くの人は、高貴な、わざとらしい調子によつて嫌な感じを抱かせられたし、或はそこから遠ざかつた人もある。といふのは「娛樂」を求めようとして行つても、少くとも娛樂は見出されなかつたからである。食事は又まづかつた。主人は餘り貸賣りをし過ぎたため、材料のよいものを使へなかつた。市會議員なら一晩中リヒテンハイナーを飲んでゐてよいし、それでゐて儲けさせる位のことには出來た。この「娛樂」の他に、水曜日の社交といふのがあり、これは又よく「解 答 協 會」<sup>シユリユツゼル・フェルアイン</sup>とも呼ばれた。これは學問的な會合であり、いつも講演があり、最後に夕食が出るのであつた。彼等は宮廷に關係したために、「宮廷顧問官」のメンバーと呼ばれたが、その中には特にかういふ人があつた。即ちワイマール美術品蒐集官のアドルフ・シエル、ウイルヘルム・エルンスト、ギムナジウムの校長ザウツペ、圖書館長の顧問官ルドウィヒ・ブレラー、教會顧問官のディッテンベルガー等であつた。その他、更に市會の社交界といふものもあつた。これは特にワイマールの人々から成つてゐた小市民達のグループであり、之等の人々はこの町や、この地方の様々の吉兆禍福のことを、ビールを飲みながら話し合ふもので、彼

等自身が優秀であること、他の人々よりもよく澤山のことを知つて居ることを話し合ひ、さうしてこの國や教會でも重要な人物はワイマール人でないとか、今までテューリンゲン人は一人もゐなかつたとか云つて憤慨したりした。彼等はよく夜分になると「トレートウル市役所」に集まり、一週間の中定められた日にジューセンボルのリヒテンハイナーまで散歩するのを常としてゐた。

これらの社交界のどこにも、リストを廻る藝術家にとつて適當せる場所がなかつたことはよく分る。彼等は唯自分を唯一の頼りにしてゐた。かうして彼等も亦一つの會合に集まる必要があるといふ考へが起つて來た。この考へは既にホフマンによつて、リストに打開けられたのであつた。ところが彼はこのことを始めるのに適任でなかつたので、ポールがそれに適當な人々を選ぶことを委せられた。これは遂にロシア宮廷に於ける相談役となつた。そこではかなり廣い範圍に亘る多くの提案が出されたが、さうしてゐる中に、學問と藝術のアカデミーを創立するといふことまで話は進んだが、結局は今後の相談を何處で、どういふ風に、何時したらよいかといふことを決めることになつた。大晦日はそのために當てられた。何遍も萬歳の聲が擧げられた後、ホフマンは會員の閱兵を行つた。彼は一人々々の個性とか、奇抜な性質や、一寸した缺點等までとり入れた冗談混りの詩を讀んだ。その時協會は出來上つた。創立當時の會員は次のやうなものであつた。即ちリスト、ホフマン、指揮者のシュテールとモンタークの他に、宮廷樂團のメンバーであつたジンガー、コスマン、ワルブリュール、宮廷劇團の俳優エドアルド・ゲナスト、音楽家のブロンヌアルト、コルネリウス、ブルックナー、アレキサンダー・リッター、フェルディナンド・シユライバー、オイゲン・フォン・スーベル、ポール・ラング博士、ラッフであつた。

「新ワイマール協會」といふ名稱は、ホフマンの提案になるものであり、長い討論の末決められたのである。この



協會の一定の集合日は、日曜日の午後七時といふことになり、集合所としては市役所の一室を借りることになった。會長はリストで、副會長はホフマン、事務長にはシュライバーが擧げられた。協會の集合に會員達が興味を有つて集まり、自發的に、これに關係させる機會を與へるために、皆が書いた漫畫や漫文を載せる新聞のやうなものを創め、「デイ・ラテルネ」(提燈)と之を呼んだが、之は會合のある毎晩くれることになった。ラッフがその主筆に推された。ホフマンは、この協會の歌を作り、リストが之に音楽をつけ、何か祝典がある時には、合唱で唱はれることになった。それは次のやうに實に奔放極まるものであつた。

—

新しき生命を目指して新鮮なれ  
胸には青春を抱いて!!  
新しき新鮮な努力は  
人の元氣であり、喜びである。  
天空は開け放たれてゐる  
目標は隠されずに我等の前にある。  
希望はもはや達せられる  
充されない希望はないだらう。  
酒を飲み乾せ、酒を注げ!!

さうでなければならぬ  
凡ての人にとつて、唯  
協會に屬する人々のために!!  
さうでなければならぬ!!  
誰だつてさうだ。  
俗人の叫びでも關はぬ!!  
今日、そしていつまでも!!  
そのままに變らぬ!!

二

吾等は素晴らしかつた  
古きものも喜ぶが  
新しきものを作るやうに  
靈は我等を強く促す。  
ちつとしてゐたら終りだ  
顧慮することは少しもない  
我等は手に手に持つ  
勇敢にも進歩の杖を



酒を飲み乾せ、酒を注げ!!

(以下一番と同じ)

三

汝等は我等に感謝の要なし

月桂樹の果實をもてり!!

否、我等の欲するは

我等の目的と賞讃である

我等が藝術と生活に於て

眞と美として認めるものに

我等の努力はどこまでも

墓石の縁までも。

この新ワイマール協會は小さな首都の住民にとつては、明らかに挑戦的なものであつた。既にこの名稱が彼等には目の上の瘤であつた。ところが唯俗物共が元氣なく頭を振つただけではなく、古い時代の代表者達(水曜會)も、この珍らしい、全く新しい道に従ふ藝術家達を、これに尙宮廷によつて保護された藝術家達を面白くなく眺めてゐた。彼等は冷やかなる拒否的な態度を示した。凡ゆる之等の挑戦は最初の中は未だ秩序だつた意味のものではなかつた。リストは彼等の上に高く立つてゐた。アルテンブルグに行つた凡ての音楽家はこの協會に入れられた。彼はこの協會の創立後間もなく、有名な彫刻家エルンスト・リーチェールに出會つた。彼はゲーテ、シラー財團の約束に應じてワ

イマールに來たのであるが、その時生氣潑刺たるリストのメダルを塑像したし、フェルディナンド・ヒルラーのものもその時作つた。

新ワイマール協會が初めて廣く知られるやうになつたのは、ベルリオヅがやつて來た時、彼を名譽會員にし、大祝典を行つた際からであるが、それは一八五五年二月二十日であつた。ベルリオヅは今度で既に三回もワイマールにやつて來たが、リストの獻身的な宣傳によつて、ワイマールは彼の音楽に居心地のよい土地となつた。ベルリオヅは今度は二回の演奏會を指揮した。即ち二月十七日に宮廷管絃樂團の演奏會で、ロメオよりの或る場、ファウストよりの空シルフェン氣の精の舞曲、チェリーニよりの合唱曲及び新作として「ラ・カプティヴ」を指揮した。當夜彼の特別な感激を惹き起したのは、リスト自身が彼の大きなピアノ協奏曲變ホ長調を管絃樂伴奏で(ベルリオヅ指揮の下に)初めて演奏したことであつた。コルネリウスはこのことに就いて次のやうに書いてゐる。「こゝでは獨奏樂器が管絃樂に對して、馬鹿者の社交にお茶に招待された年老いた主婦が、その馬鹿者達の間にあつて彼女の頭を光らせるといつたやうなものではなく、ピアノはこゝでは寧ろ精神力と教養のある宮廷人に聞かされた賢明な、生々とした公侯にも比せらるべきものである。今や或る時には彼の年老いた大臣(ファゴット)と重要な仕事について話をしたかと思ふと、或る時には彼の勇敢なる軍勢(ヴァイオリン)と華々しき合戦を想ひ起したり、或は時には宮廷の婦人達(フルート、クラリネット)にふざけた言葉を話したり、小姓(トライアングル)が謙讓にその話の間に入つて來ても、そのために一向悶着がない。」

三日後にベルリオヅは劇場で三回の大演奏會を指揮し、その時には彼のオラトリオ、キリストの幼時(コルネリウスの獨譯による)、幻想交響曲(この際にはリスト自身が太鼓を叩いた)、それに續いて生活への復歸が初演され、



而も之は舞臺を作つて上演されたのであつた。聴衆側の受けは大變よかつた。

新ワイマール協會は、公けにされることを少くとも拒まなかつたけれども、その後協會内部ではその目的やその將來の活動について色々と論議された。論争は屢々非常に烈しくなつた。若干の會員は非常にひどく對立したので、その人々を除名するよりほか仕方がなかつた。三月五日にラッフが先づ脱會を宣言し、その後間もなくシャーデーもポールも脱會した。そのために、この協會の文學的方面にはかなりの損失を見た。そして音樂方面が今度は完全に優勢となつた。それに續いて大きな面白からざる氣分が起り、數週間といふものは落付かなかつた。ラッフとリストは、既に以前烈しく悶着を起したことがあつた。といふのはラッフはワーグナーに對するかなりの攻撃を含んだ「ワーグナー問題」といふ、彼の書き物をリストが知らない間に公けにしたからであつた。協會側からもこの「ラテルネ」の指導者として、リスト自身からも要望されてラッフの地位に就いた人はコルネリウスであつた。

當時リストはハンガリアから一通の手紙を受取つたが、それは以前約束したことに就いて彼を促すためであつた。今ハンガリアの大僧正とグランの大僧正になつてゐるヨーハン・フォン・ストヴスキー僧正は、今年の八月に行はれるグラン僧院の落成式にミサ曲を作曲して貰ふやうに、一八四六年にリストが五大教會を訪問した際、約束してゐたことであつた。リストは直ちに仕事に着手し、既に五月二日にワーグナーに宛てゝ次のやうに報告することが出来るやうになつた。即ち彼は「昨日やつと完成した。それがどんな響きがするかは分らない。——然し作曲したといふよりは、寧ろ祈りをしたと言つた方がよいだらう」と。僧院の落成式とリストのミサ曲の初演は、然しながら翌年の夏になつて初めて行はれた。吾々は作品のこと及び之より前のことに返つて、もつと詳細に敘述することにしよう。

リストは多中全然劇場の上演を指揮しなかつた。色々な事情や永い間金がなかつたために、有効な藝術上の仕事を

することが出来なかつた。彼の時間は、そのために主として自分の作曲の仕事に使はれた。グランのミサ曲を完成した後、彼は主に十三番のプサルムに従事し、既にヴォロニンスで草案を書いたダンテ交響樂の完成に従つた。その傍ら彼は宮廷演奏會を指揮し、又新音樂の二人の熱心な促進者であるギルレとイエーナの音樂指揮者シュターデのために、イエーナの第七回アカデミー演奏會の指揮を引受けたが、そのプログラムは彼のオルフォイスと彼のピアノ協奏曲（ブルックナー）であつた。四月九日にワイマールの劇場には、遂に再び新しい事件が起つた。即ちシューマンのゲノフェアがリストによつて稽古されたのである。第一幕は好評であつたが、終幕は臺詞が悪いためにかなり失敗した。クララ・シューマンはこの祭典に招待されてゐたが、姿を現さなかつた。五月の末リストがデュッセルドルフでヒルラーの指揮の下に催された音樂祭のためにそこへ行つたので、その時彼女はデュッセルドルフでリストを訪ねた。歸途リストはハルレで、ローベルト・フランツに會つたが、この人の音樂をリストは永い間批判し、熱心に分析を行つて居つたので、最近に至つて之に感動を起すやうになつたのである。

リストは彼の弟子とよく近隣を遍歴し、散歩しながら藝術上の問題を論じ合ふのを常としてゐた。そこで彼はよくワイマールの直ぐ近くの、イルム地方にあるティーフルトを訪れたものである。こゝで彼は、或る日のこと不思議にも或る知己を得たのであるが、それは村の教會のオルガン奏者であるA・W・ゴットシュラーグといふ人で、既に永い間遠方からリストに驚歎して居つたが、彼に親しく會つたことはなかつた。といふのは、從僕が侯爵夫人の命令でアルテンブルグを訪問する凡ゆる面倒な人を遠ざけてゐたからである。さうしてゐる中に、或る日のこと彼はニコライの序曲「堅固なる城」をリストが編曲したものを買つた。彼は熱心にこの曲をオルガンで練習し、若干のむづかしい箇所を苦勞してゐた。突然二本の長い腕が兩鍵盤式の鍵盤を彼の肩の上から押へた。リストが彼の背後に、二三の弟



子と共に立つてゐたのである。「さうするのではありません。愛する友よ、指遣ひが間違つてゐます。鉛筆がありますか。」といつて、リストは面倒な運指法の記號を附けたが、少し練習をすると危かしいところも無難で行くやうになつた。リストは散歩をしながら外からその音を聞き、入つて行つたのであつた。彼はゴットシユラーグに、これからずつと教へてやらうと云つた。リストは毎週一回ティールフトに来て、よくオルガンで彼の新しい作品をも演奏した。年老いたベルゲトレータ（オルガンの風車を踏む人）に、いつも一ライヒスターラーを呉れたが、このことはこの老人に素朴にも次のやうに云はせるやうに誘つた。

「嗚呼、博士さん、あなたは一週に數回も御出になれないのでせうか」と。——ゴットシユラーグは、その時からリストの死ぬまでいつも彼の園りにゐたのだが、彼は謂はば生字引の地位を占めるやうになつた。リストは彼のことをいつも彼の「口碑的合唱長」と呼んだのであるが、この綽名を説明して、リストは次のやうに云つた。「若し私自身が、いつか傳説となつたら、ゴットシユラーグは私と共に、いつまでも生きることとせう」と。

一八五五年の七月、リストはアルテンブルグに彼の三人の子供を呼んだ。彼等を教育してゐたパテルシー夫人は、丁度バリーで重い病氣に罹つた。そして彼女はもう之以上世話をする事が出来なくなつた。リストはそこで娘達の、これ以上の教育を今度はドイツでせせようと決心した。彼は先づ以て、彼等をワグナーの保護者であるJ・リッター夫人の所へ、ドレーズデンの女塾へやらうと思つた。ところがリッター夫人が承諾しなかつたので、丁度ベルリンに行つてゐた侯爵夫人を通してフォン・ビューロー夫人に、その世話を頼ませた。ビューロー夫人はベルリンで彼女の息子ハンスと一緒に生活してゐたのだが、ハンスはその年の四月一日以來ベルリンのシュテルン音樂學校に通つてゐた。彼女は二人の娘を、彼女の家に預けようと思つて承知してくれた。十二月四日に彼女は、寺院の新しいオ

ルガンを檢閲するために、メルゼブルグに行つてゐたリストから二人を引き受けることになつた。ところがブランデーヌは、もう二三日父の所アルテンブルグに留つてゐたいとせがんだために、彼等は皆フォン・ビューロー夫人と一緒に一週間ほどアルテンブルグに歸つて來た。それから娘達は、フォン・ビューロー夫人と一緒にベルリンへ旅立つた。ハンスに宛て、リストは當時次のやうに手紙を書いた。「貴君が娘達に、非常に熱心に勉強をさせることは大變よいことだと思ひます。といふのは、娘達は貴君が教へてくれることから利益を得ただけでも、彼等の音樂の勉強で充分進歩したのだと思ふからです。それで彼等の中から然るべく『將來の音樂』の優れた宣傳者を作つて下さい。特に彼等に關して、少くとも寛大にしないで思ひます。そして彼等に少しの間違ひも精練も許してやつて下さるな。彼等は前々から貴君に對して相當の尊敬を有つてゐますから、彼等を適當に叩き込むのには何もむづかしいことはないでせう。」ビューローは二人の娘達の勉強を熱心に引受け、そして彼はリストに、彼女達の「才能といふよりは、寧ろ正に天才を現してゐた音樂的能力」に就いて感激的に報告してゐる。特に彼が「最もリストらしきもの」を明らかに認めたコジマの演奏は、彼を非常に驚歎させたものであつた。ダニエルは尙數週間彼の父の許に留り、それからパリーヘリツターの所へと歸つて行つた。

侯爵夫人とマリー姫は夏中ワイマールにゐなかつた。先づ彼等は數週間ベルリンに赴き、次いでパリーに行つた。兩市にあつて侯爵夫人は、凡ゆる有名な藝術家とか、精神的に偉大な人々と交際しようとした。リストはこの旅行中の彼女を勵ました。「といふのは、ワイマールは彼女に、現在殆ど愉快なところではないのです。幸ひなことに、最近侯爵夫人が美術品（繪畫、彫刻、建築）に對して抱いてゐた喜びと熱情的な興味とが再び目覺め、そして彼女は二十年以來ベルリンに居なかつたのだ。彼等の時間をこの意味で愉快に、そして有効に用ひることは容易なこととせ



う。私は彼女が、そこでカウルバハやラウヒや恐らくはフムボルトにも會へるだらうといふことを望んでゐます。それは彼女にとつては吾々の公園を散歩したり、何にもならない手紙を書いたりするよりは遙かにましなことでせう。」かういふ風に、リストは「女友達」に報じてゐる。この女友達とはアグネス・ストリート・クリンドウォルト夫人であり、一八五三年から五五年まで、彼女の二人の息子と一緒にワイマールに来て居り、彼女にピアノを教へてゐたりストと非常に親しく交際した（註・リストは彼女と結婚する意志があるといふ評判がワイマールに廣まつた。侯爵夫人とはこのアグネス夫人のワイマールを去るまで、この夫人のために「後には他の女藝術家のためにも同様なことが起つたが」烈しい不和が起つた）。リストは彼女がワイマールを去つた後、彼女に宛てて書いたこの手紙は非常に親切な性質のものであり、巨匠リストが書いた凡ゆる手紙の中で、彼が専ら自分のことや自分自身の創作のことに就いて述べた唯一の手紙である。彼はこの手紙の中で、いつも「心から迷り出る事柄に就いて、唯、彼の母國語である音楽に於てのみ語る」といふ、彼の最初の言葉に忠實に従つてゐる。リストの性格を知る上に、この手紙は非常な價値がある。

一八五五年七月二十一日に、リストはアグネスに宛てて次のやうなことを報じてゐる。「私は今朝タウジヒといふ十三歳半の弟子を得ました。この子供は今からきつと二三年中に驚くべき進歩をするだらうと私が思ふ子供です。彼はもう凡ゆる作品を驚歎する程に演奏し、又全く奇抜なものを作曲します。」タウジヒの父は生活費を送るのを拒絶したので、リストはアルテンブルグの彼の所に引きとつた。彼は天から恵まれた天才であるが、非常に粗野な少年であつた。リストはよく彼にかう云つた。「カールよ、お前は非常な無頼漢になるか、大した巨匠になるべきか、どつちかだよ」と。彼はいつか金に窮したとき、タウジヒはリストの原譜のまゝのファウスト交響樂の總譜を五ターレル

で賣つたことがある。このことを聞いたゴットシャルクは、それを買ひ戻したが、家中の者は未だ印刷に附さない原稿をなくしたので大騒ぎをしてゐた時に、それをアルテンブルグに持ち歸つたのであつた。同じやうなことをタウジヒはよく實行したらしいが、リストはこのやうな悪癖のために、彼の偉大なる才能を見失ふやうなことはなかつた。秋になるとリストは、尙二つの招待に應じて外へ出かけた。九月二十六日には彼はメルゼブルグ寺院の新しいオルガンを買ふために演奏會に出席したが、この時には彼の弟子ウインターベルガーが、このために作つたB—A—C—Hに基く彼のフーゲを演奏し、その三週間後（十月十八日）に、彼はアプトの招待に應じ、ブラウンシュワイクの演奏會で彼のオルフォイスとプロメトリスを指揮したが、それは非常な成功を收めた。彼の誕生日（十月二十二日）にリストは再びワイマールにやつて來た。ワイマールでは意味深い驚きか彼を待つてゐた。即ち祝日の晩には百人以上の人がアルテンブルグに招待され、その際晩饗の後、「巨匠の支配」といふ祝典劇が上演された。この劇を書いた人はグスタフ・シュタイナッケルといふハンガリアの僧侶であつて、彼はリストのためにワイマールに移住し、ゲーテの離屋に住んでゐた人である。この祝典劇はリストの藝術家及び人間としての廣い活動を個々の生々した狀景や、それに關係するテキストを以て描いたものである。背景はブレラー教授が之を畫いた。筋は音樂によつて伴奏され、時々は伴奏かないこともあつたが、その音樂は作者の諷刺によつてリストの作品からとつた所もあれば、又それを承認させるために、リストが戰つた他の人々の作品を綜合したものであつた。最後の場面は最高潮をなすものであつたが、それはマリー姫が歡喜の天使として、リストの胸像の入つたギリシア風の衣裳を着け、彼にハンガリアで贈られた金の王冠を冠つた場面があり、之にリストの祝典樂が伴奏したのであつた。他の日には新ワイマール協會が誕生日の祝ひを催したが、この時にはゲナストが長い演説をし、彼はリストをコロムプスにたとへ、月桂冠を手交したが、その葉



にはリストの最近の作品が金文字で記されてあつた。大膽な水夫のやうに、リストは陸の安全な港を離れ、僅かな然し選ばれた従者を従へて、民衆が叫ぶのにもかまはず、俗人達が嘲るのを見向きもせず、その存在を神の啓示によつて知つた新しき世界を探すために、勇敢にも、廣い嵐の海洋に出かけて行くのだと彼は云つた。彼の演説の最後に彼は王冠の緑の葉を指さし、それに記されたリストの作品は意味深く緑の島になぞらへらるものであると云つたが、それは彼が難儀して航海をして行くうちに、近い陸地の希望に充ちた目標として發見されたものと演説した。リストは之に答へて、それは彼が他の指導者に従つて新しい世界にまでついて行く多數の忠實なる水夫の中に數へられる限りに於て、この比喩に合ふのだと云つた。新ワイマール協會を建設して行く中、彼の耳に初めて「陸地」といふ叫び聲が聞えるやうになつたが、それは自分達が何を欲してゐたかを知つてゐた多くの人々は、眞面目な力強い努力に向つて結合してゐたことが分つたからである。慣れの陸地に到着することを望むまでは、尙多くのことが克服されねばならなかつた。そして目前にある戦ひは、單に嵐や天候に對してのみならず、凡ゆる元氣な進行を阻止する動かない沼のやうな海の方にひき入れられて行くことに對しても、なさねばならなかつた。而も人々は如何なる瞬間も勇氣を失つてはならない。そして相手の武器がいつかは自分自身の方に向つて來るのを、いつも忘れてはならない。吾が彼に、正直に、謙讓に、誠實に従つて行く限り、吾々の努力を恥づる必要はないのだ。そして過去の偉大なる巨匠達を非常に尊敬して(凡てこれらの人々は、その當時「未來の音楽家」であつた)、次のことを決して忘れてはならない。即ち吾々にも神は作ることを命じてゐるのだといふこと、そして又如何なる時代にも人間性の中に啓示される藝術に於ける不變のもの、永遠なるもののために勇敢に戦ふことは、吾々の義務であるといふことを、彼は今までのやうに、廣く一致團結することを凡ての人に要求した後、彼は協會のために萬歳を高唱した。すると喜ばしい感激的

な反響がそこに居合せた凡ての人々の中に起つた。後程リストはもう一度、こゝに客として出席したルビンシュタインのために乾杯の辭を述べ、非常に愉快な気分の中にこの祝賀の夕べは閉ぢられた。——數日後にリストの優秀な弟子であるブルックナーが、ストットガルトの音楽學校に招聘されたので、ワイマールを去つた。新ワイマール協會は彼のために華々しい送別會を催した。

リストはベルリンで十二月の初めに、シュテルンの管絃樂團の第五回演奏會で、唯自分だけの作曲を指揮する筈になつてゐたので、ベルリンに赴かねばならなかつたが、その少し前に、多年行き惱みにあつたベルリンでのタンホイザー事件が決定を見ることになつた。ベルリンで數回上演された後、中止されるやうになつたワーグナーの以前の作品の運命に、ベルリンでもやタンホイザーも會ふことを防ぐために、ワーグナーはこの歌劇をやるにはリストがそこへ行くといふ條件を出した。

「私には幸運が一人の友を贈つてくれたが、彼のやうな人があれば、もう友人は必要でない。この人は、私の第二の心であり、私を感じたり出來たりすることを彼は感じたり、出來もする。彼が私のためにすることは、如何にも私ができるかのやうに私に固有のものである。私がさう云つてゐるのは、吾々の時代の最も天才的な藝術家のことであり、ベルリンでも、嘗て熱狂的に祝福した人であり、正にまがひもなきフランツ・リストのことである。私の藝術家としての名聲が今存してゐるといふこと、そして私の藝術的な作品に對して尙もその希望を充してくれといふこと、そして又特にこのタンホイザーの存在を貴下に紹介することが出来るのも、皆彼のお蔭です。私は貴下に今私の最も痛切なお願ひをするのですが、貴下は作者に對してその作品の上演に關し承認する全部の歌劇を、私の友人リストにお委せ下さるなら——貴下はこの希望を講じて下さることによつてどんなことになるかお考へ下さい。私の作



品が一人の人によつて完全に上演され、如何にも私がそれを自分でだけ達し得るやうな具合に上演されることは充分確實です。私の作品の承認を得させようとする彼の獻身的な努力に對して、私の友人に立派な満足と與へてやつて下さい。あんなにも壓迫された困難な事情の下にあつて始めた、そして休むことのない勢力で押し通した友人の作品に遂に榮冠を與へるやうに彼にさせて頂き度いものです。私が餘りに弱くて彼の好ましい名譽心を満足させることが出来なかつたのですが、その酬いを、どうぞ彼に與へてやつて下さい。」

然し監督ヒュルゼンが、それに立入らうとしなかつたので、ワーグナーは永い間談判した後、結局總譜を再び取り返してしまつた。リストは今や餘り面白くない状態にあつた。といふのは、事件の停滯がワーグナーに對して金錢上の損失によつて、不愉快な氣持を起させたことを摘發することもなく、リストはこの事件に於て、自分で何もすることが出来なかつたのである。それ故彼は間接に、ワイマール大公を通して、大公に非常に取り入つてみたプロシア王に計畫させようとした。彼はタンホイザーが今度はプロシア宮廷の命で上演され、この歌劇の稽古には彼が王自身の命で従事させられることを望んだ。かくてヒュルゼンの反對はくじかれた。然しながら希望は達せられなかつた。そこでヒュルゼンは、ベルリンに居たワーグナーの女友達アルウィーネ・フロマンを通して最後まで之に直接對抗した。

既に何年間も停滯したベルリンの拒絶のために、大きな金錢上の損失を蒙つたワーグナーは、今や金錢上のことのためにオットー・ウェーゼンドルクに促され、彼の要求を斷念し、タンホイザーを無條件でベルリンに委せることにした。このことが抑々リストの感情をひどく害したのであつた。ところがこの高貴な人、リストは間もなくこの問題の中心を理解したので、ワーグナーを悪くするやうなことはなくなつた。「ベルリンのタンホイザー事件で、吾々は何も氣に病んで白髪一本でも増やす必要はないだらう。小生は小生の役割に對して何もすることは出来なかつたけれども、

かうなるだらうとは前々から思つてゐたことだし、又何とか出来るかも知れない。小生は貴君のベルリンの友人達がこの事件を終結させた満足と彼等に喜んで許してやらう。そして小生が貴君に、どうしても何とか氣持よくやつて上げるやうな機會は、又別に幾らでもあるだらうと思つてゐる。」

十一月二十五日に、リストはベルリンに入つた。嘗ては名手として大勝利を占めた町々では、今や作曲家として勝利を獲得することになつた。「藝術は藝術家の上に位する。素晴らしい藝術家として、私はベルリンを去つたが、今度は藝術の僕として又歸つて來た。」と、リストは當時乾杯の辭にかう述べた。ビューローやラウブ等から組織された委員會がベルリンで作られたが、之はリストに對して榮譽を與へようと運動した。リストは多數の音楽家達によつて停車場に迎へられ、彼のために次の日には挨拶のマチネーが催された。それから演奏會の試演が始まつた。管絃樂は彼の自由に委せられ、速かにリストの好きなやうに與へられた。十二月六日に演奏會はジングアカデミーの満員の會場で行はれた。宮廷の人は全部、それに外國から來た藝術家の中ではヨアヒム、ルビンシュタイン、ジンガー等がそこに出席した。プログラムはかうだつた。一、前奏曲 二、混聲合唱のためのオルガン伴奏のアヴェ・マリア 三、ピアノ協奏曲變ホ長調(ハンス・フォン・ビューロー) 四、トルクワート・タツソー 五、獨唱、合唱及び管絃樂のための十三番のブルサム。聴衆からリストは非常に親切な歡待を受け、作品は好評だつた。最後には三回も彼は舞臺に呼び出された。ところが新聞は、他日非常な無慈悲な仕方で榮譽を傷けた。大抵の新聞はリストが邪道を歩んでゐること、そして正道的なものを書くことは出来ないのだと明白に述べた。然しリストはこのことによつて意氣沮喪させられることはなかつた。彼は唯かう考へた。「未だ一般的になつてゐない考へをこの世の中で有つてゐることは如何に悲しいことであるか。そして私のやうな音楽家の地位がどんなに悲痛なものであるか、益々よく分るやうになつた。然しど



んなことが起つて来ようとも、私は私の義務を果さうとするであらう」と。演奏會後祝宴が催され、三百人の人々が之に参加した。リストは多くの演説に答へて、次のやうな言葉で結んだ。「今日私に與へられた榮譽を、私は私の藝術的な經驗の中で最も喜ばしいものとする。」——彼はその後二三日、彼の子供達とビューローの所に暮したが、ビューローはその時コジマに對して芽生えた戀をリストに打ち開けたのであつた。又ヒュルゼンに誘はれて丁度準備にとりかゝつてゐたタンホイザーのピアノ試演に参加した後、十二月十四日に再びワイマールに歸つて來た。ところが一月の初めに、又もや彼はベルリンに赴いたが、それはタンホイザーの初演に出席し、ワーグナーにその結果に就いて詳しく報じてやるためであつた。

こゝからリストは直接、ウィーンに出發したが、ウィーンで彼はモーツァルト祭の指揮を引き受けてゐたのである。それはモーツァルトの作品の二つの大きな演奏會（二月二十六日と二十八日）から成つて居り、それには素晴らしい人々が、特に第一番には王と王妃までが臨席した。ト短調交響曲が終ると、もうリストは大騒ぎの中に呼び出され、演奏會が終ると、嵐のやうな歡呼と拍手喝采が起つた。リストは二回も舞臺に現れた。最後に人々はモーツァルトの胸像で一面を飾つた冠をとり、市長がそれを滿堂の歡呼の中にリストに渡した。この祭典の記念として市參事會は、藝術家リストに銀製で金を散りばめた指揮棒と金製の記念メダルとを贈つた。ウィーンでリストは、彼の従弟のエドアルドとよく往き來したが、一八五一年以來出來た親しい關係が又改めて強められた。エドアルドを通して、リストは又若い音楽家ヨーハン・ヘルベックとも知り合ひになつた。この人は當時唯小さい教會合唱團の指揮をしてゐたのであつたが、リストから後になつて非常に尊敬され、刺戟を受けることになつた。

ワイマールに歸つてから、彼は新しくやるチェリーニの試演に熱心にとりかゝらねばならなかつた。之は二月十六

日、ベルリオツの出席の下に、大公の母君のために祝典上演として再び上演された。ベルリオツはその數日前にゴータの演奏會に指揮をしたが、その時はリストは此處に赴いた。そして今度はワイマールでも管絃樂團年金のための演奏會に、初めて彼のファウスト全部を上演した。評判は大したものであつた。そしてベルリオツは三回も舞臺に呼び出された。この度の滞在に際して、ベルリオツはローエングリンをも聞いた。——ところが途中にして劇場を去つた。彼をワーグナーの音楽に近づけようとしたリストの凡ゆる試みは失敗に終つた。ワーグナーは全く正當にから判断した。「彼は全然私を理解しないであらう。ドイツ語を知らないことが、彼にこのことを妨げてゐる。彼はいつも唯、虚偽の輪廓で私を見ること出来るだけであらう」と。ベルリオツがワーグナーの作品を拒んだのには、或る競争心も手傳つてゐた。そして、リストが自分の競争者を成功させようとしたことで、彼はリストを非常に怨んだ。ベルリオツのワーグナーに對する不和は、彼のリストに對する關係からも明らかにされる。或る程リストに對するベルリオツの増大する不機嫌と無感謝が、彼等の今までの親しい交はりを止めることになつたけれども、それでもベルリオツの作品に對するリストの變らない共鳴はそれとは無關係であつた。ウイットゲンシュタイン侯爵夫人に對して、ベルリオツは彼のワイマール滞在中、或る日のことウイルヅルを非常に好きだと云ひ、そしてアエナイデの一卷と四巻は音樂劇に對して驚くべき非難を與へるであらうと云つた。侯爵夫人は彼のこの計畫を支持し、その後數ヶ月間の熱心な文通は、トロヤ人といふ標題の附いた、後に彼女に捧げられた作品を作るのに、如何に甚大な關係があつたかを證明するものである。

六月の半ば、リストはマグデブルグの音樂祭に列席し、四回の管絃樂演奏會の最後に、特に第九交響曲が演奏される時には、病氣のリトルフに代つて指揮者の役を果した。ワイマールから來たタウジヒ、ジンガー及びコスマンは、



この際獨唱者の役を演じた。當時にはその他、九つの交響詩の總譜とピアノスコアも出版された。新聞は間もなく之に就いて攻撃し、批評は極端に走り、次のやうなことで書いた。「リストは、彼が作曲家として無能であることを熟慮することが、本當に出来ないやうに見える」と。リストは之に對し次のやうに思つた。「他の人がどんなに、このものに關して悪く判断しようと、それは私としては發見と感情とが少くとも藝術の中の惡事から出たものでないと、私をして考へさせた。私の内面的な體驗の必然的な發展段階であることに變りはないのだ」と。或る友人に宛て、彼は冗談半分に、次のやうな手紙を書き送つてゐる。「成功の王國は、ドイツでは普通容易なことで開かれるものではない。この國でその目的に達するまでには『豫言者』の作者と同様に、唯單に才能を有するといふ幸福を有つばかりではなく、幸福を有つところの才能を保持しなければなりません。」

リストが新しいものを創作出来るかと考へたわけは、音楽家は創作の刺戟を音楽以外の考へ、即ち文學や美術の領域から作り得るだらうと考へたことに基いた。リストは従つて所謂標題樂に屬したが、それは詩の言葉に忠實に、これを音樂的に説明したり、謂はば詩人に對して描寫の役を演ずることに終始するやうなものではなく、寧ろ刺戟を與へる作品の氣分から出發して、獨立の藝術品を作るやうなものであつた。リストは彼の藝術を、他の藝術の下僕まで引き下げるのではなかつた。又彼は外面的なものを描き出すことに満足しはしなかつた。そこで、トインデヒトング 音畫の代りに、トインマレライ 詩を創造した。外面的な出來事は、彼にとつては大切なことでなかつた。寧ろ重要なのは、それによつて人間の中に惹き起される氣分とか、感情とか、或は思想なのである。彼にとつては樂曲の理念といふものが一番大切なので、外面的なものの描寫は、それによつて聽者の側に望ましい感情を解きほぐしてやるために、彼はたゞそのためだけに、時々彼の作曲のなかに（然し副次的なものとして）主張したに過ぎない。オルフォイスの標題は、例へばリ

ストがオルフォイスの傳説を音樂的に敘述するのではなく、聽者の感受能力と思想を一定の方向に向けようとする意味のものであり、この傳説の深い根本内容から汲みとつて、リストが彼の作品に於て示した象徴的な暗示を聽者にもその氣持で行かせることが出来るやうにしたものである。オルフォイスは、リストにとつては藝術の象徴であり、それは傳説のオルフォイスと同様に、森の猛獸、人間の胸中にある強暴な情熱を御して行くことを意味し、オイリディケは藝術によつて間もなく再び作り出されるのだが、その沈滞せる理想を生々と自覺させることが出来ることを意味してゐる。そして又、マゼッパは彼の運命に縛られた天才を暗示する等である。換言すればリストは彼の交響詩に於て、いつも主題の中核に入つて行つたのであり、この主題を彼は特別な場合から一般的な理念にまで擴大し、音樂的に深化しようとしてゐた。——リストが彼の作品を作つた形式は、凡ゆる圖式から自由である。詩的な素材が音樂的形式を創造した。他の作品よりも遙かに高く聳えてゐる、その最も顯著なるリストの創作はファウスト交響樂である。ゲーテのファウストによつて音樂的作品にまで刺戟された數多くの作曲中、リストのやうにこの詩人に近づいたものはないし、又ファウストの詩の内容をこれ程に残らず汲み盡したものはないであらう。彼はゲーテの言葉に従つたのではなく、寧ろ彼は吾々のために詩全體の理念を形成した。これは彼にとつてはファウストとグレッツェンとメフィストフェレスの三人の姿に於て顯現される。かくてリストは彼の作品を三樂章に分け、その中で各々三人の性格を描かうとした。最初にファウストの力強い輪舞が出てくるが、それは人間の大胆に立ち上る勇氣と、彼の前を通り過ぎる疑惑を人間に認識させようとするものである。次にはグレッツェンがやつて來るが、それは女の全く純潔な若々しい香りと優しさを表すものである。最後のメフィストは、凡てを否定する原理である。このメフィストの樂章でリストは、最も偉大なるものを創作した。そして最も正しい意味で標題樂か何を意味するかを示した。ファウストと



グレッツェンの姿が一定の主題によつて特徴づけられることが自明であつたが、メフィストを形象化することは、非常に困難であつた。リストは詩の精神に従つて、メフィストを独自の主題によつて表現する道をとらず、寧ろこれを彼の行爲によつて表さうとした。リストはメフィストの破壊の精神を悪魔的な喜びを以てファウストの主題に襲ひかゝらさうとし、その主題を不明になるまで順々に否定させてゐる。彼はグレッツェンにも肉薄した。而も彼女には、彼女の主題を無視して、彼の狂猛な攻撃をするやうなことをせず、又彼女を亡ぼすまでその力を振ふやうなことをしない。徹頭徹尾リストは、彼に榮譽ある結末を與へ、詩の思想を公平に取扱はうとしてゐる。そして最後は神祕の合唱によつて結んでゐるのだが、その基底には主なる主題として、グレッツェンの主題の獨唱が入つてゐる（之は再び全く論理的なものであるが、勝利は勿論彼に負うてゐるからである）。ところが、他面合唱にはリズム的にファウストの主題が含まれてゐる。二人は今や一緒に救はれてゐる。——リストの作曲で、これ程に天才的な意欲と實行とがうまく一致してゐる作品はない。各々の志向はその好適な顯現を體驗した。こんな風にならなく行つたものはリストの場合その他にはない。成る程偉大なる思想をリストの交響詩から認めることはいつも困難でないであらうが、それは純粹に表現されるものではない。彼自身はこのことを明らかに感してゐた。「私の作曲の中に於て、善き意志と事業上の實行との間にある不一致を、私よりも正確に感ずる者は誰もないであらう。それでも私は内面的な要求と古い習慣とから書くことを續けて行く、その目的を高くかざすことは誰も妨げないであらう。だがそれに到着することは、どこまでも疑問だ。」

この非常に輕蔑されたリストの音樂作品を、最初に育てた所は、既に前々から有名になつてゐたゾンドルスハウゼンのローコンツェルトであつた。こゝでは七月から九月まで、毎日曜日綺麗に飾られた公園の端の方で、所謂「ロー」

で大管絃樂の演奏が行はれたが、それには外國人も、内國人も（大概二千人から三千人）入場無料であつた。之は藝術的なシュワルツブルグ・ゾンドルスハウゼン侯によつて組織されたものであり、この樂團は完全にそのことだけで生活をしてゐた。認められた指揮者エドアルド・シュタイン（一八五四年から六四年までゾンドルスハウゼンにゐた）はリストが云ふやうに、「全く並々ならぬ感激と確實さを以て」リストの交響詩を何遍も演奏し、リスト自身はよく多くの彼の弟子達と一緒に、そこに聴きに行つたものである。

八月の初めに遂にハンガリアから、リストのミサ曲を同月の三十一日にグランの寺院の開堂式に演奏するといふ確定的な通知が來た。彼自身試演を指揮しようとして、彼は既に八月八日にワイマールからベストに向つて旅立つた。ベストとそこから二時間半ばかり離れてゐるグランで、彼はあらん限りの力を盡して榮譽ある再現をしようと努力した。この作品に結局着手するには長たらしい討論を待たねばならなかつた。悪意ある陰謀がリストのミサ曲を演奏するのを妨げようと、色々なことを試みた。反對の中心になつた者はリストの幼な友達のレオ・フェステイクスであつたが、この人はリストに對して今でも尙友人の付き合いをしてゐたのに、一方彼は手紙で大僧正のところへ「この音樂的に無意味なものの保護者の役を演じないやうに、そして聖なる音樂に反對に、この音樂的に馬鹿げたことを保護することによつて彼の名譽を臺なしにしないやうに」と願つた。アウグスト男爵がそこへ勇敢に入つて行つたお蔭で、この陰謀は効を奏さず、グランのミサ曲の演奏はバジリカ（長方形の寺院）の落成式に出来るやうになつた。

八月二十六日に、リストの指揮で公開の總練習がベストで行はれ、レオポルド寺院、今日では聖ステファン寺院の建設費として六千フランの収益を擧げた。一八五六年八月三十一日に、その時からグランのミサ曲と命名されることになつたリストの莊嚴ミサ曲が、彼の指揮で、新しく落成した寺院で、皇族方やハンガリアの凡ゆる貴族達の臨席



の下に、禮拜と同時に初演された。寺院の音響効果が悪く、凡ての音が圓天井の所に集まり、音が混つてしまつたために印象はよくなかつた。ベストのシユタットパール教會で九月四日にもう一度演奏された時、初めてこの作品が實に立派に聞かれた。總譜はウィーンの國立印刷所で國家の費用で印刷された。

グランのミサ曲は、リストの作品の中では非常に重要な契機をなすものである。即ちリストは彼が永い間理論的に考へてゐた教會音樂の改革に着手することが初めて實行に移されたのであり、而も最もよい成果を収めたものであつた。彼自身、女友達にから書き送つてゐる。「私は之を以てカトリック教會音樂の作曲家として眞面目に地歩を占めました。といふのは、之は私が熱心にやつて見たいと思つてゐた無限の藝術の領域です。來年はカロクサで演奏されることになつてゐる別のミサ曲を書くでせう。僧侶達のなかで、理解ある人々は私のミサ曲初演の後、私を認めてくれました。私の熱狂的な味方の數は、僧職にある人々の間で段々増えて來ました。——パレストリーナ、ラッス、バハからベートーヴェンまでの、私が前にした勉強と最近した勉強は非常に私のためになつてゐます。數十年以來、私は教會音樂を書かないと主張し通して、普通並みのものだけを書いて來たのだが、この三四年中に教會音樂の精神的な魔力によつて完全に心を奪はれてしまひました。——今までの價値の低い、片づけられた作品がそれに有効であつたとしたら、それで丁度よいのでせう。教會音樂では物の根本にまで立入り、永遠にまで流れて行く生きた根源に押し進むことを問題とするのです。」

リストはこの祝典の後、數日ベストに滞在したが、こゝで彼は公けの席に現れるや、いつも感動的な喝采を受けたのであるが、九月八日には管絃樂團員の年金のための國民劇場に於ける演奏會を指揮し、その時はレ・ブレリュードがアンコールされ、その他ハンガリアを演奏した。當日の朝にはその他彼の小さな男聲のためのミサ曲が、所謂ヘルミ

ネン樂堂で大僧正自身によつて擧げられた。晝食にはリストは當日ベストのフランツィスカ教派の人々に招待され、こゝでは彼は當時の僧正ハイナルドと知り合ひになつたが、この人とはリストは後に交際繁くなるやうになつた。リストはこゝで彼が前々から、この教團のためと思つてゐた山嶽交響樂を發表した。彼はそれからはフランツィスカ教團の一員となつたが、それは彼の誇りとし、彼を幸福にした一つの榮譽であつた。

ハンガリアに於けるリストの成功によつて、國民劇場の監督ラダイ伯爵は、ハンガリアの歴史或は傳説から作つた最もよい臺本に對して八十ドゥカートの懸賞募集をし、之にリストがハンガリア國民歌劇として作曲するといふことになつた。第二と第三の賞に當つた臺本には、ハンガリアの作曲家エルケルとドップラーが作曲を依頼された。ところがこの計畫はリストに關する限り實現しなかつた。ウィーンでは九月十五日に、ヨーハン・シユトラウスがリストの出席を得て、マゼッパを演奏したが、その時はアンコールされる程の成功を収めた。ウィーンを通つてそれからリストはブラーグに行つたが、そこでは彼のためにワーグナー週間を催し、九月二十八日に彼のグランのミサ曲が唱はれた。

十月一日にリストは再びワイマールに歸つたが、それは侯爵夫人とマリー姫とを伴つて五日に再びそこを去り、遂に今まで永い間約束し、いつも延期してゐたスキスにワーグナーを訪れることを履行するためであつた。今やそれは實現された。そして今度は永い間滞在することが出來た。ところが、兩人の會合は、一八五三年の素晴らしい高貴さなまで、残念ながらどうしても達しようとしなかつた。その理由は侯爵夫人にあつた。彼女はチューリヒの學界の有名な人々と交際し、自分の圍りに彼等を集めようとしてゐた。彼女はホテル・ポール・アン・ラックの一階に住んでゐたが、そのホテルに多くの宴會や集會を開いた。チューリヒで重要な人物は残らずそこへ集まつた。このやうな騒がし



い混雑は、どうしてもワーグナーの趣味に合はなかつた。そして彼は出来るだけそこから脱れようとした。ニーベルンゲンの斷片を、リストがピアノに坐り、ワーグナーが歌つて試みた瞬間は、全くの清寂な時であつた。チューリヒ時代の頂點をなしたのは十月二十二日の晩であつたが、その日はリストの四十五回目の誕生日であり、その時にはホテル・ポールで祝ひに來た大勢の聴衆の前で、ワルキューレの第一幕を完全に演じたが、リストはピアノを弾き、ワーグナーはジグムントとフンディングになり、樂長ハイムの夫人がジグリンデの役を演じた。評判は熱狂的なものであつた。次の日にリストは少し前に完成したばかりのダンテ交響樂をピアノで演奏した。ハーウェーは、この時の印象を熱情的な詩で祝つた。ワーグナーもひどく感動した。ワーグナーがリストの作品をさう呼んだやうに、この「最も純粹に淨化されたダンテの詩の精神」は、後ワーグナーに捧げたが、之はそれからリストの音楽中、ワーグナーが最も好きな作品であつた。彼はそれをよく「吾々の」或は「私の」ダンテと呼んだ。友人リストは社交的な動機からよくワーグナーを遠ざけたので、ワーグナーは後になつてこの時のことに就いて「凡ては私にとつては面倒なことになり、結局チューリヒの教授連から段々區別されるやうになつた。」とか、或は「吾々の侯爵夫人に對してどんなに狂信しても、教授連のこの悪魔的な者共を好むやうには、私にはどうしてもなれない。」とか云はせたのであるが、兩人はそれでもお互に非常に近づきになる時もありあつたのである。或る晩のこと、リストは友人ワーグナーを家につれて行き、この機會に彼はワーグナーに彼の家庭的な心配に就いて打ち明け、主として彼の悲劇的な結婚のことを話した。その時リストはワーグナーを突然抱擁し、何も云はずに彼の唇に接吻した。ワーグナーは後になつてこの瞬間のことを次のやうに云つてゐる。「多くの人によしんば私に對する印象を忘れてしまつたにせよ、貴君が小生に對してあの晩どんなであつたといふこと、あれから家に歸つて貴君が書いて寄越した驚くべき共感、貴君の性質にあるあ

のやうな高貴なものは、私にとつては素晴らしい記憶としてどこまでも残つて行くことであらう。」リストが約三週間滞在しようといふ計畫は、三倍に延ばされた。餘り喜ばしくない理由はリストの病氣であり、彼は約十四日間病床に横はつてゐなければならなかつた。「私は不快であることなどは顧着せず、私はこゝでワーグナーと素晴らしい日々を送つてゐる。そして彼のニーベルンゲンの世界で、私は満されてゐるのだ。こんなことは吾々の手細工音楽家やがらん洞の蘖を打つてゐるやうな批評家には、全然想像もつかないことだ。」と、彼はA・シュテルンに報告してゐる。リストが全快した後、十一月の末に聖ガレンへの旅行をしたことで、この滞在も終りを告げたが、その音楽指揮者が彼等を招待したのであつた。機會を利用してワーグナーに管絃樂で、何か自分のものを演奏させようといふ考へを有つてゐたリストは、その招待に應じたが、ワーグナーはエロイカの指揮を申し出た。

ワーグナーは自敘傳に、次のやうなことを云つてゐる。「こゝで吾々は『ツーム・ヘヒト』といふ宿屋に一緒に泊つたが、侯爵夫人はその間如何にも自分の家に在るやうに吾々を接待した。かうして彼女は私と私の妻に彼女自身のものと同じやうに注目された筈であるが、別段の印象を惹き起さなかつたらしい。非常に驚いたことには、次の朝マリは全く平氣で何事もなかつたやうな風をして普通のやうに出て來た。そして侯爵夫人の圍りではこんな暴行には完



全に馴れてゐることが今となつて分つた。——こゝでも色々の招待者で家が満員であつた。そして『ヘヒト』の生活も『ホテル・ボール』の生活に少くも劣らなかつた。」

演奏會は十一月二十三日に催された。リスト指揮の第一部にはオルフォイスとレ・ブレリユードとグルックの二つの聲樂ロマンスとが演奏された。第二部ではワーグナーの指揮でエロイカが演奏された。リストの作曲は友人に深い印象を與へた。「リストのオルフォイスは私を深く捉へました。之は最も美しい、最も完全な、否他に比類のない音詩の一つです。作品から享受したものは、私にとつて大きなものでした。聴衆にとつてはブレリユードのほうが受けがよかつた。それはアンコールされねばなりませんでした。リストは彼の作品に私が驚歎したので、非常に満足さうでした。」と、ワーグナーはオットー・ウェーゼンドンクに宛てて手紙を書いてゐる。聴衆は二人の巨匠に大きな表明をしよとした。そして次の日、彼等のホテルで宴會が催された。このやうに豫期しない程に演奏された音樂祭の後、ワーグナーは友人達をワルシャハに連れて行つたが、それから獨りでチューリヒに歸つた。かうして一緒に暮した時のことを彼はウェーゼンドンクに宛てて書いてゐる。「この度のリスト訪問の結果として私は、私の彼に對する友情が減少するどころか、却つて本質的に強められたと云ひ度いのです。私の作品の本當の深さに徹するためには、私のことを未だ非常に必要であると、彼が結局熱心にさう私に告白せねばならなかつたのであるが、この好ましい熱情は、表面的な理解の多くの表明に關して、私の中にあつた心苦しさをすつかり解決してくれました。その他二人の姉妹、特に侯爵夫人との私の交際は、結局のところ私に對して好感を與へるやうになりました。私は侯爵夫人の心の寛大さに對して非常に氣持のよい感じを抱くやうにさへなり、そこで今は私の孤獨さの中に、丁度學校から歸つて來た時のやうに何かを學んだやうな氣持を有つやうになりました。」

リストはワイマールへ歸る前に、侯爵夫人と尙暫くの間ミンヒエンに滞在したが、そこで彼等はウィルヘルム・フォン・カウルバハとよく交際をした。彼はリストによつて立派な繪を畫いたが、彼の異教徒の戦はリストを刺戟して翌月演奏された交響詩に同じ名前を付けさせた。リストは彼の友人の他の繪をも音詩の題目にしようと考え、而もカウルバハがベルリンの博物館のために畫いた全卷の繪をもさうしようとした。彼の頭には一種の「繪と音で表した世界史」といふやうなものが浮んで來た。「凡ての之等の繪、或は二三の之に類似せるものを作曲しようといふ私の考へは強められた。私が必要とする詩人を見つけたら直ぐ私はこれを實行するだらう。といふのは、凡て之等の材料は不思議な程、音樂にも詩にも當てはまるから。」ところがこの計畫は實現されなかつた。——一八五六年十二月の半ば、リストは再びワイマールに歸つて來た。彼の健康は未だ充分に回復されてゐなかつた。そして冬中病氣をしてゐた。そこで彼はつと引籠つて自分の仕事に従つてゐた。シラー交響樂(理想)、異教徒の戦及び幸福の讚美(後オラトリオ・キリストの中に取り入れられた)が先づ着手された。オットー・ロクエッテのテキスト「聖エリザベート」も既に作曲された。

非常に有名になつたワイマールから弟子達の中には去る者があり、そして之等の人凡ては彼等の師匠の名聲を世界に傳へた。その代りに親しくリストの許へ來た人々は、F・シュライバー、L・ハルトマン、ラッツェンベルガー等であつた。リストが永い間計畫してゐた管絃樂の豫約演奏會は、このシーズンにも實現されなかつた。といふのは、ワイマールには未だ演奏會場がなかつたからである。ジンガー、シュテール、ワルブリユール及びコスマンの四重奏の夕べ、それには、その時よく優れた女流歌手のエミリエ・ゲナスト(後のメリアン夫人)が共演したが、これが唯一の音樂的な贈物であつた。エミリエ・ゲナストは舞臺監督の娘であり、リストの歌曲を彼女は初演の時公けに唱つたもの



であるが、彼女はリストに非常に尊敬され、高く評價されてゐた。彼は或る日、彼女に「私の難解な、悪く批評された抒情詩を喜んで勇敢に唱つてくれる人に、尊敬と感謝の念を以て」といふ銘の入つた彼の歌曲集を贈つた。

タンホイザーの指揮を以て、リストは一八五六年十二月二十六日に、彼のかくも永い間中断してゐた歌劇の仕事を再び取り上げたが、この時には非常な喝采の的となつた。一八五七年一月八日に管絃樂團員の年金のために劇場で續いて行はれたが、その時才能豊かなリストの弟子ブロンスアルトが、ワイマールに別れを告げた。この時山嶽交響樂とリストの第二ピアノ協奏曲イ長調が初演された。後者の協奏曲はブロンスアルトによつて暗譜で素晴しく演奏されたが、この曲は當時を想ひ起すために、後にブロンスアルトに捧げられることになつた。リストも、彼の弟子ブロンスアルトも心からの喝采を博した。

二月廿六日にライブチヒで行はれた管絃樂團員の年金のための演奏會は、残念ながら成功を収めなかつた。その時は第二部がリストの作曲だけで、而も作曲者自身の指揮の下に演奏されたのであつた。リストが彼のために非常に意義深いこの晩に誘はれたのは、コンサート・マスターのダヴィッドのためであるが、その人はリストに對して常に忠實な友人であつた。ライブチヒは今でも未だ保守的であつた。そして新しいものは、たかく、シューマン位のもを我慢して聞いてゐるに過ぎず、新ワイマールなどはひどく嫌つてゐた。リストが現れた時には非常に親切に歓迎され、プレリユードも好評を博したのであるが、マゼッパは無慈悲にも拒否された。若干の喝采を送る者と、マゼッパの中のシンバルによつて狩り立てられた嘲笑組との間には、本當の鬭争が起つた。この曲を選んだことはあまりうまくなかつた。といふのは、新しいものに對して既に敵意を持つてゐた聴衆にとつては、この曲は非常な力で凡ゆる攻撃の的を提供したやうなものであつたからである。二つの管絃樂曲の間に第一ピアノ協奏曲が演奏されたが、それを以

てビュローは何とも云はれない結果を収めた。三日後にリストはライブチヒでタンホイザーの上演を指揮した。序曲が終つた後、彼は大喝采を受けることが出来た。その晩は、それでも何遍か示威的な嘲弄を受けた。ライブチヒの演奏會の部分的な不成功はリストにとつて禍ひとなつた。即ち新聞は多年この事實を固執してゐたので、このことはリストの全作品にまで一般化されることになつた。この年に反抗的な無禮と個人的な攻撃にまで増大させることに充分の機會を與へたところの新聞の狩り立てが、こゝに始まつた。人々はリストを呼んで悪評のある非作曲家と云ひ、彼の拙い作曲は直接嘲笑を惹き起すやうなものだ。」とした。ライブチヒ及びドイツの大概の音樂堂は多年の間、リストの作品に閉め出しを食はせるやうになつた。

ジャーナリスティックな喧騒は、非常に急速にウィーンにその繼續を見出した。こゝではプレリユードが或る社交演奏會で嘲笑され、主義あるツェルナー紙を除く全新聞から拒否された。反對者の先頭に立つたものはエドアルド・ハンズリックであり、彼はリストを彼の死ぬまで苦しめたのである。「彼の論説は陰險であるが、全體としては整つてゐる。それでも彼の論辯を零に歸することは私にとつて容易なことである。そして彼は充分賢い人間だから、こんなことは分る人間だと私は思つてゐる。」

これに對してハンズリックが未だ一八四九年にサウルスからパウルスにならない以前、或はリストがいつたやうに彼が「彼の重要な役割」を演じない以前、ウィーン新聞に於て大いに標題樂に味方をしたこと、否それどころでなく、彼は尙一八五四年十月に、彼の著書「音樂美に就いて」(Vom Musikalisch-Schönen)を書く前論文となつてゐる極端な請願書に於て、リストを優秀な同意見者だと思つてゐる(リストは然し之を拒んだが)ことを確めるのは興味がないことではない。



ウィーンの演奏會には、リストに對する又別の苦い經驗が結びついた。彼の以前の友人である銀行家シモン・レーウィはリストの作品を演奏してゐる間、彼の豫約の座席を空け、人々に分らないやうに會場の隅の方に逃げ隠れてゐたのである。「勇氣と熱情のない友情は、私には他人と同じことだ。何時一體私は彼に私のことに就いて恥かしい思ひをさせる機會を與へたのだらう。信念に忠實に従つて、凡ゆる卑劣な手段や偽善的な陰謀を輕蔑し、高い目的に向つて正直に勇敢に努力するやうな高貴な人間として、私は全藝術界に立つてゐるのではないのか。」とリストは正當な興奮を以て、従弟のエドアルドに宛て、書き送つてゐる。このやうな錯誤は唯一人に止まらなかつたらしい。

次の月は、リストは非常に苦しかつた。彼はチューリヒで皮膚病に罹つたが、どこまでも他の場所に膿が擴がり、脚にまで來たので、時々彼は病床に寢てゐなければならなくなつた。侯爵夫人もリューマチスのために何週間も部屋から出ることが出来なかつた。リストは而も彼の指揮の働きも出来ないのではないかと思ひ誤り、彼は今や屢々坐つてゐながら指揮棒を振つて見たが、それは彼にとつて恐ろしいことであつた。四月二十四日に彼は管絃樂演奏會で、編曲されたプロメトイスを演奏したが、正に嵐のやうな大成功を收めた。ポールのテキストをつけたこの新しい考へは確かに立派なものとなつた。五月十日に歌劇場では、その他才能のある若い音楽家で、後にワイマールの宮廷樂長となつたエドアルド・ラッセンの歌劇「ルドウィヒ方伯の新婚の航海」(Landgraf Ludwigs Brautfahrt)が初演された。

五月の半ば、リストはアーヘンに赴いた。彼は何遍も下ライン音樂祭の指揮に招かれた。彼は二回これを拒絶した後、人々は代表者をワイマールに遣はし、彼にとつてそれを引受けさせることにした。音樂祭は五月三十一日から六月三日まで行はれた。リストは最初からひどい反對を受けねばならなかつた。といふのは、少數の者が凡ゆる手段を以てヒルラーに指揮させようと試みたからである。ところが音樂祭の間反對者は成功しなかつた。リストの熱狂的

な指揮振りは、五百人以上の共謀者より成る人々から多くの期待しなかつたやうな妨害を受けたけれども、間違ひもない勝利に歸した。初日にはベーターヴェンの清祓式序曲とヘンデルの救世主が演奏されたが、救世主は殆ど省略せずに全部演奏した。ところが演奏中バス歌手の聲が覆れたために、大概の詠唱から彼の聲部を除かねばならなくなつた。フォン・ミルデ夫人(ワイマール)は熱狂的な喝采を博した。第二回には主なるプログラムとしてバハのコンタータ、ベルリオヅのキリストの幼時よりの「エヂプトよりの逃亡」及びリストの祝典樂が演奏された。リストは嵐の如き喝采を浴びせられた。管絃樂は歡呼の聲に伴つて喇叭を吹き鳴らし、リストは四回も舞臺に呼び出された。二百以上の花束が舞臺を覆ひ、市長の娘が彼に立派な月桂冠を手渡した。三日目は獨奏會であり、その時にはビューローがリストの變ホ長調協奏曲を演奏した。それは唯僅かしか共鳴を見出さなかつた。終つたとき「友人」ヒルラーは鍵盤の所で口笛を吹いてリストに向けられた示威の標しを與へた。音樂祭が終つた時、リストはアーヘン市から金製のメダルを贈られ、大勢によつて感激的な歡呼が彼に示された。ところが、その次の日から新聞では再び全くの惡魔的な批評が始まつた。その先頭に立つたものはヒルラーで、彼はケルン日報に「アーヘン音樂祭に關する報告」といふ題でリストを最も嫌惡すべき仕方でも攻撃した。そして又彼はリストに一本の手紙を寄せ、彼の個人的な競争心の動機から起つた行動を、尙藝術的な根據で覆ひかくさうとするのを憚らなかつた。

リストの高貴な性質は勿論かうした卑劣な戦ひ方に、特にそれが以前には彼に近い間柄にあつた人々によつて用ひられたので、非常に惱んだ。彼はワイマールに歸つてから皮肉たつぷりと次のやうなことを述べてゐる。「私は指揮者としても、作曲家としても資格がないといふ明らかかな證明を、黨派的でない批評に與へるため、私がアーヘン音樂祭で經驗せねばならなかつた色々の緊張の後、そしてたかゞ、全音樂學校や音樂界の主權者達や保護者達によつて



その創立を次の日に期待さるべき未來音樂の養老院に、或る席をとつて貰ふやうに要求した。——（勿論この養老院は唯オーストリアにだけ建てられてよい。といふのは、人々が寛大だから創立者達はうるさい者共や墮落した會を除いてしまふ目的をも一緒にするからである。）——私は旅立つた時よりも幾らか面白くない氣持で、ワイマールに歸つて來た。……」

ところが、もう一つもつと彼を苦しめた事件があつた。即ちそれは彼と多年心からの交はりをしてゐた親友のヨゼフ・ヨアヒムから、全く豫期しないやうな次の手紙を受取つたのである。「小生は貴兄の音樂が全然分らない。貴兄の音樂は、小生の理解力が幼少の頃から吾々の大家達の精神によつて養分として育てられたものに全く反してゐるので、小生が大家達の作品から愛し、尊敬することを學んだもの、そして小生が音樂として感ずるものが皆奪はれてしまひ、小生はそれを皆放棄してしまはねばならなくなつたことを御考へ下さい。貴兄の音樂は小生の恐ろしい無味乾燥な荒野を、何も充してくるものではありません。……そこで小生はカール・アウグストのためのワイマールの音樂祭に参加するやうにとの貴兄の最近の御招待には應じ兼ねるやうになつたのです。小生は偽善者として存在するに、餘りに高く貴兄の性格を尊敬してゐます。」

記憶すべきことであるが、ヨアヒムは一八五三年一月一日に彼が二年以上も活動したワイマールを去つて、ハンノーヴァーへの招聘に應じた。ワイマールで彼は新しい方向には全然理解がなかつた。そこでビューローはウーリヒに宛て、愉快に、次のやうなことを報じたことがある。「ヨアヒムは新しいものに對する非常に熱心な優秀なる闘士になると約束した。どうしてこんな人がワイマール化しただらう。或は寧ろ反ライプツヒ化しただらう」と。彼は初めからリストの作曲傾向に敵意を持ち、そのためにワイマールを去つたのであるといふことで、ヨアヒムの氣のきかない態度を許してやらうと、人々は後になつて試みた。然し之はどうしても間違ひである。彼が二三週間ハンノーヴァーに滞在した時、彼はリストに彼の序曲ハムレットを、次のやうな手紙を添へて送つて來た。「貴兄の活動によつて、絶えず新しい響きに充されてゐた雰圍氣から、北方の保護者（劇場監督プラーテン伯）の監督の下に、休養の時代から全く堅くなつた空氣の中に入つたこのコントラストは、餘りにもひど過ぎます。どこを見ても私と同じことを努力してゐる者は誰も居りません。ワイマールのやうに同じ考へを有つて集まつた友人達のやうなものは、全然ありません。最も烈しい意欲と不可能な實行との間の間隙は、私をして疑はしい氣持にさせ、退屈を感じます。私はそこでハムレットにとりかゝりました。私のいつも寛大な先生よ、總譜を見て下さいませんか。そしていつものやうに黙つて、私があなたの側にあるやうな御氣持で見て下さい。そして貴兄の音樂的な叡智の熱情で私に忠告を與へて下さい。一八五三年三月二十一日。」後でも彼は「喜んでその指導に従ふ舵手」リストに、尙多くの彼の作曲を見て貰ふために送つた。ピアノと管絃樂のための、リストのハンガリア狂詩曲について、彼は尙一八五四年にかう判断を下してゐる。

「形式の自由さが餘りに面白いので、コチーの古典音樂家でも本當に好きになつて、いつの間にかジプシーと一緒になつてしまふ」と。そして一八五四年十一月十六日にリストの交響詩をハンノーヴァーで演奏してくれるやうにと頼んで來た。「貴兄の交響詩をこゝでやつてもよいと御約束なされたのを想ひ出して下さい。若しも貴兄がこれをなさるならどんなに私が嬉しいか、又そのことに對して私に與へる刺戟かどんなものであるかを御考へ下さい。私の進歩と向上が貴兄に對して無頓着でなくなつたことを自負してゐる次第です。」

ヨアヒムは毎年、數日或は數週間、客としてアルテンブルグに滞在し、そしてリストも彼を二回ハンノーヴァーに訪れた。ヨアヒムはカールスルーエの音樂祭に参加し、ワーグナーにニーベルングの上演を委任し、而も兩人は兄



弟の如く「お前」<sup>ドゥー</sup>を呼び交はした。どうしてこんな急變が起つたのであらうか。リストに對する追立が起り、リストと彼のヨアヒムは背後に退き、新しい方向から身を引くのが得策だと考へた。ところがリストが彼を招待し、ワイマールの華やかさの中に積極的に乗り出させようとした時に、彼は決心せねばならなかつた。そして彼はリストに餘り敵意のない拒絶の手紙を出した。「ヨアヒムは私を拒絶し、彼が今占めてゐる地位にベルリンで到達するために、私をベルリンから斥けねばならなかつたのだ。」と、後でリストが話したことは、爪の先から頭の先まで本當のことである。「恩知らずの汚名を着ることは、私にとつて大撓船の強制的な仕事のやうな悪運に思はれる。」といふ考へを抱いてゐたリストが、恐ろしく慄へ上らねばならなかつた彼の拒絶に際して、然しながらヨアヒムは全然それを止めようとしなかつた。彼はそれのみならず、彼がかくも恩に預かり、嘗ては非常に親しくしてゐたリストに對して、公けに反對しようとしたのである。彼はブラームス、グリム及びB・シヨルツと共同してかの悪評のある公開の宣言をしたのであるが、その中にはこんなことが云はれた。「署名者達はかう宣言する。即ち所謂、新ドイツ派の指導者及び弟子の作品は、一部はブレンデルの雑誌の根本命題を實際に適用し、一部はどこまでも新しい、聞いたことのない理論を立てることを強ひるものであるが、それは音樂の最も内面的な本質に反するものであり、唯悲しむべき忌々しいものであるのだ。」

吾々はヨアヒムの以前のつた態度と思ひ合せて考へて見るならば、實際さうして見度いのであるが、かうしたりスト攻撃はどうしても本當にされないやうなものではない。「親しきリストよりも親しき音樂」といふ命題で高潮に達した彼の後の表明も、唯辯解の試みに過ぎない。リストは勿論間もなくヨアヒムとの個人的な交際を止めた。ところが彼が「凡ゆるヴァイオリニストの王」と呼んだこの藝術家に對しては、リストは何も變るところはなく、彼のこ

をいつも非常に賞讃して話してゐた。

ペーター・コルネリウスは、リストの反對者の態度をルビンシュタインに關して非常にうまく次のやうに述べてゐるが、ルビンシュタインも餘りリストの恩に感じないことをしたことがあつたのである。「ルビンシュタインは自分の作品をリストが演奏してくれたといふことの一瞥のみ、最近のリストに同情を持つてゐる。それは全く驚歎に値することであるが、彼の承認はそれ以上のものではないのだ。これらの人々がワイマールに對する關係は、多くの現代の僧侶達がキリスト教に對する如き關係である。彼等はその果實や小枝を讚へ、それらを鑑賞するけれども、幹を否定し根を無視する。ワイマール樂派は彼等のために存するのではない。彼等は自分達の利益をのみ喜び、之が數百のそれに關係する條件の結果に過ぎないといふことを洞察しようとしなない。その永續などといふことは、彼等にはてんで問題でなく、それどころか寧ろ反對なのである。」

一八五七年の初めに、リストの才能のある息子ダニエルがパリを出發し、彼はコンクールで特別な成績を收め、リチエーを去つて後、ワイマールにやつて來た。「ダニエルは暫くの間私どもの所に留つてゐました。彼は可愛い子です。——そして理性もあり、愛情もあり、性格が氣持よく、顔も優しい子です。今彼の父は少しばかり音樂で清めてゐます。ところがこの子供は大變才能がありますから、今までは全然違つたことをやつて來たのですが、彼の父のやうにやはり作曲家になれるでせう。この子の細かな音樂的な感覺は父を本當に驚かしました。」と、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人はチューリヒのハーウェーに宛て、報告してゐる。ダニエルはそれからベルリンのゴジマの所を訪れ、大學で法律學の勉強を始めるために、ウィーンの叔父のエドアルドの所へ行つた。彼は外交官の徑路を選んだ。リストは脚が悪いのを治すためにアーヘンの湯治にその夏を暮し、それから二三日ベルリンに滞在したが、そこで八月の



十八日にヘドワイヒ教會でコジマとハンス・フォン・ビューローの結婚式が行はれた。ブランデーヌはパリーの彼女の母の許に行つたが、こゝで彼女は法律學者の、後に大臣になつたエミール・オリヴィエと知り合ひになり、彼は十月二十二日にフロレンスで彼女と結婚した。かうしてリストは彼女の子供達かしつかりした保護者の許にあるのを知つた。そして彼等に對する彼の義務は全くなつてしまつた。ところが侯爵夫人との彼自身の關係は未だはつきりしなかつた。彼等の永い間續いた結合を廻る疑惑を蒙つた色々な事柄、そして彼等に負はされた困難な犠牲について吾はもう一度述べなければならぬであらう。こゝでは唯侯爵夫人の社交的な地位が、既に一八五七年には保つことの出来ないものとなつてしまつたことだけを述べよう。最初の中は大公妃マリア・パウロフナの好意のお蔭で「怒り」から脱れてゐたのだが、段々に、特に宮廷からは公けにも身を引かねばならないやうになり、「不道徳な」現在の状態に對して攻撃されるやうになつた。侯爵夫人はワイマールでは民事的に殺されたも同様であつたが、それどころか街上で嘲笑されるやうにまでなつた。社交界でさへも或る日のこと宮廷僧侶ディッテンベルガーの側からキリスト教的な博愛を施して貰つたお蔭で、面倒な事件が起つた。ディッテンベルガーがザクセンの公使の招待に際し、侯爵夫人に紹介されることになつたとき、彼は次の理由を以て拒絶した。即ち彼には一婦人に紹介されることは出来ないもので、若し彼女が彼の教區に屬してゐるならば、その婦人には事務的に交渉するだらうといふ理由であつた。九月の祝典に際して侯爵夫人の社交界の他の人々に對しても同様の悪いことをさせた。即ちゲーテ、シラー記念碑の除幕式を參觀するため、一つの窓が彼女のためにどつてあつた部屋の中に、彼女が入つて行つた時、みんなは輕蔑の笑を投げて彼女の前から引き下がつた。リストと侯爵夫人はそこでワイマールの社交界に對する凡ゆる關係から遠ざかつた。

この祭典は一八五七年九月三日から五日まで行はれた。多くの有名な客がこのために集まつた。リストの従弟エド

アルドも、ヘルベックもウィーンからやつて來た。九月三日はカール・アウグストの百回目の誕生日だつたが、彼の記念碑の起工式があり、夜にはゲーテのイフィゲニーが上演された。次の日にはリーチェル作のゲーテ、シラー立像とガッサー作のウィーランドの像の除幕式が舉行された。リストはこの祝典のために、大公の希望により、祝典の機會にはいつも唱はれることになつた一種のワイマール國歌とワイマール民謡（ペーター・コルネリウスの詩）を作曲した。九月四日の晩にはディンゲルシュテットの祝典の詩が發表されたが、それは收穫祭の歌と、有名な演劇力を有つたゲーテ、シラーの作品中の個々の幕を集めた味のない拔萃であつた。最後の日は全くリストの手で行はれた。著しく強められた管絃樂を以て劇場で大演奏會を催したが、それはリストの指揮の下に、リストの作品ばかりであり、その中の二つは初演であつた。シラーの「藝術家に寄す」が最初であつたが、之は餘り強い印象を残さなかつた。之に續いてこの夏中三週間で作曲した交響詩「理想」（矢張りシラーによる）が演奏された。この作品は訝しがられた。喝采を受けたが、何となく冷たい受けやうであつた。之に反して氣分に充ちた、そして内容に富んだリストの歌曲「Über allen Gipfeln ist Ruh」は嵐のやうにアンコールを要求された。プログラムの第二部はファウスト交響樂であり、こゝでその初演が行はれたのであつた。凡ゆるファウスト音樂の王冠であり、而も同時にリストの創作中の王冠であるこの曲はメフィストの樂章を除いて、全く完全な成功であり、樂章毎に熱狂的な喝采を博した。この演奏會は作曲家リストにとつて、確かに彼のワイマール活動の頂點を示したものであると同時に、彼が敵意ある陰謀によつて妨げられずに行はれた最後の偉大なる行爲であつた。

この祝典と共にフランツ・ディンゲルシュテットは宮廷劇場の監督といふ彼の官職を與へられた。彼の就職にはリストの大公への口上での代願が與つて力があつた。リストは一八五〇年に、既に彼を演劇顧問としようと思つてゐた。



その時からデインゲルシュテットは屢々ワイマールを訪れ、一八五〇年には彼の劇曲「ベルネヴェルトの家」(Das Haus des Berneveldt) がこゝで上演された。彼は頭が明晰で詩の才能もあつたが、名譽心の餘り思慮が足りなく、彼の收入次第でワイマールの演劇には疑もなく大きな貢獻をした努力家であつたが、歌劇をだしに使つてゐたところがあつた。彼の仕事はワイマールに打撃を與へた。即ち一寸の間の繁榮のために、非常な支拂をせねばならなかつたのである。といふのは、彼にそれ以上の機會が與へられた時、彼は直ちにこの勝利の場所を去つてしまつたのである。最初の間はリストのデインゲルシュテットとの關係はよかつた。そして彼が宮廷の氣分を自分のために利用し盡してゐた時には、デインゲルシュテットの側から故意に、或はリストの中に敵意ある意圖の下に取扱はれたやうなことはなかつたらしい。デインゲルシュテットは彼にとつて好都合な間、ワイマールに現れてゐた。カール・アレキサンダーはもう永い間、以前のやうに歌劇に興味を有たなくなつた。彼の名譽慾はワイマールをして文學的領域でも再び以前のやうな高さに引き上げ、前々から成果を見ないとされてゐた仕事に着手しようとするのであつた。彼の多方面な藝術に對する興味に於て、彼は自分に與へられた程度で許された手段を浪費した。リストは警戒しつゝ、彼の聲を張り上げてかういつた。『分けて治めよ』(註、マキャヴェリーの政治原理)といふ立派な命題は政治にはいつも有効な適用を見出すのであるが、美術やその保護の問題には適用されない。こゝには確固たるものがあるので、末葉に走らぬことが必要である。』ところがかう云つても何もならなかつた。大公はドイツに新しい聴衆や詩人の派を作らうとし、他のものに模して之を創立しようとした。然しそれが出來上らない前に、この新しいものを作らうとする彼の興味は既に衰へてしまつた。かうしていつも新しく金が浪費されたので、以前の保護は大抵金銭上の困難を蒙るやうになつた。そしてかうした多面的な氣持のために、その上に軋轢を行つてゐた藝術のどれもが、頂點にまで達して行く手段を與

へられなくなつてしまつた。この際カール・アレキサンダーは、ワイマールが疑ひもなくそれで以て世界に有名となり、今までの仕事が既に目的の近くにまで來かけてゐた音楽の領域から彼の手を離すことになつた。彼の世紀の最も偉大なる藝術品なるワグナーのニーベルンゲンをも彼は一寸した考へから脱してしまひ、そしてワイマールをしてバイロイトの序幕的場所としてしまはねばならなくした。そしてその代り彼の前の時代の繼承時代と既に宣せられてゐた他の領域で、何らかの補ひを見出すことも出來なかつた。

リストは一八五六年ワグナーを訪れるためにチューリヒに滞在してゐた時、こゝから大公に尙も次のやうな手紙を送つた。「ワグナーのニーベルンゲンをワイマールで初演するといふことは單に適當だと思ふばかりではなしに、必ずさうすべきだと思ひます。この上演は疑ひなく決して簡單なことではなく、又容易なことでも御座いません。それには特別な準備を必要と致します。例へば劇場の建設やワグナーの考へに正しく應ずる人物を備ひ入れる等のことが御座います。困難なことや妨害なども必ずあることで御座いませうが、陛下は唯眞面目にそれをなさらうと思召しになりさへすれば、凡ては御自分でおやりになれるでせう。物質的な結果も、道徳的な結果に關しても、陛下に凡ゆる方面から御満足をお與へするだらうといふことは、私が誓つて保證申上げて宜しいので御座います。」

古典演劇の城廓たるワイマールに於ては、特別に建てられた國民劇場に後世のバイロイトのやうな音楽劇の誕生を見る筈であつた。大公は初めの中はこの計畫を放棄しなかつたのみか、場所も既に選定してゐたのである。ところが彼は遂にこのことの成功を疑ひ、かくも大きい出費が彼の考へによれば、不確實な計畫にかけられることは彼の欲するところではなかつた。かくしてこの事件は金の問題で失敗してしまつた。決定の瞬間に丁度友人のかうした藝術上の表明を信じてくれる王侯の保護者かゝらなかつた。然し最後の決定がこの事件に齎された日と共に、リストがワグ



ナーの歌劇に捧げた活動は、見込のないものとなり、そのために彼の大膽な戦に對して凡ゆる譽れの要石が奪はれ、目的と目標が除かれてしまつた。そして問題を急速にするためには、唯外部的な機會を必要としただけである。リストは今や事態はどんな風になるだらうかといふことを豫め見てとつた。彼が大公との面白くない會談から歸つて來た時、彼はメリアン夫人に向ひ、非常に悲しい氣持で、次のやうに語つた。「今日大公は私をどうやら打ちのめしたわけであるが、大公はいつか、もつとひどくそれを後悔するやうなことになるでせう」と。そして彼の云ふことは正に本當であつたのだ。ワーグナーはワイマールが斷念したといふ報せを受けて「見込みのない」作品を更に作曲し續けることを先づ止めて、彼が間もなく上演することを約束したトリスタンの方に勢力を向けた。然しその理由は大公の消極的な態度の方にあつたので、即ち彼にその當時音樂よりもつと興味があつた他の藝術方面に金を使はうとし、而も先づ最初演劇のために金を使はうとしてゐた。この瞬間にディンゲルシュテットは彼の官職を得、そのことによつて間もなくリストよりも重要な地位を占めるやうになつた。歌劇は演劇のために益々後退し、それを上演する手立ては益々少くなり、その結果リストによつて提出された、例へば「リエッツイ」の初演なども、客演として歌手を要するものなどは、屢々取り止めとなつたのである。

十月二十一日、リストの四十六回の誕生日の前夜、市役所ではリストがワイマールの劇場に十年間働いたことを祝ふ宴會が催されたが、會する者百二十人であつた。その後即座に催された舞踏會は客を朝までひき止めてしまつた。次の日、誕生日はアルテンブルグで華々しく祝はれた。その時トロイムンド(シュタイナッケル)によつて作られた祝典劇 *Des Meisters Bannerschaft* が上演されたが、その中にはリストの指導下に成長した青年のため、リストが如何に貢獻したかがはつきりと描かれて居り、リストの作品の音樂演奏が最も愉快にその時を充した。

ドレーステンの合唱指揮者フィッシャーの招聘に應じて、リストは十一月七日に歌劇合唱のための、その宮廷劇場演奏會を指揮することを引受けた。彼はプロメトイスとダンテを演奏した。ビューローは彼の若き夫人と共にそこへ來た。そして侯爵夫人も一緒であつた。「一八五七年ドレーステンの演奏會でダンテをもつとやり易い小曲を取替へるやうに、私は先生に嘆願したけれども、どうしたつて駄目だつた。他の影響(侯爵夫人)が優勢であつた。好まれつゝゝゝプロメトイスは、ダンテの不成功な印象によつて抹殺され、ドレーステンの情勢は永い間駄目になつてしまつた。」と、ビューローは報告してゐる。當然又もやひどくやつて來た最も辛辣な新聞攻撃の若干を、ビューローは「音樂に於ける權力を持つた文士」といふ素晴しく書かれた論文を以て追ひ拂つた。ところが一八五六年ライプツヒヒに於けるマゼッパのやうに、ドレーステンの何も準備がなかつた聽衆に對して餘りにも大きな要求を促したところの、ダンテのまづい選擇によつて惹き起された失態を取り除くことは出来なかつた。

リストは歌劇の領域に於ける同時代者の作品のために成功を以て入つて行く小徑に、これ以上進むことは不可能にされたので、今でも忘れられてゐない古典の人の作品に全く向つて行くやうになつた。彼は特にグルックのやうな日常的でなくなつた課題をもこゝに選んだ。彼は既に以前、この巨匠の三つの作品をやつたことがあるが、それに續いて十二月二十六日には新しく練習されたアルチェステを而も唯、自分の力でやつてのけた。ミルデ夫妻はこの作品に於て新しい勝利を獲得した。ところがワイマール人は、このやうな美しい味はひに對して多くの理解を有してゐなかつた。ペルリオーツはかうした生ぬるい態度について非常に適切に、次のやうに侯爵夫人に宛てゝ知らせてゐる。「私が唯驚いたことは、こゝでこのやうな作品が上演されたとき、俗物達が劇場に入つてゐたことであらう。若し私が大公であつたとしたら、かうした晩には、このやうな善良な人民共に、ハムとビール二本位もやつて、家にゐて貰ふやう



にするのがね」と。

新しい年が始まると共にブリュッセルの音楽學校で一等賞を獲り、その「ルドウィヒ方伯の新婚旅行」がワイマールで好評であつたラッセンが音楽指揮者ゲツェの代りに樂長としてワイマール歌劇にやつて來た。リストはシュテールと相並んで彼の優れた力を認めたので、普通は指揮から退き、唯特別な機會にだけ出かけることにした。かくて彼は一八五八年の一月二十七日にモーツァルト祭を計畫した。反對者は勿論直ぐに「モーツァルトが、どうして未來音樂の洞穴の中に居を張ることなど出来るものか」と、わい／＼騒ぎ立てた。然し前のワイーンに於けると同様に、リストは今度もモーツァルトの音樂の最も精細なる解釋者の一人として確認された。プログラムは歴史的な順序で編まれ、モーツァルトの若い時の歌劇「Il Re Pastore」短調交響曲（之はアンコールされた）、イドメネオ第二幕の終曲及び恐りの日ディエス・イラエであつた。シュナイダーのジングシヒール「芝居監督」(Der Schauspielerdirektor)の上演を以てこの輝かしい音樂祭の終りとした。

一八五八年三月の初めに、リストは數週間ワイマールを離れてゐた。プラゲ大學の醫學部は醫學の學位を必要とする受験生のために研究室を建設することに決した。この慈善的な目的のための基金を作るのに大演奏會が催されることになつた。人々はリストがどうかと云つた。彼は人情があり、直ぐ賛成する性質があつたので、彼はそれを承諾し、三月五日にプラゲに行つた。演奏會は十一日に行はれ、「理想」、イ長調協奏曲及びダンテ交響樂が演奏された。既に「理想」がもう喜ばれたが、協奏曲が終ると眞の喝采の嵐が捲き起つた。リストは約四十人の人々から六回も舞臺に呼び出され、彼に月桂冠が手渡された。ピアノ協奏曲はリストが書いてゐるやうに、タウジヒが「素晴しく」演奏した。そしてまたハンガリア狂詩曲が非常な成功を収めたので、彼はリストのポロネーズを追加して演奏せねばならなかつた。

一三日後に催された音樂學校の演奏會では、リストのタッソーが演奏され、校長キッテルに對する好意から、巨匠自身その指揮を引き受けた。同じ演奏者で彼の他の弟子R・フルーグハウプトが變ホ長調ピアノ協奏曲を演奏した。タッソーは二度演奏されねばならなかつた。

プラゲから、リストは次いでワイーンへの招聘に應じたが、こゝでは二十二日と二十三日にグランのミサ曲を指揮した。ひどい争ひと陰謀の後、遂に演奏が實行された。然し結局は四人の獨唱者をベストから連れてくることによつてのみ、それが可能となつたのであるが、そのわけはワイーンの劇場藝術家が監督から共演を禁ぜられてゐたからである。宮廷の人々はリストのことを餘りよく云つてゐなかつた。といふのは彼は二年前に宮廷演奏會に、獨奏者として出ることを斷つたことがあつた。ミサ曲の受けはよかつた。そして新聞さへも、大概は否定的ではあつたが、それ程ひどくはなかつた。アウグスト男爵もベストからやつて來たために、彼によつて宮廷人がリストに對して面白くない氣分を起した誤解が解けるやうになつた。リストはそこで求めてゐた皇帝の拜謁をも受けることが出來、その時グランのミサ曲を國家の費用で印刷したお禮を申上げた。リストは鐵冠の位階、騎士の十字架を貰つたが、それを貰つた人は世襲の貴族にまで昇位されるのであつた。一八五八年十月三十日に彼は貴族の稱號を許された。彼の家族から失はれてしまつた貴族の稱號を求めると彼が促されたとき、彼は以前「貴族になることは、兩親から貴族であるよりはずつとましだね」と云つて、之を拒絶したことがある。然し今度も彼は貴族にならなかつた。そして御裁可を得て、これを世襲的に彼の從弟とその子供達に譲ることにした。

ワイーン滞在中、リストはハンガリアの歌劇臺本のために相談をした。モーゼンタールはハンガリアの詩人カール・ベックの本「ヤノス」からとつて「ヤンコ」といふ標題で彼に作らせることにした。彼は來るべき冬中に完成しよう



と思つてゐた「聖エリザベート」が濟んだら、直ぐこの作曲にとりかゝらうと思つた。モーゼンタールは臺本を寄越したがそれが侯爵夫人の氣に入らないことが分つたし、又彼の著書「ハンガリアに於けるデブシーとその音楽」が有名になつた後、彼の祖國から投げかけられたそれに對する多くの攻撃が、彼をしてハンガリアの國民歌劇に對する興味を失はせることになつた。ルビンシュタインは後になつて、この臺本に「異教徒の子供達」(Die Kinder der Heide)といふ標題で音楽をつけた。その他第二の歌劇の計畫が尙この年に彼の頭に浮んだのであるが、それはロケットの臺本による「カーメ」であつた。然し之も實現されなかつた。

ウィーンからリストは、彼のミサ曲の獨唱者に感謝の意を表すためにベストへ旅行した。彼は演奏會を催し度くなかつたが、一般の要望に従ひ、こゝでも彼のミサ曲を指揮する用意はあると宣言した。それは四月十日に大きな博物館の廣間で演奏された。その収益をリストは、計畫中のベストの音楽學校のために寄附することにした。ところが凡ての出費を差引くと額は餘り少いやうだつたので、彼は自分の懷中から尙千グルデンを加へた。翌日(日曜)このミサ曲はパウル教會でも禮拜と一緒にもう一度演奏された。同日リストはフランツィスカン教會の同僚として華々しい接待を受けた(この命名は一年前に既になされた)。それはもとゞこの社會の名譽團員といふ稱號以外のものではなかつた。そしてこのことはリストが非常に幼い頃からフランツィスカン教會が特に好きだつたといふことから理解せられることである。

ベストからワイマールに歸る途中、リストは尙約一週間客としてコンスタンティン・フォン・ホーエンツォレルン・ヘッヒンゲン侯爵の招きに應じて、レーウエンベルグに滞在した。侯爵は一八五〇年に彼の領土をプロシアから獨立させ、それ以後はシュレジアのレーウエンベルグに都を定め、そこで彼は熱心な音楽愛好者として優秀な宮廷樂團を持つ

てゐた。音楽を尊敬する者は誰でも毎週の宮廷演奏會に無料で入場を許されたので、新築された宮殿の大音楽堂は大抵満員の盛況であつた。樂長として彼は才能豊かな若い音楽家マックス・ザイフリッツを得たが、この人は侯爵と同様新ドイツ派の傾向に對して非常に同情を抱いてゐた。「ヘッヒンゲンの侯爵は未來音楽に感動的に歸依する人として、公然と何も遠慮することなく表明してゐる。ワグナーのファウスト序曲は、彼の理想である。交響詩に對しても彼は勿論熱狂する。」と、ビューローは報じてゐる。既に三月五日にタウジヒは侯爵の命名式のための祝典演奏會に、彼の先生リストの多くの作曲をレーウエンベルグで演奏した。四月にはもつと大きい祝典が開かれることになつてゐた。侯爵はビューローを解説者として、リストを彼の非常に反對を受けた新作の指揮者として、同時に招待した。ビューローは既に數日前出かけた。そして既に或る演奏會に共演した。四月二十五日に彼はリストの指揮で變ホ長調協奏曲とポロネーズを演奏した。メンバーを増した管絃樂は非常によい演奏で以て、祝典樂、タッソー及びブレリユードを紹介した。今やコンスタンティン侯爵は永久にリストの藝術に感動する人となり、レーウエンベルグは、その後數十年間リストの作品を常に尊敬を以て演奏した僅かな箇所の一つとなつた。リストが尙數日ビューローと一緒にベルリンに滞在した後、五月二日にワイマールに歸つて來た。彼が獨りで旅行した時はいつもさうであつたが、この名聲ある旅行中もワイマール樂團のホルン奏者グローセを従者として連れて歩いた。この人はリストの忠實な片腕として、どこにもついて行つたのである。

リストは再び彼の作曲の仕事に専念した。劇場は彼を餘り要しなかつた。といふのは、六箇月もミルデ夫人が居らなかつたために、新しい作品は上演されなかつたし、他の人では彼のものは出来なかつたからである。弟子のサークルにも再び變化が起つた。即ちタウジヒは侯爵夫人の不機嫌を惹き起したといふので、暫くの間アルテンブルグから



去つて行つた。彼は「リストに對する不誠實とハンス・フォン・ビューローに對する恩知らずの責任」を感じてゐたらしい。リストは彼をチューリヒのワグナーの許へやつたが、彼の訪問はワグナーに大きな喜びを與へた。ラツェンベルガー、バウアー、ロートフェルドもワイマールを去り、その代りに才能あるロシア人のネリソフ・ディートリヒ及び美しいインゲボルク・シュタルク（後のブロンスアルト夫人）がやつて來た。少し前まではライプツヒに定住してゐたユリウス・ロイブケは死んでしまつた。コルネリウスは彼に對して感動的な追悼文を捧げた。コルネリウスは一八五六年の秋にベルン・ハルドの小屋に歸つて來たが、それは彼自身臺本を書いた彼のバグダッドの理髮師（之はいつかリストが非常に嫌つたものだが）を作曲するためであつた。一八五八年四月に完成された總譜を持つて歸つて來て暫くワイマールに滞在したことがある。彼はこの草稿を次のやうな獻呈の辭を以てリストに手渡した。

「先生であり、友人であり、又保護者であるフランツ・リストに驚嘆と愛情と感謝のさゝやかなる標しとしてこの一節を捧ぐ。」

一八五八年四月二日

ペーター・コルネリウス

ワイマールにて

この作曲はリストの無限の賞讃を博した。

「リストはかう云つたのだよ。ベルリオヅのチェリーニ以後、私のもののやうな面白いものはないと云つたのだよ」と、コルネリウスは彼の兄弟に宛て、手紙を書いてゐる。理髮師は直ぐ次のシーズンの初めに上演されることになつた。さうしてゐる間に、コルネリウスはミュンヘンに音樂學校を開設する目的でリストから紹介状を貰ひ、ミュンヘンに赴いた。

六月の半ばフリードリヒ・ヘッベルがワイマールでの彼のゲノフェファの上演に立會つた。彼はこの機會に又よくアルテンブルグに客として滞在したものである。彼の手紙の中には次のやうな敘述がある。「侯爵夫人は舊式の婦人である。だが熱情と元氣があり、彼女の娘の『お姫さん』は實に綺麗な少女で、氣高い顔つきと眼をしてゐる。――夜になるとアルテンブルグでは大夜會があつた。そこでリストはさういふことは近頃餘りないとか云つてゐたが、ジプシーの狂詩曲を弾いた。私は全く電氣にでもかけられたやうに感激させられた。ピアノに坐ると彼は英雄である。彼の背後にはポーランドロシアの國民服を着て、半分の額飾りと金製のトロツテルを附けた若い侯爵夫人がゐて、彼に樂譜をめくつてやり、その時たまゝ演奏の最中に奔放に揺れ動く長い髪の毛が彼に垂れかゝるのであつた。夢のやうな――幻想的なものである。」（五八年六月二十一日）

八月の末リストと侯爵夫人とその娘はミュンヘンを通つて、ティロールの山に靜養旅行のためにワイマールを去つたが、そこに十月の二十日まで滞在した。彼が歸つて來てからリストは間もなく再び劇場の仕事をした。十月三十日にはソボレフスキーの面白い歌劇コマラが初演され、それに續いて一八五八年の十二月十五日にはコルネリウスのバグダッドの理髮師が上演された。既に永い間絶えず壓迫的に積み重なつてゐた緊張が、この機會に力強く爆發した。リストの圈内から出來上つたものを一般に承認させようとする最初の試みは、コルネリウスが書いてゐるやうに「用意され、しかもよく組織され、目的に應じて分擔されてゐた反對」によつて打ち碎かれてしまつた。示威はコルネリウスや彼の歌劇に對しては少しも向けられず、全體の方向に對して、特にその首領リストに向けられた。リストは間もなく、もう永久にワイマールで歌劇の指揮棒はとるまいと決斷した。彼がさうしたのは内面的な必然性から出來たのであり、一般的な不機嫌から出來たものでは決してなかつたといふことは、次の侯爵夫人の言葉が之を示してゐる



のだが、之は彼女がコルネリウスに云つた次の言葉である。「どうとも説明することが出来ないのですか、リストが指揮棒を棄てたことで彼の生涯の一時期を終へたものだと思ひます。」

コルネリウスは、この禍ひの夕べのことを次に吾々に述べてゐる。「今まで、ワイマールの年鑑になかつたやうな反對の聲が、しつこい嘲弄が、始めると間もなく喝采に對抗し續けた。終ると十分間ばかり争闘が起つた。大公は喝采し續けた。嘲弄はそれにもかまはずどうしても止めない。最後にはリストと全管絃樂團員が喝采をし、フォシ・ミルデ夫人は私を舞臺の上にひつぱつて行つた。藝術家は皆熱狂的に私の味方になつてくれた。リストはこの上もなく私に對してよい態度を示してくれた。私に對して興味を有つてくれた凡ての人は唯、新時代の旗手であるこの人のために生命がけで味方したい氣持であつたらしい。」

何處から突然かうした烈しい反對が起つたのであらうか。既に永い間そこに居り、リストに向つたこともないのに、今となつて突然かくも大膽に彼等の頭をもたげたとは何が一體彼等に、その勇氣を興へたのであらうか。彼は何か新しい支持を得て得意になつたのに違ひないのだ。そして之はディンゲルシュテットに由來してゐた。色々と取沙汰されてゐるやうに、彼が嘲弄者達を自分で用意したとか、さうでないとかはどうでもよいが、——之だけは確かである。即ちリストに對する彼の態度により、又演劇の發展を、かくて彼自身の努力を妨げるやうな歌劇の興隆を打ち壊さうといふ彼の努力により、反對黨の力を強め、かうした行動を起させるやうにしたことである。明らかに認められた彼の不備は永い間伏在してゐたリスト反對の者共に勇氣と元氣を起させ、今までは「不規則」に、而も「躊躇」してゐた氣持を強めたのであつた。リストに對する藝術上の反對、嫉妬心、惱ましい不幸、永い間抱いてゐた怨みと、ディンゲルシュテットに對する仕事の上の追従とが一緒になつて結局反對となつてしまつた。彼等は總監督と親しい

關係を結ぶことになつた食卓で協議してゐた。そしてこの事件を起して尙もディンゲルシュテットの鼻負を受けようといふ人々がこの事件を指導したものらしい。「リストは藝術のためにであるが、ディンゲルシュテットは唯自分のためだけである。」と、コルネリウスは非常に正當にかう述べてゐる。

この不幸な理髮師の上演後二日経つて、リストは劇場でもう一度ベートーヴェン祭を指揮した。このことは、あの劇場の紛争が全部如何に計畫的に仕組まれたものであり、それに參加した人は本當の聴衆の中、如何に少なかつたかを明らかに證明するものであつた。ベートーヴェンの清祓式變奏曲の最後の小節の所になると、幕が上つた。そしてミルデはコルネリウスが作つたプロローグを讀むために舞臺に現れたが、それにはベートーヴェンが純粹に音樂的な努力を創めた人であること、そして同時にリストがベートーヴェンに對する關係は如何なるものであるかが述べられた。この時歡呼の喝采が勃發した。そしてプロローグが終ると、コルネリウスは、嵐のやうな騒ぎの中に舞臺に呼び出された。當夜のことに就いて、それからのことはコルネリウスが吾々にかう報じてゐる。「演奏會は、今度は普通の感激を以て進んだ。イ長調交響曲が終ると嵐の如き喝采が起つた。——リストが騒がしい熱狂的な歡呼の聲と烈しい喝采の中に再び指揮臺に現れ（彼は今日は魔力に充ちてゐたので、私は時々彼を見ることが何となく出来ない程であつた）、聴衆に挨拶した時初めてこの嵐の波が靜まつた。」

新聞には、このことに就いて噪ましい評判や不平が載せられた。ディンゲルシュテットもひどく攻撃した。リストに對して自分を防ぐために、「二人の間の以上のやうな不和に關してリストは何かよく分つてゐるのかどうか」と、彼は全く素朴に巨匠に訊ねてゐる。リストはこの質問を完全に無視し、劇場でこれ以上一緒に働くのを斷念した。リストは何も劇場に義務のためにゐたのではないし、寧ろ藝術の進歩のため、自分の意志からせねばならぬことをしてゐ



たことがよく分る。然し彼が上演する價値があると思つた作品に對して、公がそれを斷ることを憚らなくなつた瞬間を以て、彼のこれ以上の仕事についても何も述べるべきものがなくなつてしまつた。何となれば、他の何處かで或は他の誰かによつて既に信任狀を與へられたものを指揮しようとするために、彼は彼の貴重な時間を犠牲にすることは出来なかつたからである。リストはこの事件の後宮廷から何らかの形で感謝狀を、何か公式の信任狀を貰つたならと想像するかも知れないが、かういふことはなかつた。大公に宛てた彼の詳細な手紙は全ワイマール時代に對して鋭い觀察をしたものであり、種々の事件を正しく理解するのに極めて重要なものである。

「謹啓、陛下は私がこれ以上陛下の劇場で働くにはどういふ條件が必要であるか、陛下に差出すやうにと御希望なさるばかりでなく、御命令なさいました。陛下の下僕として私は従順で御座いますが、私は私の希望に反し、又私の個人的な興味に反して事をするを申し上げることは、どうしても出来ないで御座います。私は陛下に申し上げる榮譽を御與へ下さるなら、このシーズン中ハルムの前奏曲以外のものを上演するのに、再び指揮臺に上ることは私には出来ないで御座います。それに對して私はいつか音楽を書かうと約束したことがあり、確かにワイマールのシラー祭の上演曲目の中に、それを入れると約束したからで御座います。それで約束者に烈しい憤慨とか當座の不滿を、少くとも與へないやうにして欲しいので御座いますが、最近の事件が最後の一滴としてその限界を踏み越えたとしたならば、この限界にまで今までにもう充ちてゐたのだといふことを思ひ出すと、それが實行されない方がましかも知れないと思ひます。兎も角、遅かれ速かれ、それがディングエルシュテット氏であらうと、誰か他の監督であらうと、私が自分に隠されてあつたといふことが分つた狭い限界内でさへも、私の今までの、よくも悪くもともかく出来た活動を陛下の方からも私の方からも續けて行くことが、最早許されなくなつたのだといふことを陛下

下に申し上げて、御考へを煩はさねばならなくなつたので御座います。人々は私を、演劇といふものを没落させようとする放浪者であり、空想家であるとするやうな輕々しい戯れを有つて居り、劇場を意のままに勝手にするために必要な權威を有つてゐる十年間の私のワイマール時代でも、誰一人として私から蒙つた損害を非難する權利を有つてゐる者が御座いません。他人と違つたことを始めたとしても、私は唯一人ではありません。業務上のことではさへもさうで御座います。果實に就いて人はその樹を知つてゐます。結果から人は方法を判斷するもので御座います。例へば劇場の切符のことも私は一度も缺損を生じたことが御座いませんし——それどころか、このやうな宮廷や藝術の問題に關しては、いつも第二位に考へられねばならぬといふ説を私は表明してゐたのですけれども、兎も角却つて利益が上つたでは御座いませんか。物のよく見えない人間共が或る種の利益、而も非常に大きな利益は、それに先立つて他の人々が熟考に熟考を重ねた結果なのだといふことを認めなくても、そんなことは私の責任では御座いません。

私がこんなに不機嫌になるまで擴がつてゐる偏見に、陛下が非常に影響されたため、私の仕方を面白くなく御感じになり、誰かに促されてかうしたのではないかといふ、些細な我儘を私に御認めになるやうな御不明をその中に見出されることは、あり得ることで御座います。若しも陛下が御賛同下さつて、事實、本當に私を押へて置いて下さるのなら、必要な條件としては、次のやうなことを御決定なさればよいと存じます。

一、劇場の一シーズンに十二回の歌劇上演をすること。而もその中の二つか三つは私の選擇による全部新しい作品であること。又以前上演された歌劇の再演には私が指揮に當るか、或は私が指定した指揮者によるかであ



二、萬一の場合には歌劇や管絃樂の人間を解雇することが出来ること。

三、管絃樂或は歌劇のメンバーはレペルトアールに就いて監督と相談した後、暇を貰ふことが出来ること。

四、他の藝術家を雇ふ決定をする時、一シーズンに二人か三人は私が選ぶことが出来るやうになつてゐること。

五、管絃樂や歌劇のメンバーに約束された昇給とか、報酬は之に關する告示に明示されること。

私がこゝにはつきりと希望を申し上げたやうなことは、一度も拒絶されたことは御座いませんが、時とする恩惠の一種のやうに、少く與へられたり、前に承認されたものが拒絶されたりして、内容を形式の下に隠して置いたために困つたことになることが往々あるからで御座います。あれ以來、陛下にかうしたことを御話して置かないと陛下にまでこんな事務上のつまらないことに御心配かけるのが勿體ないと思つたために、面白くないことが後で起つて来て、そのために私が大損害を受けることがあるからで御座います。

若し陛下が、私にかうした廣い権限をお與へ下さるならば、私は陛下の御希望通りに相當な考慮を致し、他の正當な要求にも應ずる、もつと理性的人間になれるのは本當に簡單で御座いませう。陛下が若し私の考へるかうした豫想を否定されるならば、陛下が私を本當に御信任下さつてゐるのだと、どうして信ずることが出来ませうか。若し私が今までいつも私と事を構へた人々と和解したとしても、私が責任を以て考へたことが承認されたからといって別人になれさうも御座いません。

それに誰か他の人の外面的な地位を妨害するやうなことは關係が御座いません。誰もそのために、自分の地位を狭められることもないし、又自分の無價値について心配するやうなこともないだらうと存じます。私が私の地位に立つことによつて、私が所有すると見えるやうな陛下の信頼に應ずるために、止むを得ずと思ふ僅かのことでもす

るやうなことは、私はどうしても出来ません。

私の外面的な地位は非常に都合が悪く、或る關係以上に非常に苦痛が多いものですから、私の將來を眞面目に考へて見ると唯改めて耐へ忍ばねばならぬ不利益が聞かれてゐるやうにしか思へません。私が以前成功したために僅かの貯金が御座いますが、それで二三年は何も妨げられず毎日の不平もなく、或は又土地の關係から、どうしても大作の完成に従事しなければならぬといふやうなこともなく、集會をしたり、精神的な静養をしたりする必要もなく、引退してゆつくりと生活するには充分で御座います。人々が私の作曲を非常に悪く噂してゐるといふことが根本的に唯私の元氣をつけてくれるものに違ひ御座いません。といふのは、それがよし黨派的なことであつたにせよ、人々は重要な作品とこんな激しく闘争する筈がないからで御座います。陛下は従つて非常に悪い方でないれば、非常によい方だといふことにならねばなりません。若しあの勇敢なる感激が、彼等の勉強に關係して起つたのであるとすれば、彼等はオロンテの詩の範圍には屬しないと、私に考へさせるに違ひないと存じます。もう少し申し述べたいことは、若し彼が私自身と一緒に劇場の演奏會で働きたいといふよりは、どこまでも反對してゐた方がよいといふことを申し上げたいので御座います。陛下よ、私の職をもう少し續けて行くことによつて、全額を償ふことが出来ない分をお果し致します。私の時間をお捧げ致します。感謝は毎日の犠牲を以て私に負はされてゐるので御座いますが、唯何もならないことでも御座いますまい。

私が若しも他のいつかのシーズンに、再び劇場に現れるやうなことがあれば——陛下が私の活動にとつて缺くべからざる控へ目な權力の擴大に御賛同下さつたとしても、——私によつて代表される傾向のものと完全に一致した作品を、そして又私がそれを聴衆の前で演奏したなら、それに對する責任を負はねばならぬほど充分新しい作品だ



けを紹介するで御座いませう。陛下よ、人々は陛下に『試み』といふものを輕蔑するやうな一種の氣持でお話申し上げてゐるので御座いますが、私から云はせると『試み』をして下さることは、幾重にも陛下の御親切と感謝申し上げる次第で御座います。人々は劇場の意義を、そのイニシアティブによつて評價し、必然的に初演といふものがその中に含まれる筈であるのに、それは『試み』として拒絶しようとするのだといふことを繰返してはつきり申し上げ、御注意を促させて戴きたいと存じます。この根本命題のために、既に曲目に載せられたワーグナーの歌劇（これは陛下の私に與へて下さつた支持のお蔭ですが）や同じやうな他の大家の作曲を指揮することが、いつも光榮であり、私のことなどはどうでもよいといふことになるので御座います。名聲への道を歩むことに努力するのなら、既に奪はれた門の前におつとして立つてゐる筈はないので御座います。

陛下がどんな御決定を適當と思召されようと、それを一番よいものだらうと思つて疑つたりは致しません。藝術家ばかりでなく藝術そのものも無用の贅澤と考へられたといふこと、私は或る意味でワイマールの人達には餘計なものと思はれたこと、私が凡ゆる方面から唯不信任を受けたといふこと、人々が私をよく日常的な俗物の仲間墮落したと見てゐたといふことは、私にはどうしても分らないことで御座います。

敵意ある色々のことは、私を無殘にも傷つけることは出来るかも知れませんが私を辱しめることは出来ません。そして彼等が私を脅かせば脅かす程、私はその責任を益々多く感ずるだけで御座います。私にとつて生命よりも、この世の凡ゆる楽しみよりも高價な他のものがあることを、私がもうこの世にゐなくなつた時に、いつか誰かが話し得たとしたら、私はもつとよい運に當つたわけで御座いませう。——私は淋しさを愛します。完全な淋しさが好きで御座います。陛下は私を解雇なさることによつて、凡ての關係を最も好都合に解決なさりたいので御座いませう。

う。願ひで御座いますが、私は感謝の意を相變らず有つて居りますから、陛下が多年なし給うた友情のために、私はいつもそれを確かに光榮と存じてゐるので御座います。

陛下の最も從順なる忠誠なる僕  
フランツ・リスト  
一八五九年二月十四日、ワイマールにて

この手紙はリストの以前の書き方と比べれば驚く程鋭くはつきりと書かれたものであり、この事件全部が如何に深く彼を肉面的に辱しめたものであるかを、明らかに汲みとることが出来るのである。ワイマールの名聲と偉大に捧げた彼の十年間の苦勞多い犠牲は、全然違つた決着を見るに至つたのである。

リストの引退の請願書を受取つて大公が「これはデインゲルシュテット氏を吾々に與へた可愛い、やり方だ。」と叫んだときに、リストは平靜に「成る程デインゲルシュテット氏は人々が望むやうな人ですね。」と答へた。

このときのことを想ひ出すと、いつもリストの心の中では刺が戻つてくるやうな思ひがした。そしてカール・アレキサンダーとは、後年又その交際が如何に繁しく行はれたにせよ、心の底からの親しみはなかく湧かなかつた。かうした傷は、その痕を残しただけになつても、それでも又時々痛み出すのであつた。リストが彼の行爲の結んだ果實を收め獲るために、苦痛多かりし闘争の時代に、ワーグナーのニーベルンゲンを行ふことによつて、榮冠を授けるために、そしてそのことによつてワイマールに永遠にその意義を獲得させるために、彼がワイマールへ行かうとしたその瞬間に、浅い考へに妨げられて躊躇してゐた時、誰かに勵まされて出發したといふことは、何といつても憫れを催させることである。



### 三、リスト、ワイマールを去る

リストは、リエンツィを久しい以前から、ワイマールで上演しようとしたが、然し彼の望みはどうしても果されなかつた。たゞ何處までも、非常に明瞭な二人の友人の性格的相違から、そして又、二人が當時抱いてゐたいらくした気分から理解せられる誤解によつて、ワーグナーとの烈しい不和が今や起つたのであるが、それは暫らくの間、彼等の友情關係を曇らしたものである。ワーグナーはこのことに就いて彼の妻ミンナにかう書いてゐる。

「リエンツィは私のものだ。どれだけ前から、そこで既にこの歌劇が上演されねばならなかつたかを、お前さんは知つてゐる筈だ。リストは宮廷で、特にディンゲルシュテットによつて、放つて置かれたらしい。それに對して、特別に承認された謝禮金を欲しいなどとは思つてゐないと、リストに云つてやつた。といふのは、彼は一般に唯この歌劇を上演することだけでも困難であるのに、私がこれを何も無理々々する筈はないと、彼は既にさう思つてゐたからである。もうそのことが私を激昂させたのだ。つひに一寸前に、ディンゲルシュテットはリエンツィに關する公式の問合せを私によこし、幾らの謝禮を私が要求するかと尋ねて來た。そこで直ぐ私は彼に、私はワイマールでは別に謝禮を請求してゐないので、適當に考へて貰ひたいと返事を書いた。その返事には、初演の後、彼は二十五リスドルを支拂ふと云つてよこした。この手紙を私はリストに送り、そのために私は幾らか愉快になれた。そしてどこの劇場でも報酬は總譜と引替へに貰ふことになつてゐることを、序でに言つてやつた。リストは暫らくしてから、ディンゲルシュテットは、大いに力癪を入れてゐるのだから、彼は直ぐ返事を書かせるやうに、私から願つたらよいだらうと云つて

くれた。とう／＼このことは、私にはたまらない程嫌になつた。私はリストにその手紙を公開してもよいと云つて、一本の手紙を書き、リエンツィをワイマールで上演することは止めて欲しいといふこと、そして若しも直ぐに、私に相當な謝禮を送るなら、兎も角もう一度考へて見てもよいといふやうなことを書いてやつた。そんなことは——正直に云ふと——私は本當は、問題にしたくなかつたのだ。」

非常に金に困窮して居り、置けるものは、何でも質に入れてゐたワーグナーは、彼の手紙の結果と、ワイマールから金を送つて來るのを待ち焦れてゐた。遂に一八五八年の大晦日の晩、家に歸つて來たとき、彼はリストの手紙を見出した。彼はそれで大喜びで、手紙を引き裂いて開けて見た。——ところが、都合の悪いワイマールの事情に關する眞面目な説明があり、彼は最後の手紙と一致して、リエンツィをワイマールでやらないことになつたといふ知らせであつた。リストの書簡の、それ以上の内容、即ちトリスタン的一幕に對する彼の歡喜、ダンテ交響樂のこと及びコーブルグの侯爵を通して、歌劇「デアナ・フォン・ゾーランゲ」を獻上したこと、——すべてこれらの事柄は、ワーグナーの落膽の打ちめされたやうな氣持の時だから、彼には嘲笑のやうに響くのであつた。辛辣な窮餘の諧謔は、彼に襲ひかゝつて來る。そしてその緊張は、友人リストに宛てた手紙の中に解かれたのであるが、その言葉は丁度、貧しい人の上に雹でも降つて來るやうなものであつた。大きな、震へてゐる書き振りは、明らかに非常な興奮と大晦日のボンス酒を飲んだ後を示してゐる。ワーグナーは次のやうなことを書いてゐる。

「親愛なるフランツよ！

貴君は、小生に餘りにも悲痛に答へて寄越した。小生のこの間の手紙は、全くユーモアたつぷりの現實的なものだと思つてもらひたかつたのです。——ディンゲルシュテットが何だ。リエンツィが何だ。——すべて馬鹿げたことで



す。——小生は金が欲しいのです。不幸な夜番人でも何でもよいから兎も角、僅か二十五ルーデンを直ぐ送つてくれたとしても、小生にとっては、何も同じことなのです。ところが『初演の後』だなんて云つてよこしたのは——（馬鹿な奴）貴君は、小生のことを皆と一緒に餘り親切に考へてくれ過ぎたのです。ワーグナーは貴君のことや、貴君達の劇場のこと、又は自分の歌劇のことさへも、どうでもよいのだと云つて下さい。そしてワーグナーは金が欲しいので、これだけなのだと云つて下さい。貴君は小生のことを理解してくれないのですか。小生は幾らでよいから、唯金を集めようとしてゐることを、一體貴君にはつきりと云はなかつたね。コーブルグや其他の處で、小生の歌劇（ローエングリンか、さまよへるオランダ人）を演る世話をしてくれと頼まなかつたね。無報酬で小生はディアナ・ドゥ・ソランジュを一體如何したらよいのですか。かうした目に見えるやうな、嘲笑を貴君から受けねばならないのですか。——何も云はないのですか。金のことは何も考へてくれないのですか。——

そんならよろしい。小生は今十グレンもないのです。部屋代も拂へない。妻が、後少ししか持たないと、十四日に云つてよこしたのに、何にも送ることが出来ないのです。——然し、みな過ぎ去つてしまつた。次の復活祭には、そしてトリスタンが完成すれば、小生は使ふ以上のものがあることになるのです。もう今は、何もかも見捨ててしまはう。何もかも、何處からも定つた収入などは、来よう筈がない。——そして今、小生はディアナ・ドゥ・ソランジュをかゝへてゐる。狂ひさうな氣持です。貴君は貧乏といふものを、全然知らないやうです。——幸ひなことに。——

或ひは、小生がひどい生活をしたくないのだといふ非難を、人々がしようとするのですか。吾がフランチッよ、若し貴君がトリスタンの第二幕を見るならば、小生が澤山の金を使ふといふことが分るでせう。小生は大の消費者で

す。ところが本當に何とかなるでせう。——御存じのやうに。然し次のことを考へて下さい。小生がディンゲルシュテットや大公や、其他の誰にも、本當になつて苦情を云つてゐるとは思つて下さるな。小生は、唯金が要るのです。その他のものは皆あるのです。——貴君が、トリスタンの第一幕を見て喜んだなら、貴君は激情の昂揚を理解する筈です。若し貴君が、第二幕を知つたら、小生が今日凡てのこと以外に何も書かないとしても、きつと小生を許して下さるでせう。どういふ風になつてもよいのです。トリスタンは、凡て酬いてくれるでせう。——どうにもならなかつた小生は、貴君に最後のナポレオン金で電報を打ちます。——さやうなら、よき新年を迎へるやうに。ダンテとミサ曲を送つて下さい。然し先づ——金を、お禮金を——確かに。ディンゲルシュテットに、お前は馬鹿者だと云つてやつて下さい。そして大公には、貴殿の金箱が寒がつてゐるのだと云つて下さい。——太當にです。大公はこれを、私のために、空けた方がよいと云つて下さい。——

然し、若しさうでなければ、小生に唯深刻なことや悲痛なことを、書き送らないで下さい。貴兄等が面白くないのだと、小生はもう最後に云つたのです。一體それが全然役に立たなかつたのですか。

新しき年に幸福あれ。お休み

リヒアルド・ワーグナー」

この手紙を出してから、二日の後にワーグナーは又もや、彼の状態を眞面目に説明した手紙を送つたが、その中には、大公がワーグナーのために支援する計畫は、かうあつて欲しいといふことまで書いてあつた。ワーグナーの突飛なやり方を知らせなかつたリストは、この大晦日の手紙を誤解し、そして唯、ワーグナーの氣持悪い、無感謝の心と利己主義とを感得した。彼は次のやうに答へた。



「悲痛な深刻な」書き方によつて、貴君を面白からぬ潮におとしれるやうな危険に、これ以上さうさせないために、トリストタンの第一幕をヘルテルに送り返します。そして他のものは、これが出版されてから見たいものと、小生に願つて来るでせう。――

ダンテ交響樂とミサ曲は、銀行の株券にならないから、これをヴェニスへ送るのは餘計なこととせう。又今後電報で困窮を訴へられたり、怒りの手紙をそこから受取つて見ても、小生には餘計なことだと思ふ外ありません。――

敬 具

一八五九年一月四日

フランツ・リスト

ワーグナーはビューローに宛てて、次のやうに報告した。「リストは、私に悲しい年の初めを與へたのです。彼の誇りが問題にならないとすれば、彼は友人に對する重大な點に於て、ひどく誤解を招くといふことを直ぐ、こゝに告白せねばならないのは残念なことです。彼がこのことをわかるだらうといふことは、少しも私は思ひません。私はさう望みたいのだが、彼と友情を持續して行けば、私共の友情が明らかに害はれつゝあるこの禍ひが、却つて個人的な親交の度の本來少なかつたことを、改善して行くものと確かに思はせたのでした。私は即ち、今でも前のやうにリストに對してどうでもよいと云つて構はないで置くわけに行かないし、私の態度に對する或る氣遣を、却つて彼に向けなければならぬことを認めるのです。私のユーモアなんか時々、全然分らないのです。」

リストに對するワーグナーの答は次の通りである。「我が友よ、今や貴君は、小生が惱み、慰めを求めてゐるやうに見えるものである。といふのは、今小生に對して貴君が出来たやうな聞き届けられない手紙の文句は、恐ろしい内

的な立腹から跳び出されなければならないからです。……。」と云つたやうな誤解は、又もや直ぐ晴れ、そしてリストに次のやうな言葉を云はせた。「貴君の挨拶は、小生に再び吾々が何時も觸れたくなかつたやうなもの全部を、不思議にも忘れさせる。これに感謝しよう。――そしてお互にもつと我慢強くならう。」

かくて、彼等の友情をおびやかしたこの危険は、確かにうまく斥けられた。然しかゝる誤解がどうやら起らねばならなかつたといふこと、そして又友情の絆が或る意味で一方的であつたといふことは、片づけてしまふことの出来ない問題である。リスト側の絶對に控へ目な氣持は、これが彼の内の生活と彼の創造に關する限り、益々強まつて行つた。何回もワーグナーは彼の信用を追ひ求めたが、どうしてもその効がなかつた。一八五九年二月二十三日には、こんな手紙を出してゐる。

「然し愛するリストよ、小生にもう一度詳しく書いてよこして下さい。貴君の御苦勞に就いては、小生は唯いつも他の人を通して、最後には全く新聞を通して知る他ありません。貴君がこれを簡單に知らせるといふのは、正しいことではありません。これは小生を餘り信用しないことなのです。貴君が非常に喜んで親しく觸れたい小生の手を、何處へ置いたらよいかを知るためには、小生はよく考へて見なければなりません。貴君が、吾が愛する田舎のドイツにとつて、餘りに偉大であり、餘りに高貴であり、餘りに美しいといふこと、貴君が人々の間にあつて、その光輝を受けることに慣れてゐない、そして受けようとしてゐない神のやうに現れてゐるといふことは、之が貴君の場合、初めて明らかになることが出来たとしても當然なことなのです。といふのは、今までにドイツでは、こんなに輝かしい、温いものは現れたことがない」と云つてよいからです。然しかうした憐むべき態度が、貴君の心に觸れ、貴君を怒らしたり、貴君に悪感情を抱かせたりする限り、同様の關係に對して非常に感じが鈍くなつた小生は、この關係が一體何



處から起つたものかといふ汚點を探るのは、小生にとつては時として、なか／＼困難であるといふことをよく知りた  
いのです。貴君のやうな幸福な人は、生活と永遠の光榮が貴君に落ちてくるやうな凡てのものを有つてゐると、小生  
は考へます。小生は、貴君の居心地のよい、何時も貴君に高貴に機嫌をとる家、そして而も眞剣に、普通の生活の心  
配がない家のことを見渡します。又如何に貴君は、貴君の個性により、永遠に貴君に捧げられた藝術により、貴君を  
めぐる凡てを幸福にし、感動させてゐるかを小生は確かめてゐます。そこで貴君が一體全體、苦勞が何處にあるのか  
小生には分り難いのです。それにも拘はらず、貴君は悩んでゐるし、深く心を痛めてゐる。小生はこれを感じます。  
——昂ぶることを止めて、小生に直ぐもう一度手紙を下さい。残念なことに、貴君を立服させてしまふ結果になるこ  
とがよくあるやうだが、兎も角、あのやうによく、何でもかんでも書いてよこして下さい。」

リストの控へ目なことの理由の一つは、常に唯與へることのみを愛した彼の性質にあつた。——即ち、自分の苦し  
みは黙つて獨りで押へ、高慢に凡ゆる助けを斥けてゐたのだが、それともう一つの理由は、第三人者のウィットゲン  
シュタイン侯爵夫人によつて、意識的にこの性質を促進せしめられてゐたことにもあつたのだ。

既に、一八五六年チューリヒ滞在に際して、侯爵夫人とワグナーとの間には、以上述べたことに對して極度の不  
一致があり、「教授制度」に關してワグナーは、尙屢々嘲弄的な見解を述べたため小さな誤解を惹起したことがあ  
つた。最も重要な問題は、侯爵夫人がワグナーに對して、どういふ關係にあつたかといふことに變りはなかつた。  
初めの中は、彼女は確かにワグナーに對する彼女の感激に於て、リストと一緒に熱烈なものであつた。ところが現  
に、ローエングリンを見てから反對のことが現れた。即ち、彼女はこの作品を「徹頭徹尾抒情的で、演劇的でなく、  
タンホイザーよりも遙かに劣るものだ」とし、オルトルードの解釋に關して書いたワグナーに宛てた彼女の手紙に

は、殆どワグナーの精神に觸れるものがなかつた。ワグナーの理論的な文筆に對しては、彼女は何等の理解をも  
有つてゐなかつたし、寧ろそれどころか、それを「大の馬鹿げたこと」と云ひ、それに關する凡ゆる論議を避けると  
いつたところまで進んでゐた。ワグナーの後の作品に對しては、後で尙よく分るやうに、彼女は一般に何らの地位  
をも、最早見出すことが出来なかつた。それと共に、彼女はリストに熱心の餘り、ワグナーの名聲が、彼女の友人  
リストの名聲を薄くしたり、害したりするのではないかといふことを恐れねばならぬと思ひ、兩巨匠が密接に近づく  
ことに、彼女が重要な關係がなければならぬことは、従つて彼女の義務であると思つた。そこで彼女は、二人の  
友人の間を段々に遠ざけた。ワグナーの結婚解消の一寸前に、彼がリストの助けを求めた場合、ミンナに宛てた手  
紙とウェーゼントンクの手紙により仲介の勞をとつて、侯爵夫人が「アジール」に干渉しようとした時、個人的な怒  
りが擡頭したために、反對は益々ひどくなつた。リストは益々控へ目になつた。そして、その理由を直ぐに探知した  
ワグナーは、ビュローに宛てた手紙の中で、それに關して明らかに述べた時に、彼と侯爵夫人との間には完全な  
龜裂が生じた。ワグナーはビュローに、次のやうな手紙を書き送つた。

「吾々が、吾々の仲間の間で好んで白状したい澤山のことがあります。例へば、小生はリストの作曲を知るやうに  
なつてから、和聲の點で今まではまるで違つた人々になつたといふこと等です。ところが、友人ポールが『トリス  
タン』の前奏曲のことを一寸話した直ぐ後で、この秘密を洩して公言したとしたら、このことは、單に少くとも輕卒  
なことです。そして小生は、それでも彼がかゝる輕卒なことをやつた人間だと云はれる資格があるといふことを考へ  
てはいけないでせうか。……従つて、吾々二人はポール氏に何かもつと秘密を洩すやうに頼みたいのです。といふの  
は、ポールは侯爵夫人の要求に應ずる筈はなくとも、彼はリストに迷惑をかけてゐると思ふからです。——だが、小



生が貴君に心から訴へねばならぬことは、小生は今リストに、どう書いたらよいか、適当な仕方を全然見出さないのです。小生は數週間以來、彼に宛てて書いた手紙を持つて苦しんでゐるのです。成程小生は、それをもつと容易にしてもよいかも知れないのです。といふのは、小生は何もかも、もと／＼リストから手紙を貰つたといふのではなく、寧ろたか／＼小生の手紙に對する返事を貰つただけで、この手紙には小生の手紙の半分しか書いてゐないので、小生は何も彼に、書いてよこせと迫つた譯でもありません。小生が彼に話しかければ、彼は吾々が考へ得る最も立派な友人なのです。ところが——彼は、小生に話しかけてはくれません。何時も彼に話しかけるやうにさせるには、一體どうしたらよいのでせうか。……小生は知つてゐるが、リストの寛大な性質は最近の衝突に際しても、何時も勝利を占め、彼のダンテ交響樂に書込まれた文句は、立派な感激と、彼の先立つて行く弱さに關する高貴な恥しさの感情を、小生は感得したのだが、その弱さに於て彼は、特に小生を待伏せするやうな態度に従ふことを和らげたので、かうしてリストは、小生にとつては何時も氣高い、深い同情を持つた、非常に驚嘆すべき、愛すべき人に變りがありません。ところが、——吾々の友情の慈しみ深い思ひやりに就いては、何もこれ以上のことが考へられないでせう。彼は小生にこの思ひやりを施さずには、はつきりと通り過ぎてゐるのです。小生は今彼について行く以外のことしかもう出来ません。小生は彼にずつと何も云はずにゐました。それで友情的な思ひやりなどはある筈がありません。小生は今彼に對して、語る言葉が何もありません。彼が喜びさうなことを、小生は書いてやりたくありません。——何が彼の不利になるか、といふことと、彼は何をその代りに必ず與へるかといふことがはつきりした時に分るかも知れません。」

ビューローはこの手紙をリストに送り届けたが、リストは當時丁度パリに滞在してゐた侯爵夫人に、それから、

次のやうなことを書き送つてゐる。

「ハンスは、私にワグナーの手紙を知らしてくれしたが、その手紙の意味は、かなり貴方の想像に合致するものです。打明けて云ふことなく、又そのみならず、彼が何時もならば、注意しない或る配慮がその中に確かに表現されてゐるのだが、この手紙からすると、彼は神が會はせ給うた二人の者、即ち貴方と私とを離さうとしてゐることがはつきりと分るのです。彼は、私の控へ目なことを嘆いてゐます。……彼は、貴方が私に對して悪い影響を及ぼし又私の眞實の性質に反するやうな感化を及ぼすことを、ハンスに説明しようとしてゐるやうに思はれます。この馬鹿々々しい考へを發見したのが、若しワグナーでないとしたら、こんな愚劣なことなどは氣にしないでせう。ともかく、若し人が私に、こんな氣合を起させようとしたら、私はかうした虚偽を三回も、私に加へた無禮千萬なことだと思つて、直ぐ結末をつけた筈です。ワグナーは今ニュートン街十六番地に住んでゐます。多分貴方は彼に會ふことせう。私は貴方にちやんと忠告して置きますが、彼を非常に柔かにとりなして下さい。といふのは、彼は病氣で到底治らないのですから。従つて私共は、彼を單に愛し、そして彼に出来るだけ爲になるやうにしなければなりません。」

だが侯爵夫人は彼を訪れなかつた。——ワグナーに對するリストの關係は、今や當然並大抵でなくむづかしいものであつた。リストは幾らか兩方に結合されてゐた。ワグナーは、この状態をマテイルデ・ウェーゼントンクに宛てた手紙の中に、非常にうまく次のやうに述べてゐる。

「私はリストのことを考へてやつたのです。ところが、彼からはどうも、なんにも別段なことが分りません。彼は私にもと／＼親しい風な態度を示したことはありません。彼の知性にあるのです。彼は、この側面からすると、人に左右され易いし、その弱さのなかに迷ふのです。永い間私はもう彼に手紙を書きません。私はこのやうな愛すべき



人間になら、唯親しい氣持でしか手紙を書けません。私は彼と商賣をしてゐるものではありません。さて、然し確かに私共の親密さが、何時も二人の人の前に公開されるやうになるのは決つてゐます。だがこれは、とても堪へられないことです。さうなれば、どうせ皆、忽ち手品や企てになつてしまふでせう。然し事實今はかうなんです。リストは全く不思議な人間になつてしまつたのです。そして彼の緊密に統一した人格ではなくて、彼の明らかに間違つて用ひられた弱點が、彼を美しくない關係にもつて來てしまつたのです。私は彼に、或は殘念なことには、寧ろ二人の人に手紙が書けません——とうとう悲しいことに。だがきつぱりと云ひますが、私は彼に(或は彼等に)、もうあと手紙が書けません。憐れな者は今となつては黙つて凡てを捧げ、凡てを堪へ忍びます。彼は別な考へを持つてゐると思ひません。彼は何處までも私を愛してゐます。彼は、私にとつて何時までも高貴な、非常に眞實な人間であることに變りがないやうに、時々如何に感動的に、私共に挨拶の柄が差し延ばされるかを想像して下さい。丁度世を隔て、離れた戀人同士のやうに、信頼してゐれば時には握手する手段が私共には見つかるでせう。」

さて、このことは實際にも、正確に觀察すべきである。以上述べたビューローに宛てたワーグナーの手紙以來、九月月の永い間、ワーグナーとリストとの手紙の往復はなく、唯簡單な誕生日を祝ふ電報だけである。それから侯爵夫人がローマへ旅立つてから、リストもローマへ移つた時頃には、永い間、全く沈黙してゐたのに、又もや通信が多くなつて來た。リストが、ローマの塵埃から足を洗ひ、暫らく獨りでドイツに住んだ時に、初めて兩友人は再會し、今度は彼等が死ぬ時まで、もはや離れることはなかつた。——

ビューローはベルリンで、未來の音楽に對する盛んな宣傳を始め、そのために大きな費用をかけて、自分の管絃樂演奏會を組織した。一八五八年既に最初の演奏會が行はれ、一八五九年一月十四日には第二回が之に續いたが、この

ときには就中、リストの「理想」が演奏された。この曲が終ると、前もつてよく準備された反對が持ち上つた。ビューローは、指揮臺に歸つて來て云つた。「私は嘲弄者に會場から立ち退いて貰ひたいと思ひます。こゝは普通嘲笑するところではありません」と。すると喧騒は止んだ。然し新聞には、この不遜な態度に對する眞剣な戦ひが燃え上つた。その結果ビューローは間もなく二月二十七日に、又もや演奏會を催すことを廣告し、それにはリストも共演することを承諾し、その缺損は、侯爵夫人が支拂はうと申し出た。リストは、二月二十四日にベルリンへ旅立ち、別れに際して愉快にかう云つた。「私は旅券を貰つた、旅行のために。嘲笑されても構はないよ」と。ところが實際はさうでなかつた。既に、彼が指揮臺の上に現れるや、嵐のやうに迎へられ、今度は「理想」を彼が指揮すると喝采が止むことを知らなかつた。そしてビューローによつて演奏されたピアノ曲も同様であつた。リストは多くの宮廷演奏會にも列席し陛下から懇勲なるもてなしを受けた。矢張りリストの作曲を演奏することを約束した(祝典樂とマゼッパ)。その年の醫師會の演奏會を、ブラーグに行つてゐたビューローと一緒に指揮するために、リストはベルリンを旅立つた。

彼が歸還して間もなく、侯爵夫人と娘はワイマールを去り、六週間の間ミュンヘンに赴いた。特にこの年の八月はさうであつたが、その前に侯爵夫人が何遍も旅行をしたのは、彼女の人間に關して、益々面白からざる風評を立てたワイマールの社交界の狀態から遠ざからうとしたためであつた。ミュンヘンでは、オーストリア皇帝の侍從武官であつたコンスタンティン・ホーエンローエ・シリング侯と親交を結んだが、この人は、その年の八月九日にマリー王女と婚約した。リストは獨りで、アルテンブルグに留つてゐたが、ここでは就中、彼は後にオラトリオ・キリストの中にとり上げた祝福の讃歌が出來上つた。この月の末、リストは十日間ホーエンツォレルン侯の客として、レーウエンベルグに



滞在し、五月九日にはプレスラウに於ける、彼の弟子のダムロッシュの演奏會に出席したが、その藝術家合唱團から非常に歡待された。五月の末、彼はライブチヒの音楽家總會の準備に出掛けたが、それには侯爵夫人と娘も出席した。

嘗てシューマンによつて創刊された、新音楽雜誌の二十五周年記念祝典の機會は、この雜誌の現在の主幹ブレンデルに記念大祭を催し、それに音楽の演奏會を加へる他、講演や協議をも入れた音楽家總會を開催して、ライブチヒに招待しようといふ考へを抱かせた。この總會は一八五九年六月の一日より四日まで行はれた。提議は一定方向から起つたのではあるが、それにも拘はらず、黨派的な、特別な興味は全然促進されるやうなことはなかつた。それどころか、この總會は露骨に現れてゐた反對を緩和するのに役立つところまで行かうとした。コンスタンティン・フォン・ホーエンツォーレルン・ヘッヒンゲン侯は、音楽祭のかなり著しい入費を償ふことが出来るやうにと、リストを通じてブレンデルに多額の金を寄附したので、凡ての祝典は、客には入場無料で催されることが出来た。

市立劇場に於ける六月一日の、晩の祝典演奏會で音楽祭の幕を開いた。プログラムの指導的な考へは、アドルフ・シュテルンによつて詩作された開會の辭にあつたやうに、簡單ではあるが特色のあるもので、ベートーヴェン以後の時代の優秀な努力を示さうとするのであつた。プログラムの前半は、メンデルスゾーンの序曲、静海と幸ある航海、ベルリオツのチェルリーニよりのアリア、シューベルトの二重奏曲（ビュローとダヴィッド）及びシューマンのマンフレッド序曲であつて、これらをライブチヒの樂長リキウスが指揮し、後半はワーグナーのトリスタンの前奏曲、シューマンのメロドラマ、異教徒の子、オランダ人よりの二重唱、シヨパンとリストのピアノ曲（ビュロー）、ローベルト・フランツの歌曲（フォン・ミルデ氏）及びリストのタツソーで、リストがその指揮に當つた。彼は終つた時、四回ア

ンコールされ、タツソーはもう一度演奏してくれと頼まれたが、時間がなくなるので、その要求に應ずることは出来なかつた。それから射的場に於ける社交的な集會は、一人々々の客を、お互に近づきにさせた。翌日は午後、リストのグランのミサ曲が約三千人の聴衆の前で、作曲家の指揮の下に、トーマス教會で演奏されたが、その後で、射的場では公開の祝宴が張られた。多くの他の人々の演説の中にあつて、アムプロス博士（ブラーグ）は「藝術の保護者であり、支持者である」リストに乾盃の辭を捧げた。第三日は學問的な講演會と協議會に當てられた。

議事の最も中心をなしたものは、ルイス・ケーラーによつて公式に提出されたが、然しリストによつて刺戟され、長い立派な演説で提議されたもので、「音楽關係と音楽家の繁榮を力強く促進するために、凡ゆる派の一致協力による、全ドイツ音楽協會の創立」といふ議題であつた。この提議は、長い討議の末、翌日になつて決議された。そして七人の信用し得る人々が委員に選ばれたが、その中にはリスト、ブレンデル、ケーラー、アムプロス等がゐた。この委員は、準備的な仕事をし、會則を定めることになつた。そして凡ては、次の總會まで保留し、その會期は新音楽雜誌に告知され、ライブチヒで又開かれることになつた。第三日の終りを飾つたのは、バハの短調ミサ曲で、これはトーマス教會で、ライブチヒの音楽指揮者カール・リーデル指揮の下に演奏されたが、第四日には市の劇場で、シューマンのゲノフェファが上演された。かくて凡ゆる觀點で、意義深い祝典は終りを告げた。他の日には餘り遠くない處からやつて來た音楽家のために、メルセブルグへの散策が行はれたが、ここではオルガンの演奏會が催され、その時リストとフェルディナンド・ダヴィッドがブロンスアルトのオルガンとヴァイオリンのためのアダチオを演奏した。それからこの祝典に参加した中で、最後まで残つた人々のために別離の祝宴が催された。

リストがワイマールに歸るや否や、宮廷では大公の母君が逝去された（一八五九年六月二十三日）ので深い悲しみに



覆はれた。マリア・パウロフナを失つたことは、リストにとつては眞の友人であり、彼の計畫の促進者を失つたことであつた。彼女は、彼を會てワイマールに呼び寄せた人であり、そして彼の最初の成功は、彼女の圓熟せる藝術の理解に負ふ所が多かつたのである。侯爵夫人の離婚事件の時にも、彼女は眞の友人として證人となつてゐた。新ワイマール協會は、彼女のために追憶の會合を行つたが、その時リストは、彼の演説を次のやうな眞實の言葉で結んだ。「今日の葬式と共に、古ワイマールは葬られる」と。——その他、この協會に關しては、彼は永い間何も別に希望するものを残してゐなかつた。ディンゲルシュテットが入つて、リストと間もなく始められた緊張があつて以來、この協會の生活は、非常な不滿なものとなつてゐた。リストは、唯時々しか、唯特別の機會にしか現れたに過ぎなかつた。

既に十月十五日に、マリー姫とホーエンローエ侯との結婚式が行はれた。そして人々が彼女をさう呼んだのであるが、「アルテンブルグのよき天使」はウィーンに移住するために、ワイマールを去つた。かうして、リストにとつても侯爵夫人にとつても、ワイマールに於ける彼等の不愉快な状態を、それ以上耐へ忍ばねばならないやうな理由はなくなつてしまつた。そして彼は、既に當時ワイマールを去らうといふ考へをはつきりと抱いてゐた。そのことは大公に宛てた次の手紙によく示されてゐる。

「私が離婚事件に際して受取つた通知は、祕かに面白くない考へが支配するやうに段々なつて行くことを、明らかに證明してゐます。この状態の下にあつては、私のワイマールでの地位は支へられないものと思ひます。年少の娘を一層強い暴力に對して保護することに関する限り、私共は堪へ忍ばれないやうなことで忍んで來ました。然し今となつては、貴殿とお別れするのは、私にとつてつらいことですけれども、先づワイマールを速く離れて、或る生活様式を求めねばならないといふことを豫感するのです。他の處では、此處よりも私にとつて苦しいことはないでせう。」

——外部から何もかも妨げられたり、内部に壓迫されるやうなことは少いでせう。」

十一月十日のシラー百年祭が、遂にゲーテ財團にまで進行することに關する、繰返して述べられた大公の意志に對して、リストが非常に消極的な態度をとつたといふ理由も、確かにこゝにあつたのであらう。彼は十年も、このことを迫つたのだが、どうにもならなかつた。そして今までの經驗から、彼はもはやこの計畫を眞面目に實行しまいと思つた。以前から詩人シラーを非常に尊敬してゐたリストは、シラーの生誕百年祭には、既にハルムの「百年前」といふ祝典戯曲に音楽をつけ、自分で之を指揮し、同様にディンゲルシュテットのテキストによる民謡調の祝典歌を指揮したことがあつた。ワイマールのオルガン奏者テッペル教授のオルガン演奏會では、リストの二つの新作が演奏された。即ち、それは二十三番と百三十七番のプサルムであつたが、人々に深い感動を與へた。この夏には、又一つの文筆的な創作も印刷されたが、それは既に、屢々引用された本で、「ハンガリアに於けるジプシーとその音楽」といふ著書である。それはハンガリアでは面白くない氣分を惹き起した。といふのは、リストがハンガリア音楽を、外國のものとしたことに對して、それは間違つた愛國主義者だと、感情を害したからである。

この年の終りに、リストは又もやひどい目に遭つた。彼の息子ダニエル、その人はベルリンの彼の姉コジマ・フォン・ビューローの許で、彼の大學祭に参加してゐたのであるが、胸の痛みにひどく悩まされ、十二月十五日に二十歳で死んでしまつた。リストは、その二日前、ベルリンから心配な通知を受け取つた。無残にもこの息子は死んでしまつた。彼の最後の言葉は、かうであつた。「みんなの席を用意して置きませう。」リーゼン街にあるカトリックの墓地に彼は葬られた。リストは、かくも早く世を去つた才能豊かな、みんなから好かれた子供を記念するために、「死者」といふ彼の感動的な樂曲を捧げた。



侯爵夫人の離婚事件が教會の法廷で、益々反對に遭つたので、思つた目的に近づかうとして、現場で彼女がリストと結婚することに就いて教會の同志を得ようとローマに赴くことに決心した。一八六〇年五月十七日、彼女はワイマールを立ち去つた。リストは、少くとも秋には來ることになつてゐた彼女の歸還を待つてゐるために、アルテンブルグに歸つてゐた。彼は熱心に、以前の作品の修正と新しい作品の完成に従事してゐた。先づ第一に、十三番のプサルムと聖エリザベートに従事した。その傍ら、なほ若干の歌曲（就中「三人のジプシー」が出来上つた。リストは、最初はカロリーネと別れることのために、ひどく惱まされたが、彼女の幸福を求めるとの勇敢な争ひは、彼を非常に不安にしたものである。ローマに於ける彼等の事件が、動搖しながらも進行して行つたことに關する通知が惹き起した絶え間ない興奮と、神経の緊張のために、リストは大分、神経質な或ひは憂鬱な氣分になつた。當時彼は、よく危険な鎮靜劑たるコニャックによつて避難したのであるが、之は彼が緊張せる名手旅行の際、過度の疲勞を克服するために、よく用ひたものであつた。アルテンブルグに於ける規則的な生活法に就いては、彼はこの惡習に餘り誘はれることはなかつた。侯爵夫人は非常に用心深い人であつた。そして彼女が旅行に出た時には、彼がこの點でも家の規則に、常に注意してゐるかどうかと、彼女の手紙のなかによく心配した間を書いてよこしたものである。リストの體質は、習慣のために幾らかの葡萄酒やコニャックを必要とした。そして彼は、本來は非常に適度しか飲めなかつた。唯彼が怒つてゐたり、興奮してゐたりすれば、大きなコップで一口に飲み乾したのであつた。いま、彼が獨りで家にゐたから、彼は毎晩よく新ワイマール協會で過した。彼は普通優秀なコニャックを持參し、それをボンス酒とし、またそのまゝでも飲んだ。彼の當時の氣分に於て、特に何か興奮した論争が持ち上つたとき、そしてこんなことはディンゲルシュテットとの益々緊張した關係では、よくあつたことであるが、その時には、彼の好きな飲み物は、彼にとつ

て時々危険なものとなることもあつた。

一八六〇年四月二十五日、既に永い間彼の極めて外交的でない誠實な性質のために、宮廷から冷たい待遇を受けてゐたホフマン・フォン・ファレルスレーベンは、ラティボル侯の許で、リストによつて與へられた圖書館の仕事をするためにワイマールを去つた。新ワイマール協會は、創立に參加したこの人のために、別離の宴を張つたが、そのときリストは、長い演奏をして協會のためにホフマンが貢獻したことを祝ひ、そして次の言葉を結んだ。「私がこゝで過した最もよい時は、貴方に負ふところが大である」と。こゝを去るに及んで、リストは一人の忠實なる友を失つたのであるが、彼が去つたことは、リストの悲しみを倍加したものであつた。愛する友人や藝術家を訪問することは、彼にとつて唯一の慰めであつた。六月の初め、彼はツウイッカウのシューマン祭に出席し、ビューローが書いてゐるやうに、彼は「幾分ぐづぐづして神経が興奮し」、ハンスが指揮したマグデブルグの演奏會に出席したが、そこでは、彼のプレリユードとゲーテ行進曲が大成功を収めた。

リストは、ひどい憂鬱性に罹つた。「私は、何も云ふことも出來ないし、又聞くことも出來ません。祈りだけが、或る瞬間私を軽くしてくれます。然し、嗚呼、何といふことでせう。私はもう續けて祈りをすることも出來ません。私は何と強く、その要求を感じることとせう。神は、私に、この道德的な危機を脱すべく、慈愛を與へてくれます。そして神の慈愛の光が、私の暗闇を照らして下さるやうに。」當時彼は遺言狀を書いた。その中には特にこんなことが書いてある。

「私が二年以來、善いことをしたり考へたりしたのは、私が非常に立派な、理想的な妻と呼びたい人々のお蔭です。——どんな人間的に賤しむべきことや、嘆はしい酷評が、今までしつこく妨害をしたとしても、即ち、それはジャン



ヌー——エリザベート——カロリーネです。私の喜びの凡ては、彼等が基なのです。そして私の苦惱は、何時も彼等の中に慰安を求めるのです。彼等は唯安全にして遠慮なく、私の存在、私の仕事、私の配慮、私の経歴と結合し、一致してゐます。そして彼等は、忠告によつて私を助け、激勵によつて私を支持し、熱狂によつて私に新しい生命を興へてくれました。……これ以上のことは、彼等は屢々自分達を放棄し、彼等の富と無比の奢侈に適ふ私の重荷を、もつとよく背負ふことが出来るやうに、私等の性質が無條件的に要求するやうなものまでも、諦めてしまひました。——私は彼等のことを考へると、彼等を祝福するために、跪いて私の守護の天使、私の神への仲介者として、彼等に感謝するので。彼等は、私の名聲、私の榮譽、私の寛恕と更生です。そして私の心の姉妹であり、花嫁です。——彼等の忠誠の驚嘆、彼等の犠牲の心、偉大さ、英雄的な心、そして彼等の愛の無限の優しさはどう名狀してよいでせうか。この氣高い心を莊嚴な調子で歌ふのには、非常な天才を必要とするでせう。……私の中にあるものが、何もカロリーネから借りてゐるやうには思はないし、又私が持つてゐる外部的なもの、ほんの少しでも私は彼女から借りてゐるやうに思つてゐません。簡単に云ふと、私が、現在あるものの少しでも、私が所有してゐるものなどは少しも、彼女から借りてゐるやうに思つてゐません。

私は、母のやうな尊敬と優しい愛を以て、彼等の變らざる親切と愛情を示してくれたことに對して感謝します。私の幼少の時、人々は私を善良な息子と呼んでくれました。その時、私は何も私の方から、特別な奉仕をした覚えはありません。といふのは、それはその筈、こんなに忠實に犠牲的な母と一緒にゐた息子はありませんから。——若し私が彼等より先に死ぬやうなことがあつたら、彼等は墓場の中まで私を祝福してくれるでせう。……

私共と同時代の藝術界にあつて、今既に有名になつて居り、これから益々名聲を擧げるだらう一人の人が居ります。

——それはリヒアルド・ワーグナーです。彼の天才は、私にとつて一つの光明でした。私はそれについて行つたのです。——そしてワーグナーに對する私の友情は、いつも高貴な熱情の性質を持つてゐました。或る時代まで（約十年前）、私はワイマールのために、丁度カール・アウグストの時代のやうな藝術の時代を夢見たものです。そしてワーグナーと私が、丁度以前ゲーテとシラーのやうな泰斗にならうと夢見たことがあります。——ところが事情がうまく行かず、この夢は實現されずにしまひました。」

侯爵夫人のローマからの便りが、今や見込みあるやうに書いてあつたので、リストは十月の半ば若干の事柄を尙口上で解決し、侯爵夫人の秘書と相談するために、ウィーンに急行した。こゝで彼は又、十月十八日の社交界で、彼のニーベルンゲンを朗讀したところのヘッベルを訪れた。人々が今度は特別の榮譽を興へようと準備してゐたリストの誕生日の祭に、彼は、再びワイマールにやつて來た。町の人々は、彼のために炬火の行列をし、彼を名譽市民にした敬意を表示したこの祭典には、近邊の多くの協會までも參加した。アルテンブルグは、イルミネーションで飾られ、「娛樂場」での大宴會でこの晩を閉ぢた。十一月二十四日に、リストはベルリンに於ける彼の孫の洗禮式に列席したが、その子供はダニエラ・センタと命名された。その後間もなく、コジマは重い病氣に罹り、みんなはダニエルのやうな運命になるのではないかと恐れたが、段々に病狀は良い方向つた。クリスマスには遂にワイマールでリエントイが上演された。リストはワーグナーのために、多くの試演を行つたのであるが、上演の時の指揮は初めから酷評を受けた。

ワイマールの音樂の狀態が、どういふものであつたかといふことは、一八五九年十二月の次のやうなコルネリウスの手紙が之をよく示してゐる。「リストは次の年早々ワイマールを去る。こゝの狀態は、かの不和の當然の結果に陥



つてしまった。ディンゲルシュテットは、ワイマールの藝術的な地位を、彼の立場で非常な結果にしてしまった。彼はもう今年缺損をし、次には半年も休暇をとることを願ふだらう。シュテールによつて指揮されてゐる豫約演奏會は反動的であり、そして吾々が丁度イツェンホーカブクステフリーデのことも聞くやうなものである。若しリストがワイマールを去るなら、この町では『もとはあの人居つたんだがなあ』と云ふだらう。そして若し彼が、もうこの世から居なくなれば、全世界の人はさう云ふだらう。その限り、だがリストの『世人は無用の者を欲する』と云ふ言葉は當てはまる。」

リスト自身は、彼の次の計畫に就いてこのやうに云つてゐる。「私は春を待つてゐます。それから多分どん／＼やります。——勿論ミュンヘンやベルリンで、或は外國なんかで、自分から辭めてしまつた樂長としての活動を繰返すやうなことはしません。——私がワイマールで出来たよりも、もつと重要な目的で、私の仕事を妨げられずに續けて行くことをするので、多くのものが、私の中で精練され、その他のものでも益々集中して來たのだから、若し私が迷はなければ、私の創作力は本質的に高まつて行きます。」

さうしてゐる間に、ワイマールの宮廷の氣分は再びリストに對して好意を寄せるやうに變つて行つた。大公はリストをワイマールに留めて置かうとして、凡ての點からリストに對立するやうなことはなくなつたやうに見えた。人々はそれのみならず、彼に願つて管理をディンゲルシュテットと分けるやうにしようとしたが、リストには今や、もう戦ひを又も繰返すといふ氣持はなかつた。といふのは、どれほど長くこの状態が續くかといふことを、誰も分らなかつたからである。「こゝ（ワイマールの藝術界）で誰でもさう思つたことであるが、以上述べた方面からは別に力強いことが起る筈はなし、又殆ど凡てのことが全くおとなしい感情で、而も意表の稲光の中にあり、援助するといふこと

までには、停滞して行かないだらう。」

リストは大公に長い手紙を書いて、凡ゆる懇望をかなり勢のある調子で拒絶した。彼は特に次のやうなことを云つてやつた。「私が貴殿に、私が本意ならずも貴殿の明確な御命令に對して、書く榮譽を持つてゐたところの手紙を、貴殿は私に對してよく引合ひに出されました（註、本書一九四頁以下に再録された一八五九年二月十日の手紙と考へられる）。それがどうにもならないことを、よく知つてゐましたので、私はその中で唯當時、以前にはどんなことが起らねばならなかつたか、どんなことが起り得たかを總括して述べたに過ぎませんでした。……何故私が劇場で、公の活動を、もうすることが出来ないかといふことを、貴殿に御説明申し上げる目的を有つてゐるところの、私の今日の手紙は、貴殿がお引合ひに出されるものと全然矛盾するものでは御座いません。といふのは、時が経てば感情も事情も變つてしまふものですから、一度とり上げられなかつた戀の告白も、外交的な提議も、一年も経てばもう問題にならないといふことを殿下はよく御存知の筈です。貴殿が一年前に、私が少くとも期待しなかつたことに就いて言質をお取りなされたとしたら、私は何としても酸っぱい林檎を食べて、私が劇場にもう一回か二回のシーズンは、續いてお仕へしたことでせう。私が指揮臺から去るといふことは、もう間もないことでせう。そして私が若し、又も現れるとしたら、それは私がそれに關して作つたものを用ひる場合にだけ、さういふ氣持になるだらうと思ひます。といふわけは、私は嫌な氣持で物事をする方ではありませんから。私が聴衆からお別れしようといふ私の決心は、昨日から始まつたことではありません。私がそれを成功した機會に止めるか、失敗の時に止めるかは、偶然が決定するだけでせう。偶然はもう宣言しました。私のお別れは始まりました。完全に始まりました。時が過ぎたら、私が留つてゐたくない所に歸つて行くことは私には馬鹿々々しいことです。私は殆ど四十年間も難局に當つてゐました。そしてこの



點に關する私の課題は、完全に出來上つたものと思つてゐます。そして私は老年になつて疲勞してまでも、例へばシュー  
ポアのやうに、管絃樂をやらうなどは全然思つて居りません。或はモシエレスのやうに、自然の氣質が消え失せ  
てまでも、ピアノ曲を編曲しようなども考へたことはありません。……精神的な意味を有つた凡ゆる人間には、  
彼の理念があります。人が若しその特色を利用しようとすれば、それを彼の理念に従つて處理する場合にだけ、之を  
達成することが出来るのです。このことは一般の根本原則なのです。私が常に殿下に感謝の意を表する義務があり、  
貴殿の指令に従ふことが出来るといふ條件で、又さうした意味でだけ私には特別な場合があるのです。然し私自身を  
否定し、そのことによつて宜しくない御奉公をするやうな義務を、それらが私に課することは出来ません。ワイマー  
ルの劇場は、唯ゲーテの下にのみ意味を有つてゐたのです。そしてゲーテは公けの場所に出る必要がありません。ワイマー  
ル。若しも貴殿が、私の音樂的な見地で奉仕することをお望みなら、私を殺すやうな文句をお書きにならないで下さ  
い。そして唯、私が主張する精神を、藝術の世界に於ける動機や進歩の精神を、自由に遊ばせて下さい。十年間に私  
は誰の援助もなく『ワイマール派』を創立しました。或る作品を演奏することが、私に唯一の可能なことでした。そ  
れは成程幾らかのことかも知れませんが、それで全部でした。私がこんなにも僅かな報酬で遂行したものを、誰にも  
出來まいと私は信じてゐます。若しも貴殿が、私を正直にお助け下さり、そして私が貴殿にお願ひすることを支持し  
て下さつても、あるひは、若しも私に御好意を有つて下さり、私が貴殿に御留意を願ひたい作品に對して、興味をお  
持ち下さるとしても、ワイマールは、今たゞ名ばかりで、暫定的なものでありますが、實際上も『新ドイツ派』の居  
城となつてしまふだらうといふことを貴殿にお約束します。私のワイマール滞在は、唯偏へに、既にこの町の名と  
この派とを一緒にしたただけでした。若しも私が、十年間リューベックに暮したとしたら、『リューベック派』といふもの

になつたでせう。そして本當は十年以上かゝるのだといふことを、私は貴殿に確言致します。といふのは、勝利と將  
來が私共のものになるのだから。……」

シューベルトの誕生日（一月三十一日）に、新ワイマール協會はシューベルト祭を催したが、それをリストは、ワイ  
ムの夜會といふ講演によつて讚へた。宮廷の人々も、澤山の人々が訪れ、この祝典に列席した。これはリストが、  
ワイマールで演奏して人々に聴かせた最後であつた。二月の半ばに、彼は彼の保護者であるホーエンツォレルン侯の  
誕生日のためにレーウエンベルグに赴いたが、そこでは彼が來たことを祝ふために宮廷の演奏會を開き、理想とマゼッ  
パを演奏した。それから彼はライプツヒでプロメトイスの試演に立ち會つたが、九日のオイテルへの演奏會にはそ  
こにゐなかつた。といふのは、彼は唯再び不成功に終ることを豫想したからである。今度は然し彼は誤つたのであつ  
た。この作は非常な喝采を博した。進歩しなかつたゲワントハウスに對して、競争をしようとしたオイテルへ演奏會  
は、特にこのシーズンにはリストの弟子ブロンズアルトとワイズハイマーが指揮してゐた。ブレンデル、カーント及  
びユリウス・シューベルトが、この音樂協會の幹事をしてゐた。そこでライプツヒには新しい方向も、居所を占める  
やうになつた。用心のために先づ最初は唯古典音樂だけだつたが、間もなく近代ものを演奏するやうになつた。新聞  
は勿論全部ひどくやつつけた。例へば一八六一年二月六日の「ドイツ一般新聞」は、第八回オイテルへ演奏會に就い  
て、ブロンズアルトとワイズハイマーの作品に次のやうな批評を下した。「これらの作品に批評を下すことは、餘計  
なことだと思ふ。その理由は、第一に吾々が既に永い間リストの作品（以上の人々はリストの單なる筆耕に過ぎず、  
それのみならず、彼等はリストと同様に、彼等の筆をワーグナーやベルリオーツの色壺の中に浸したものだ）に關し  
て述べたこと全部が彼等にも當てはまるのだ。そして第二には、彼等は全然本來的に音樂的な意向に耐へるものでは



ない。といふのは音楽的な藝術品といふ見地からすれば、彼等は材料や音響以外の何物をも有つてゐないらしく、それを以て彼等は音楽を唯快適な雑音として説明した所の、かの哲學者の定義にまで齎したことも一度だつてない。」  
このオイテルベ演奏會には、リストは既に屢々ワイマールからやつて来て、多くは數日そこに滞在したが、その間ブレンデルの所で熱心に音楽をしたり、雑誌や音楽協會との協調に當つたりした。

ライプツヒから、リストはパリに向つた。先年の十一月に、彼はナポレオンから名譽軍團の士官に任命されたが、之に對して永い間個人的に、彼の感謝の意を表はさうと思つてゐた。ところがローマからの侯爵夫人の便りは、彼にワイマールから離れることが、當分は望ましいことでないと思つて寄越した。そこで彼は、ワーグナーのタンホイザーのパリに於けるうまく行かない上演（一八六一年三月末）に際しても立ち會つてゐなかつた。「リストはローマとの電報の往復によつてワイマールを離れまいと思ふ。お願ひだから何とかして彼のワーグナーに對する人間的な愛を正當に、實行させるやうにしたものだ。」とビュローは、一八六一年三月九日にアレキサンダー・リッターに宛てて書いてゐる。そして數週間後には、ワーグナー自身に宛てて次のやうな手紙を送つてゐる。「貴君に對して非常なものであり得た筈の人、そして貴君も彼に對して、非常なものであり得た一人の人が居ります。そしてそれはワイマールの切賣りの結合とは違つた結合となつてしまひました。——それは貴君達二人にとつて、困つたことではありません。御承知の通り、自分達によつて、仲介の役をしたり或ひは寧ろ、一致させようとするのを餘り喜ばない仲間の人々が、これを妨げてゐます。それから多くの死せる畫の幽霊達が、残念なことだが、私の尊敬する舅の非常な厄介の種となつてゐます。これは私の最も深い悲しみです。昨日リストは、パリに向けて旅立ちました。願はくば両方から貴君達が一緒になつて、私が私の最も神聖なる精神的事件の興味から永い間——今までは効果がなかつた

が——憧れてゐたことが起つてくれ、ばよいと思つてゐます。貴君達が再會する時間は、私にとつて素晴らしい聖靈降臨のやうなものです。」ところが今度も兩人は會はなかつた。ビュローの手紙は遅れたのであつた。毎日々々パリで、空しくリストの訪問を待つてゐたワーグナーは、知らせが何もなかつたので、遂にリストがパリに到着したと同じ日に、ウィーンに向つて旅立つてしまつた。ワーグナーが約三週後パリに歸つて来た時、リストは未だそこに居つた。ところがリストは、彼の社交的な義務によつてどうしても行かねばならなかつたために、彼等は會へなくなつてしまつた。然し今度はドイツに再び滞在することになつたワーグナーは、八月にリスト指揮の下に行はれるワイマールの音楽家總會には出掛けるとリストに約束した。四月三十日にパリに来て、彼の義理の息子であるオリヴィールの所に宿をとつたりリストは、社交界の凡ゆるサロンで、又は宮廷でも非常に懇懃な待遇を受けた。ナポレオンは、彼を又もや今度は名譽軍團の隊長に推し、懇懃鄭重を盡した。多くの他の友人達の中では、リストはパリでベルリオーツをも訪ねたが、リストはベルリオーツを非常に「打ちのめされて憤慨してゐる」と思つた。然し彼の晩年は、漸く蹶起するやうに思はれた。

ダグー伯爵夫人とも、彼等が別れてから初めてこゝに再會した。リストはこの會見を、次のやうに敘述してゐる。「ネリダは、吾々が面白いことを何かをするからと云つても、どうしても會はうとしなかつた。寧ろ澤山の人々が私のことを、私の僅かな出來事を、そして私の『うまいこと』を話した時にだけ私に會はうとした。私の娘達の名前には、唯全く一寸私が最後に訪問した時、私がパリを旅立つ日に觸れただけである。そしてその時、彼等は唯何故私に、コジマが藝術家になりたいといふ彼女の職業に就くことを妨げたのかと私に尋ねた。彼等の考へによると、このことが最も聞きたいことだつた。この點に就ては、色々の他のことに就いてと同様に、私は今となつて彼等の意見に



同意することは出来なかつた。吾々の性格上のこの甚だしい相違は、吾々が最初會つた時直ぐに、吾々が無關係な事柄に就いて話をした時に分つたのである。」

リストは彼女の許でも食事をした。彼女との會談に際して、彼は「彼女の咲き誇つた修辭の美はしい花壇の中に、澤山の石塊を投じた」のであつたが、彼は續いてこのやうに書いてゐる。「凡てこのやうな馬鹿げたことは、どれ程私の趣味に合つたことだか、あなたはお分りでせう」と、リストは彼が旅立つ日にもう一度、伯爵夫人を訪れた。こゝで話はジョルジュ・サンドのことに及んだ。「ネリダはかう云ひました。ドゥ・ギラルダン様は、彼等にサンド夫人と再び和解させようとしたが、この再會は未だ一度だつて、喧嘩別れの橋渡しをしさうになつて終つたことはありませんでしたと。彼等は彼女を、又もや餘りひどく振り棄てたのだといふことが分りました。——彼女に又も心安い氣持で會ひたいものですね。」——「ダグー夫人は答へた。然し貴方はそれでも彼女の友人であることには、今でも變りがないでせう。」——「貴方との悶着は、だが彼女に對する私の關係を幾らか冷たくしました。といふのは、私は貴方に心の中では正しくないことをしたかも知れませんが、それでも私はすっかり貴方の黨派に擱まつてゐたからです。」——「そんなことはないと思ひます。」——「そんなことはよくあることだが、何も理由がなくても。」——リストはそれから彼の藝術的な努力に就いて次のやうに話した。「私の利己主義と名譽心に就て、私の今日の考へと以前の努力してゐたこととの完全な一致に就て、彼女がかくも『憎むべく』思つたこの自我の繼續に就いて私が話すのを彼女が聞いた時、彼女は何かしら興奮を感じました。そして彼女の顔全體が涙で覆はれました。私は彼女の額に接吻したが、それは永い間初めてのことでした。そして私は彼女にかう云ひました。『靜かになさい、マリーよ。私に簡単な男の言葉を語らせて下さい。神よ貴女を祝福して下さい。私は貴女に何も悪いことを責めません』と。——彼女は暫らく何も答へる

事は出来ませんでした。そして涙は益々流れました。オリヴィールはかう私に話しました。彼は彼女と一緒にイタリヤに旅行をし、色々な處でよく彼女が泣くのを見た。そして彼女は特に私共の若い頃を想ひ出させる處に來るとよく泣いたものです。ですからこのやうな考へは、私を感動させたと私は彼女に話しました。貴女はそれに對し、殆ど吃るやうにして『私は何時もイタリヤに——そしてハンガリアに、變りなく忠誠を誓ふでせう』と答へました。それから私は、彼女の所を靜かに去りました。私が階段を降りた時、私の前には幽靈となつて私の可哀相なダニエルの姿が現れました。私が彼の母と話をしてゐた三、四時間の間、彼のことに就いては何も話が出ませんでした。」

六月の初めにリストは、パリーに來てゐたタウジヒと共にワイマールに歸つた。こゝでは八月の初めに開催される音楽家總會の準備が始まつてゐた。ワグナーは彼が前に約束した通り正確にやつて來た。そしてリストの客として、十日間アルテンブルグに滞在した(侯爵夫人は勿論ローマにゐた)。この祝典の外面的な出來事を敘述するために、之に参加した一人であるウエンデリン・ワイスハイマーの言葉を引用するのが一番よいと思ふ。それは吾々に次のやうに、目に見えるやうな描寫を示してくれるからである。「朝食後、みんなは種々の準備にとりかゝつた。ドレーセケからは非常に大膽な『ゲルマニア行進曲』が届いた。ユルネリウスからは彼の『バグダッドの理髮師』からの素晴らしい三重唱が來たし、その他には、オットー・ジンガーの曲と私の『ブゼントの墓』がある。非常なメンバーに増員された宮廷樂團は熱心に、リストのファウスト交響樂を練習した。或る時には、そのための總譜が忘れられたが、アルテンブルグにあつた。リストはそれでもグレッツェンの所を暗譜で試演した。……残念にも私は全部の總練習に出席することが出来なかつた。といふのは、リストがやつて來て、用心のために忘れた總譜を持つて來てくれないかと私に頼んだから。私が樞の繁つてゐる中を、アルテンブルグの下の方へと降りて行く階段の所に近づいた時、初めて



一人の人の頭が見えた。すると間もなく、その人の全貌が見えたが、彼は階段を昇つて来て、殆ど上の方までやつて来た。私は目のあたり彼を見た。そして私が眼の前に見たのはリヒャルト・ワーグナーその人に違ひないと分つた時、狂喜の沙汰ではなかつた。……先づ驚いたのち、私は彼に丁寧挨拶した。間もなく彼は私のことを分つてくれ、リストが家に居るかどうかと尋ねた。家には誰もいません。みんなは祝典演奏會の試演に出かけたのです、と私は云つた。暫らく考へた後、私は彼に、そこへ私と一緒に参りませんかと問うて見た。これはリストやその他の人々との感動的な會合であらうと思つた。直ぐ彼は承諾し、私と一緒に階段を降りて、町を通つて私について来た。……試演の部屋に來た時に、彼は暫らくそこに留り、私だけを先づ入らせるやうに願つた。彼は笑ひながらそこに立つてゐた。私は階段を昇つて行つて練習場に入り、直接にリストに向つて『ワーグナーが來ましたよ』と云つた。するとリストは管絃樂員に向つて『もう練習を止めよ!! 正式の敬禮の喇叭を準備せよ!!』と命令した。皆は期待に充ちて、私かもう、又出て行つた戸口の方を眺めた。次の瞬間にはリヒャルト・ワーグナーは會場の入口に立つてゐた。彼を見たとき、名状し難い歡呼の聲が湧き起つた。管絃樂は全身の力で響き出した。リストは、ワーグナーの所へ轉がり込んで、兩人は長い間抱擁し合つてゐた。喜びにむせて歡喜と感動の涙が流れた。心から接吻し、抱擁したいといふのでいつばい人々が集まつて來た。誰も彼もが、この偉大なる巨匠から接吻され、或ひは少くも握手位はされ度いものだとい生懸命だつた。ビューロー、コルネリウス、タウジヒ、それから他の澤山の人々と、抱擁は盡くすることを知らなかつた。……ビューロー指揮の下に、ファウスト交響樂の演奏は次の演奏會と同様に、大公の宮廷劇場で行はれた。何もかもうまく捗つた。……なほ述べなければならぬことには、市場の所にある古い市役所では饗宴が行はれ、特に射的場の場所で行はれた集會では、長い列をなして數百の人々が食事を共にし、大いにビールを飲んだ。ブレンデ

ルがこのワイマール總會を閉ぢる挨拶を述べると、それに續いてリストは再び故國に歸つた友ワーグナーに對して、轟くばかりの萬歳を叫んだが、それに對してワーグナーは、今度はかなり長い、即席の演説をした。その中でワーグナーは結局、出席者に向つて『國旗に忠實であれ、そして崇高な友リストに對するやうに、彼にも堅く誓へ』と促した。この言葉が發せられた時の歡呼といつたら、何とも想像することが出來ないものであつた。祝はれた二人の人は愛する餘り、群がつかた大衆のために、危く押しつぶされさうになつた。』

八月九日にワーグナーは、厚遇を受けたアルテンブルグを立ち去つた。彼自身、彼のワイマール滞在の事を自敘傳の中に特にかう書いてゐる。『ファウスト交響樂の次に、最も成功したものは『プロメテイス』への音樂であつた。然し特に私を感動させたのは、ビューローが作曲した、エミリエ・ゲナストによる『諦めた人々』といふ歌曲集の演奏であつた。その他、この演奏會の演奏では餘り面白いものではなかつたが、まあワイスマハイマーの『ブゼントの墓』が擧げられるであらう。ところがドレーセケの『ドイツ行進曲』は、本當に大した憤慨すべきものであつた。何時もならばなかく才能あるこの人の、馬鹿にして書いたものと思つてゐないやうな、この驚くべき作曲は、どうしてもリストから賞められる理由はないと思つた。リストはこの行進曲の演奏をビューローの指揮によるやうにと固執した。ハンスは結局この曲をも立派に、而も暗譜で演奏したが、終に之はどうしても憤慨を招いた。自分の作曲が大騒ぎで受けても、聴衆の前に一度現れようとしなかつたリストは、聴衆から遂に大變な不満を以て拒絶された彼の寵愛の弟子の作品に對して、手を大きく擴げて轟くやうな喝采を叫ぼうとして、ドレーセケの行進曲が終つた時ブロスツェニウムスローゲ（舞臺の前部の左右の棧敷）に現れた。それで完全に勝利を占めたが、それはリスト一人だけが怒りに赤くなつた顔をして、聴衆にさうさせた勝利であつた。……



その他リストは、當時他のことでも非常に怒らせられてゐたことが私には分つた。彼が私自身に白狀したやうに、ワイマールの大公に私を優遇させようといふことが彼の頭にあつた。大公は私をも、彼と一緒に宮廷の食事に招待するだらうとリストは思つてゐた。今でも尙、ザクセン王領から閉め出しを食つてゐた政治的な逃亡者を保護しようといふ考へがあつたので、少くとも私のために、白鷹の章位は貰へるものと、リストは思つてゐたところが、之も駄目になつてしまつた。」

この總會の音樂的頂點をなしたのは、ファウスト交響樂であつたが、この音樂家總會の眞義は理論的な方向にあつたのである。一八五九年ライプツヒに於て起つた「全ドイツ音樂協會」が、此處に於て實際の活動を開始したのである。リストは今日も尙存在してゐる研究所を設立するのに、彼の死ぬるまで熱心に促進運動を行ひ、開催された音樂家總會には出来るだけ出席することを怠らなかつた。近代音樂の保護と音樂家の奨励を問題とした協會の主なる活動は、次の部門に分れてゐた。即ち一つは藝術上のもので、新しい作品或ひは有名でなくなつてゐる作品を演奏するのに、音樂家が集まると、他は實際上のもので、個々の人々を支持すること、或ひは全體のために保證することであつた。

音樂祭が終つてから、數日にしてリストも出發の準備をした。アルテンブルグは閉められて、リストは後二、三日全部整理するために皇太子の所に泊つてゐた。新ワイマール協會は、彼に別離の大宴會を催したが、その時コルネリウスは、悲しげな乾杯の辭を捧げ、その最後はかうであつた。

愉快的、新鮮な一杯を

お願したら取つて下さい

涙がその間に落ちたなら

涙をも一緒に飲んで下さい。

喜びの時も、悲しみの時も

近くにも遠くにも

永遠の藝術家の心に

祝福の聲を響かさう。

翌日リストは、彼の忠實なる軍隊であつた管絃樂員を、レーウエンガルテンに招待して別離を行つた。こゝでもコルネリウスは、次のやうな即座の作詩によつて氣分を高めたが、そして彼は凡ての樂器に、リストの前で別れの閲兵を行はせた。

「我等は彼等の音樂侯から

ビールと食事に招待された。」

一八六一年八月十七日に、リストはワイマールを立ち去つた。それが永遠の別れとなるのは、確かに當時誰も考へなかつた。彼はラインハルツブルンで、コーブルグ侯を訪れた後、ウィルヘルムスタールのワイマール大公の許に尙三日間滞在した。「大公は、私がワイマールを永く去つてしまふとは絶対に思つてゐない。そして私が遠くに居つても彼の家に屬してゐるといふことを考へてゐるのを私に示すために、彼は私を家人と呼んだ」と、リストはビュローに知らせてゐる。勳章は以前にはワイマールで、宮廷に於ける彼の地位を本質的にたやすくしたものであつたが、今では唯、尙僅かの目的しか有つてゐないこの勳章を、彼が既にレーウエンベルグで、ホーエンツォレルン侯の客として



ゐた時に貰つた。或る日のこと彼の所に「彼の弟子」の一人だといふ、若いイギリス人が面會を乞うて來た。ところがこの變裝の裏に、素晴らしい女の歌手が隠れてゐたのだが、この女はリストの後を追つて來たのであつた。そして嫉妬深い彼女の夫を、この假裝のトリックに用ひねばならなかつたのである。同じやうにして、彼女は後になつてローマでもう一度リストを訪れた。リストは彼の生涯を通して、女性には丁度磁石のやうな引力を持つてゐた。彼はいつも自分の圍りに女を有たねばならなかつた。ウィットゲンシュタイン侯爵夫人は後になつて、こんなことをリストに就いて書いたことがある。「婦人關係がなくて済ますには彼の心は餘りにも優しく、餘りにも藝術的で、餘りにも感受的です。——彼は、彼の社交界で婦人を有たねばなりません。——そして而も澤山の婦人を。それは丁度、彼が彼の管絃樂で澤山の樂器を用ひ、澤山の豊富な音色を使ふやうなものです。ところが残念なことに——賢くて善良な——彼の精神にピッタリ合ふやうな婦人は殆どないのです。何時も放埒な手を絃に觸れるものだから、その絃が鳴り響くとひどい音がするので。彼は結局どんなに誤解されてしまふかを考へると、私は大抵非常に悲しくなるのです。彼の勝利は恐らく後にはバッカスの勝利になるでせう。といふのは、數人のバッカスの女神達が入り混るからです。然し彼は、彼女達を呼んだのでは決してなかつたのです。彼が別に誘はれなかつたとしたら、彼は何時も自分の純粹な精神的な範圍で満足なものでした。」

リストはどんな女にも、その女が望むがまゝに會つたのである。彼は實際どんな女でも上品な女なら、騎士道的に高貴な氣持で、その女を尊敬し「私は一度だつて若い娘を誘惑した試しはない」と云つた彼の言葉は、信用してもよいのである。而も彼が七十歳の老人になつてまでも、彼は靜かにして置かれなかつた。——  
レーヴェンベルグからリストは、ベルリンのビューローの所へ出かけた。こゝで彼は遙かにローマから便りを受け

とつたが、凡ゆる面倒なことが解消されたといふ便りであり、彼は十月二十二日に、彼の五十回目の誕生日に、そこへ行くことにした。彼はそこでオリヴィールの別荘であつた聖トローベに、彼の娘のブランディーヌを訪問するといふ約束を止めて、直ちにマルセイユを通りイタリアへ旅したのであるが、こゝでは十四年かゝつた紛争の後、やつと實現を見たのである。

かくして名聲に輝いたアルテンブルグ時代、ワイマールの音樂的な黄金時代、そして確かにリストの變化多い生涯の最も主な一節が終りを告げるに至つた。これらは勇敢に、目的通り彼の藝術的な道を進んで行つたところの、彼の力の最高にあつた藝術家を吾々に示してくれた。これはリストが實踐による進歩のために、勇敢に第一線に立つて戦つた人として、又彼の藝術の頂點に立ちつゝ、新しい大膽な道を行つた天才的な自己創造者として、吾々の前に現れたところの最も緊張せる、最も實り豊かな多作の時代であつた。

#### 四、文筆家としてのリスト

音樂家自身が文筆家として、試會場に臨んだ事實は確かに割合に早くから既にあつたことである（グレットリー、グロック）が、今日一般に行はれてゐる範圍では、十九世紀の現象であり、彼等の考へを敵の新聞に對して防禦せんとする要求から起つた現象である。この際注目に價することは、音樂家は彼等の文筆を以て、専門の領域に向けられるといふよりは、大衆に向けられることが多く、この際彼等は主として美學的な問題や社會的な問題に關係し、理論的なことは教育者の方に任せてゐる。音樂家が最も惡評のあるものに就いて彼等の藝術の方向を防禦し、明かにするた



めに筆を執つたといふことは當然なことである。普通彼等の文筆的な仕事は、彼等の全體の創作的な仕事と切り離せない一部分なのである。その好適例はワーグナーの文筆であり、之は彼の音楽的な作品の必然的な補充をなすものである。ところがリストの場合は、之と異つてゐる。こゝでも彼は自分のために戦つたのではなく寧ろ第一に他人のために、そして一般のために戦つた。彼の書いたものには、彼自身の作品のことが殆ど述べられてゐない。この仕事の中にもリストの二重性格があるのであつて、即ち再生的なものと生産的なものとが常に結合してゐるのが見られる。

屢々人はリストの書き方に憤激した。彼の書き方は、よく誇張されて居り、飾り過ぎて居り、實相を捉へるのに、時として困ることがあると人は云ふ。その原因は、リストが主としてフランス語に一層の教養があり、之を翻譯したときには、何となくしつくりしないといふことにあり、又もう一つは感情の誇張を愛する浪漫派の影響があることである。ところがこの缺點は、根本的には大したことでもなく、ヴェールは平均してかゝつてゐるわけでもないのだから、内容を味得するのに困る程のものではない。リストは一定のプログラムに依つて計畫的に物を書くのではなく、主にその動機は内的な刺戟に相應してゐる。彼は作品を聞いて彼の精神的な感動を書き表さうとするのである。「音楽を理解しない人は、その書き振りを理解することも出来ないのだ。正に唯、音楽が吾々の中に惹き起す感情を、汝が正確に、而も鋭く言葉で表現することを知つてゐるやうに、このことは又正にかの感情を感得した人を有頂天にしてしまひ、音楽に對しては何とも云ふ言葉を見出さなくしてしまふものだ。」と、ワーグナーは感激を以てかう宣言してゐる。リストはこの問題を、普段嚴格に考へてゐたわけでもなかつた。思想が充滿すれば、それを表明せねばならず、彼の仕事の衝動が、彼をして凡ゆる可能なる美學的な、哲學的な、或ひは社會的な問題を取扱はせたのである。彼の考へは、この際大なる寛容とヒューマニティーによつてゐるのであり、又非常に廣義のものであり、一般的に考へら

れるものであるために、彼の提議は少しも實行力を根こそぎにするものでもないし、又今日と雖も興味を失ふものではない。今日はその時取扱はれた問題の多くが、例へば、ワーグナーの問題のやうに、結局解決されてゐるけれども、リストが取扱つた書き物は今でも尙、その價值を失ふものではない。といふのは、その素材の取扱ひ方が一般的で、そして觀點が豊かであることのために、非常に多面的であるが故に、それは何時も、どこまでも新しい見方が展開されるからである。

現在にとつて、最も價值あるものは、リストの藝術革新に關する文書であり、それは主として「藝術家の地位に就て」と「旅行先よりの書簡」といふ題目で出版されてゐるものである。この努力が、ワーグナーの文書と近似したものであるといふことは、吾々が前に既に述べた通りである。それらの考への頂點は、藝術といふものが充分に高く把握され得ないものであるといふところにある。それらは又人々がさうさせたところの特殊な地位から脱却されねばならないであらう。リストは藝術家の名望と地位を向上させるために、勇敢に戦ひ、彼はそれを「婢僕の地位」から引き離して、價值づけられるべきものと考へた。彼自身は、何もその禍に惱んだわけでもないのであるが、彼はこゝで一般の人のために戦つたのである。かうした状態の責めは、勿論藝術家自身の側にも、その一部負ふべきものがある。

これをリストは、先づ第一に自覺させようとした。「藝術家の教養にとつては、就中間性の自覺が必要である。」ところが藝術家といふものは、専門の興味にのみ従ふのみで、一般教養に於ては低下してゐるのである。「然しながら音楽家といふものは、人間的なものが、音楽家に關係のないものではないといふ條件の下にのみ音楽家であり得るのだ。音楽家は今までも充分だと考へられてゐたよりも高い精神的な發展段階に達する場合、そして又音楽家が最早無知の魂にへばりつくことなく、學問的なことや、考へる人間、そして行爲する人間の理想に無關係でなくなつた時にのみ



音楽といふものが感情に属する領域からばかりでなく、同様に又知性に属する領域からばかりでなく、同様に又知性に属する領域からも名聲と成功を得ることが出来るのである。そこでこそ鑑賞者の側からも、音楽家の中に、又は彼等の作品の中に新しく、大膽に、天才的に、彼等の再考、研究、判断を刺戟するやうな理念を見出すことが出来るのである。」音楽家が人間として、もつと高い段階に達しもつと大きな一般教養に達したならば、音楽家も自分のことを公けに自分で辯護し、音楽批評も自分ですることが出来るやうになるであらう。批評の領域も餘りよい状態とはいはれない。リストは、それに對して大いに自分でも出陣したが、こゝでは餘り大した期待のかけられないやうなものを改善する積りではなく、寧ろ聴衆をして多くの批評の眞價に對して眼を向かせ、彼等自身の考へを刺戟せよといふ目的でさうしたのである。「試験のない批評家と云ふものはあり得ないのだ。」といふ必然的な要求が、先づ履行されないから、リストは結局「藝術家自身が批評家にならなければならない。」といふ結果に到達したのである。

音楽批評と云ふものは、どうすべきであるかといふ最もよい手本を、リスト自身は、彼の批評的な文筆を以て示してゐる。彼がワイマールで歌劇を上演した時、彼は演劇的な論文を公けにしたが、その中で彼は之を書いた藝術家に忠告を與へ、一般に理解される分析によつて聴衆にその作品に對する理解と興味を惹き起させようとした。その最も詳細な事は、ワーグナーの作品に就てなされた。リストは批評家として、常に客觀的であり、温和なものであつた。彼は成る程作品の缺點を鋭い眼で認めたが、然しそれが害悪を隠すやうな傾向がある場合、或ひは彼が忠告すれば、それが矯正されると思つた時にのみ強い批評を行つた。「批評といふものは、自己創造的な働きをせねばならない」とは彼によつて、常に注目された根本命題である。彼は藝術家の個性の中に、喜んで沈潜し、その特性を掴み、解明し、彼自身が認めたところのものを他人に傳へようとした。この追隨の如何なる程度まで、リストが到達したかと

いふことは、ワーグナーの次のやうな賞讃的な言葉が、之をよく示してゐる。「貴君は小生に、初めて、唯一度、完全に理解してくれた喜びを與へたのだ。もう小生は全く胸のすく感じがするのだ。貴君が小生と共に感じてくれないものは少しだつてない。少しの心の痛みだつて残つてゐないのだ。」と。

然しリストの批評が最も立派に行はれたのは、シューマンに關する彼の比較的長い論説であり、それは凡ゆる彼が書いたものの中、批評、名技主義、謂はゞ彼の一般の藝術觀に關する最も興味ある説明を含むものである。純粹に音樂的な見地から見てもつと重要なものは、ベルリオヅと彼のハロルド交響樂に關する彼の論説であるが、そのなかで彼は、標題集に對して輝かしい辯護を行つてゐる。それは熟考されたる親切さを以て、而も眞心を以て書かれたものであるが、又幾分、彼自身の音樂上の信條を辯護してゐるところもある。最も有名な、そして同時に最も人を感動させるリストの書き物は、詩にも匹敵する彼の著述フリードリヒ・ショパンである。リストは彼の友人ショパンに不滅の記念碑を興へた。如何なる文筆家でも、これ程緊密にショパンの本質に觸れた者はないであらう。アドルフ・シュタールが云ふやうに「天才による天才の愛にかうした承認の精神」が、この著書を一貫してゐる。それは傳記ではない。ショパンといふ藝術家の姿を價値づけたものであり、彼の作品を彼の國民的性格から釋明したものである。ショパンはポーランドの國民的英雄であり、ポーランドの風俗習慣を知つて、初めて吾々は彼の藝術に對する眞の理解を得るのである。このポーランドの抒情を敘述するのに、リストはウィットゲンシュタイン侯爵夫人に、その確實な根據を有つて居り、「ショパン」にある多くのことが、彼女の筆に起因してゐるのである。

彼の最後の文筆的な仕事は、大著「ハンガリアに於けるジプシーとその音樂」である。それは彼の最も早い幼時の頃から抱いてゐたブスタ（ハンガリアの草原）の故郷のない息子達に對する同情から由來するものであり、大部分は



自分で體驗した事件から出來上つたものである。その根本的な考へは、ハンガリア音楽はジブシーにその根源があるといふ證明を導き出すことであり、かくして彼のハンガリア狂詩曲の文學的な補充と解明とを齎らすといふ考へである。高い詩的な内容を有つた如何に美しい事件や挿話が、この本の中に含まれてゐても、全體としてそれは然し餘りにも迂遠であり、混亂してゐるために、明快な面白さを識者に與へるものではない。それは疑ひもなく、彼の文學的作品の駄作の方に屬する。この本に全く偶發的に出てくるユダヤ人の問題に關する取扱ひは、オランダ人の論說にあるエリクに關する、餘りうまくない場所と同様に、ウイットゲンシュタイン侯爵夫人の筆になるものである。リスト全集の新しく出版された大衆版では、凡ゆる之等の附加物が取除かれ、凡ゆる人にこの高貴な人間、そして情熱のある藝術家の心の告白を窺ふことが出来るやうにしてある。

## ローマ時代（一八六一年—一八六九年）

### 一、リストとウイットゲンシュタイン侯爵夫人

リストについてアルテンブルグに來てゐた侯爵夫人は、二人の邪魔になるものを容易に除去することが出来るやうにと、少しは氣にしながらも希望して居つた。そして或る時はまた彼女は目的を達したかのやうであつた。これは彼女がアイルゼンで病臥して居つた一八五一年のことであつた。その當時兩人を有頂天にさせてゐた楽しい希望を、リストは彼が結婚の音楽として侯爵夫人のために創作した祝典音楽の中に表現したのであつたが、勝利の歡呼が來るには尙早過ぎ、それに續いたのは唯餘りに速くやつて來た痛々しい失望だけだつた。彼女の兄ニコラウス皇帝の下に居たマリア・パウロフナの熱心な、正しいとりなしにも拘らず、別れてしまふといふことは侯爵夫人には出來なかつた。彼女をポーランド人として、政治的に疑心の眼をもつて見てゐた悪意ある親族達は、ペテルスブルグで非常な勢力を持つてゐた。侯爵夫人は娘を伴つてその故郷に赴き、其處で自分で色々の事を處理するやうにといふ通告をロシアから受取つた。だが彼女は、子供と別れたり、或ひは何處かのロシアの修道院に逃亡しなければならぬといふ苦悶から、その命令に服従することを拒絶した。それ故、彼女の旅券はもはや新しく下附されず、彼女の財産は沒收されるとこ



ろとなつた。彼女は慎重にも前以て、既に自分の資産を娘に譲つて置いたので、彼女の資産はその儘娘に残された。然しそれはマリーが結婚するまでは差し押へられ、侯爵夫人には唯教育費が渡されただけだつた。資産の七分の一角が判決によつてウィットゲンシュタイン侯爵のもと認められた。侯爵はプロテスタントといふことで造作なく離婚してしまひ、そして間もなく再び結婚した。彼女のロシア市民権の喪失は侯爵夫人にとつては面白くない結果となつた。ワイマールの宮廷は最早彼女を公式には待遇することが出来なくなり、彼女は宮廷社交界から問題にされなくなつた。かうしてワイマールに於ける彼女の社交的地位は、殆ど何の役にも立たなくなり、此の不快な状態で其處に留ることには、彼女にとつて殉教の如き苦痛となつた。彼女の忠實な味方となつてゐたリストにとつて、事態は同じく苦しいものであつた。といふのは彼は宮廷では依然として交際しなければならなかつたからである。が彼は社交界からは完全に退いてしまつた。かうして遂にマリー姫の結婚の後に、彼女の資産をどうにかして尙獲得しようとする可能性は、ロシアではすつかりなくなつてしまつたが、ペテルスブルグでの離婚手續は侯爵夫人のために有利に決定された。そしてロシアの教會裁判所でも再婚を承諾した。だが今や、ワイマールもその大僧正管區に屬してゐたフルダ僧正は此の決定を承認することを拒絶し、そして婚禮を擧げることを拒絶した。それ故僧正を強制するために、ローマ法皇自らの裁可を得るといふより他に道は一つもなかつた。かういふことが好く行くためには、大概こんな場合に必然的な道程を、或る個人が指導して行くことがどうしても必要なものであつた。そこで侯爵夫人は、自ら自分の意志を實現するためにローマに旅しようと思つた。彼女は此處で多くの人々と交際して非常に影響を受け、特に大僧正アントネリを忠實な相談役として得た。然し此處でも事態は進捗しなかつたので、侯爵夫人は突然一八六〇年九月九日にローマ法皇の所へ謁見に行つた。そして彼女は法皇に自分の悩みを痛切な言葉で述べ立てて理解させたので、ピウス九

世は彼女に援助することを約束した。九月二十二日には既に大僧正會議が彼女の事件を審議するために開かれ、萬場一致で彼女に好意ある決定を下した。ロシア大僧正會議の決議はローマで承認せられ、法皇に依つて全權は署名されることになつた。今や朗かな心を以て、侯爵夫人はワイマールに歸らうと思つたが、アントネリは彼女に對して最早如何なる種類の新しい困難も起らないといふ確信が出来るまでは、ローマで待つ方がよいと忠告した。そして彼の忠告は正しかつた。侯爵夫人はローマに留り、彼女の執事オクレスツェフスキーに指令を持たせてウィーンのフルダの所に行かせた。ウィーンのローマ法皇の使節デ・ルッカ大僧正は、ローマでの決議を承認したのであつたが、その後で侯爵夫人の第二の結婚をさせる權利を與へてはいけなさと、フルダ僧正に忠告した。侯爵夫人がどんなに訴へようと、またウィーンに即刻急行したリストが、どんなに個人的に相談を持ち込まうと、ルッカの反對をなくすることは出来なかつた。フルダ僧正は主として、凡ゆる手段を講じて侯爵夫人とリストとの結婚に對して陰謀を廻らしてゐた當時の大僧正、即ち後のグスタフ・ホーエンローエ大僧正の側から、非常に影響されてゐたのであつた。後になつて目的が達成した時に、フルダ僧正は大つびらな氣持でリストの友人となつた。指令は再びローマに歸つて來た。法皇は確固たる權利を主張せずして、ロシアから要求された調書に基いて事態の完全な調査を命令した。此の時にも、ローマの判決は侯爵夫人に好意あるものと決まり、法皇は二度目の許可を與へた。もう之以上の凡ゆる困難なことを逃げるために、ローマで婚禮を擧げるといふことに決まつた。リストは此の問題に就いて心から喜んで彼を援助してゐた大公のおかげで、間斷なく彼の所に到着してゐた必要な書類を全部整理し、そしてこつそりとローマへ行き、そこで一八六一年の十月二十二日の彼の生誕五十年の日に婚禮を實行することになつた。リストは二十日ローマに到着した。そして二十一日に、既に結婚式のために飾られた聖カルロ・アルコルソ寺院で侯爵夫人と共に聖餐式を受けた。翌日早朝



六時に婚禮は擧げられることになつてゐた。

此の時、夜遅くなつて、ローマ法皇の使節が婚禮は延期しなければならぬといふ通告を持つてやつて來た。即ちローマに偶然に滞在してゐた侯爵夫人の富有な親戚の人が法皇に謁見して、侯爵夫人の最初の結婚の年はさも幸福なやうであり、且つ結婚の取極めも自發的にやつたもののやうであつた。従つて彼女は僞證の罪を犯したのであるといふことを、法皇に確信させたのであつた。ローマ法皇は、之がため調書を今一度検査することを要求した。此の打撃は侯爵夫人にとつては絶望的なものだつた。彼女は十四年間の長い年月の結晶が再び取り返し得ざるものの如く、失はれて行くものと思ひ、調書の返還を拒絶した。彼女は打ち沈んだ心を以て、彼女にあんなにも熱烈に愛された人と結ばれることを斷念した。こんな風になつたのはどう考へても合點の行かぬことのやうに思はれる筈だ。侯爵夫人が何年もの間闘争しつゝ身を以て示した精力、そして此の新しく切迫して來る試煉としての數々の不幸な出來事の前に、斷乎として畏縮しなかつた精力に照して考へれば、此の新しい障害を除去する事位、彼女にとつては易々と成功したに違ひないかも知れない。それ故、このやうになつたのには、尙何か他の事が介在してゐたに違ひなかつた。此の豫測を證明するものとして、侯爵夫人は一八六四年彼女の前の夫が不慮の死を遂げた時に、その死によつて全く自由となり、そして何時でもリストとの結婚を完結することが出來、もとのやうな工合になるといふことはなくなつたといふ事實がある。ワイマールの大公は、その時リストに次のやうに書き送つた。「ワイトゲンシュタイン侯爵の死去以來、御身等二人の結婚に逆ひ得るやうな人間的(原因)、若くは俗世間的權力は少しもない。故に此の結婚が今行はれないとすれば、その原因は御身か若くは彼女にあるのである！」そして原因は彼女の側にあつた。侯爵夫人は自ら好んでリストを見限つた。彼女は自分の念願を、ローマに於て漸次に絶えず自分に對して力を得て來た或る考への犠

牲としたのだつた。彼女自身は此の事について後年リストに次のやうに書き送つてゐる。「もうポロニンケに歸つて來ないといふこと、もうワイマールに歸つて來ないといふことが、私に對して何を負はしむるかといふことは、唯神様だけが知つてゐます！ ですが——私達は或る地位を確保するためにではなく、或る理念、或る作品のために此の地上に生きてゐるのであるといふ感情——此の感情が如何なる場合にも、私が歸らないといふことの邪魔をしたのです。私がさういふ斷乎たる氣持と共に而も未だ臆病な氣持に誘はれてゐます時、美しい小さな家とか、そして私が父や母の見てゐる所で植ゑた澤山の草花は、心の中から離れ去つてしまひました。——同じやうに、私が貴方をお慕ひし、私の子供の生長してゐるのを見てゐた美しい部屋も！ ワイマールは、その頃はポロニンケよりも一層大きな憧れの的でした。——而もローマはワイマールよりも更に大きな憧れの的でした！ ですから私はワイマールのためにポロニンケを、そしてローマのためにワイマールを犠牲にしたのです。——何故なら貴方はワイマールで偉くなるかも知れないが、それよりもローマに於て、より偉くなつてゐるし、これからもさうでせう！」

侯爵夫人は、信仰が凝り固つてゐるといふ程ではなかつたが、元來非常に信仰深い人であつた。且つ吾々は彼女が益々信心深くなり、彼女の考へは段々と俗世間から離れて教會の方に向つて行つたといふことを、ローマの生活から充分理解して來た。彼女が以前、自分には或る藝術的使命、即ちリストを作曲家にする(此の際、彼女の考へてゐた限りのものは確かに幻覺ではあつたが、見事な結晶を示した)といふ果すべき藝術的使命が残されてゐたと信じてゐたので、彼女は今や、教會的使命に従はうといふ風に思つた。彼女は自分自身とリストとを教會に捧げ、そして彼女の愛を崇高な目的のために喜んで犠牲にしようと思つた。リストは世俗的音樂を放棄しなければならず、而も將來も唯ローマに於て教會の榮譽のためにのみ、敬虔なる作品を創らなければならなかつた。彼女は殉教者の熱意を以て大き



な犠牲を喜んで身に受けたのであるが、此の大きな犠牲を彼女にも負はせた。かゝる考へを彼女が實行し得たといふことには、二つの外部的事情が與つて力があつたのである。先づ第一には、私が以前既に強調したやうに、兩人の愛の契は、最初から主として魂を共有するといふことに根ざして居り、感能的な契機はその際少くとも侯爵夫人の側では完全に無視されてゐた。といふことのために、婚姻の取極めを相互に斷念するといふことは樂なこととなつたのである。彼女は又もと／＼リストの女友達に過ぎず、妻ではなかつた。そして彼女も亦妻といふことを餘り問題にしないで居られた。當時のコルネリウスの手紙の中に現れてゐる無數の暗示によつて豫測されるやうに、一年半の別居によつてリストの方でも亦愛の焰は、見受けるところ、冷却して行つたもののやうである。にも拘らずリストは嘗てあのやうにも熱く愛し、そして彼のためにあのやうにも多くの犠牲を拂つた女に對して生活上の義務を感じた。そして彼はこのやうな點では何時も騎士のやうな心を懷いてゐたので、逡巡するやうなことはなかつた。かうした状態に於てのみリストが侯爵夫人の斷念に同意したといふことがあり得たのであつた。彼の方から先にさうしたことを表明するといふことは殆どないことだらう。侯爵夫人がリストを彼女の教會的計畫に賛成さすのに成功したといふことは、現在の俗世間の音樂生活に對する大家特有の反抗意志と、何よりも現在の俗世間の音樂生活から退きたいといふ彼自身の願ひによつて、非常に助けられた。私は前にドイツで交響樂の課題を課せられたが、大部分をうまい具合に解決することが出来た。そして今後はオラトリオの課題と並んで、それと同様な關係を持つた作品を完成しようと思つてゐる」と、その當時リストはブレンデルに書き送つてゐる。

彼は前々から教會音樂に非常な興味を抱き、永い間その改革に努力して來た。彼は今こそローマに於て自分の計畫を實行し得るものと思つた。さうだ！ カトリック教會音樂の改革者になるといふ考へは、恐らくずつと前から彼の

念頭を離れなかつたに違ひない。このために彼は侯爵夫人の提案に自ら進んで耳を傾けた。だが今後進んで行くべき道を進むためには、リスト自身、ローマの僧侶階級の一員となるといふことが必要であつた。といふのはリストが實際に改革者として仕事を行ひ得るために占めてゐなければならなかつた地位、即ち法皇の樂長には、僧職に在る人しかなることが出来なかつたからである。此の要求は今やリストが幼い時代から胸に抱いて來た心からの願ひと結びつき、そして兩親のことを考へて既に二回も拒まれた此の懇求は、今となつては少しも外部的障礙に邪魔されることはなかつたので、彼は世間からは色々嘲笑され或は惡意を以て解釋されるやうな手段をとつた。そして此の手段は唯彼の内面的發展の首尾一貫してゐるといふことだけを示してゐる。即ち彼は一八六五年四月二十五日に下級の僧職を授與された。その時侯爵夫人はリストが教會での地位の名譽ある指導者にまで段々昇つて行くこと、否恐らくは大僧正の印綬をさへも帯びるに至ることを希望した。そして彼女は屢々上級の僧侶に宛てた數々の手紙の中で、上級僧侶階級の人々の中に、リストよりも重要な人は殆ど一人も見られないといふこと、そして教會は何故このリストといふ偉大なる名前を以て自分を飾り立てないのであるかが私には分らないと述べた。リスト自身がかうした考へとは完全に無關係であつたといふことは、彼が上級の僧職授與の式を受けるための準備を直ちに斷念したといふ事實以外に、彼自身の次の言葉か之を示してゐる。「教會で出世したいといふ名譽心は、私には少しも無いといふことを貴方程よく知つてゐる人は一人も居りません。私が五十四歳になつて、下級の僧職を授與された時、私は出来るだけ無關係な様子で押し進まうと考へてゐました。私は唯一人、そして素樸な正直な心を持つといふことだけを注意しながら、以前の私の少年時代の志に従つて行きました。」

侯爵夫人はまた完全に身を捧げて教會に奉仕した。彼女は親しくしてゐた教會の名士の忠告と指導のもとに、神



學の勉強や教會政策の研究に没頭した。そして彼女はそれらを特に自分のために借りてみた印刷工場で印刷したが、公けにしたのはほんの一部分であつた。彼女は殆ど間斷なく研究を續けた。そして彼女の論文は非常に誇張した不得要領な様式のために、殆ど讀まれなかつたが、その數に於ては實に夥しいものである。彼女が此の世を去る數日前に完成し、そして彼女の死後二十五年にして初めて公けにされた最後の論文にして、而も主論文たる「教會の外部に於ける弱さの内的原因」と云ふ論文はそれだけで、二十四卷に達してゐる。

自分自身とリストとを教會に奉仕させようといふ侯爵夫人の考へは又、最も崇高な意圖に根ざしてはゐても、その考へは二人にとつて非常に有害なものとなつた。そして又ワイマール時代にリストの爲に盡した侯爵夫人の功績が餘りにも大きかつたので、後年になつては反つて、その功績はリストの不幸の種となつた。ローマはリストの音楽に就てと同様に彼の種々の改革案に就ては殆ど爲すことを知らなかつた。そして彼は再びドイツと提携して行くべきであり、イタリアに永居する必要のないことを直ちに見取つた。此處に至つてはもう侯爵夫人はリストを身近に置いておくことは出来なくなり、又その意志はなかつた。かくして彼は老年の身で、唯一人安らふべきところもなく、世の中を放浪して歩く他はなかつた。侯爵夫人も自分の仕事の中に満足を見出してゐなかつた。そして取りわけ彼女が期待してゐた世の賛同を得てはゐなかつた。彼女は段々と神祕的な空想に耽つて行き、そして時が経つにつれて彼女にはリストの藝術や創作を理解することが出来なくなつて行つた。彼等二人は、このやうに、今に至るもお互を理解することなく、別々に離れて最後まで來たのであつた。リストは晩年になつて、正に病的な侯爵夫人の考へ方に就いて、云ふに云はれぬ程の悩みを訴へた。彼は常に懺悔し、神に祈り、天使に訴へたに違ひなかつた。リストの生涯の中で重要點となるべきバイロイト、ベスト、ローマの間中、彼等は少しも打ちとけて話すやうなことはなかつた。

といふのは侯爵夫人はその生活に就て異つた意見を持ち、絶えずリストを非難してゐたからである。このやうにして最後の年の手紙は、大抵リストから出した外面的事件のつまらない報告と、侯爵夫人から出した忠告文に限られてゐる。「私の老年時代の非常な意氣消沈の原因は、貴女との意見の相違を見出したといふことなのです。それは一八四七年から一八六二年の間のやうなものではありませんでした。文學上のこととか、私の至らないことに就ての二三の論争はさておいて、私達は最も完全な一致といふことに關して悉く本質的な疑問を持つてゐました。ローマと、貴方の精神の超感覺的なものは、凡てを變化させてしまひました。」とリストは自分で書いてゐる。かくして彼等が一八六一年に齎した大なる犠牲は、全く何もならないまゝになつてしまつた。侯爵夫人は一生の終り頃になつて、自分の誤つた生活を振返つて考へ、そしてリストはかゝる歩みの跡を考へて、晩年をひどく惱まなければならなかつた。

## 二、一八六一年より一八六九年までの事件

「私は實際自分のことに就て貴方にお話することは殆ど何もありません。當地での交際仲間がかなり廣くなり、私の興味を惹く種類のものであつても（勿論決して音楽の仲間ばかりではなかつたが！）、ドイツで過すことが出来たよりももつと引籠つた生活をしてゐます。午前中は仕事のために過され、屢々夕方の幾時間も仕事のために過されます。『エリザベート』を私は三ヶ月間で完全に仕上げたいと思つてゐます。この作品は完全に私の心を奪つてゐますので、それまでは他のものは何も計畫することが出来ません。」と、リストは一八六一年の終りにブレンデルに報じてゐる。



彼は初めはフェリーチエ街一一三番地の家に住んでゐた。彼が交際してゐた社交界は主に次のやうな人々から成つてゐた。即ち大公殿下に紹介された有名なダンテ研究家デク・ドゥ・セルモネータ（ミケランジェロ・カエターニ）、エルビス・メレーナといふペンネームで知られてゐたシュワルツ男爵夫人。「彼女のサロンにはローマの愛國主義者達、身分の高い僧侶達、凡ゆる國の來訪者達、藝術家、音楽家達が居り、その人達の中でフランツ・リストは何時も第一級の人として待遇されてゐた」。當時の總理大臣の妻ドンナ・ラウラ・ミンゲッテイとその娘、彼女は後にマリイ・デーノンホーフ伯爵夫人となつたのであるが、リストは大抵日曜の午後は彼女達のところへ現れてゐた。ジビレ・メルテンス・シャーフハウゼン夫人、彼女は毎火曜の夕方、高貴な客人として訪れてゐた。そして畫家ベーター・フォン・コルネリウス、カテル、ネレンツ、リンデマン・フロムメル等が訪れた。またプロシアの公使アルニム伯爵と公使館參事官クルト・フォン・シュレーツァーの住んでゐたカファレルリ邸の社交の夕べにも、リストは屢々参加し、又その藝術家聯盟の夕べにも度々出席した。當時スバトニヤ廣場の九十三番地に住んで居り、そして毎日のやうに、聖職にある人や學者の澤山の訪問を受けてゐたウイットゲンシュタイン侯爵夫人のサロンで、ローマの精神界の巨匠達と相識るやうになつた。――

一八六二年八月十日に、リストのオラトリオ、聖エリザベートが完成した。このオラトリオは彼がワイマールに於て着手し、そして現在熱心に制作に従事してゐたものだつた。彼はそれから二三週間ローマのカンパニヤ地方へ保養に行つた。歸つて来るや彼はミサ・コラリスと（十一月に）、彼の最大の教會作品キリストを始めた。彼はワイマールやロンドンや、そして又音楽聯盟からの演奏案内を皆次のやうに斷つた。「私は此處でずつと靜かな氣持ちで、止むことなく、そして徹底的に仕事を續けて行かうと固く決心してゐます。聖エリザベートの傳説は世の中から見捨てら

れてはいけないものです。そして私の屬してゐる社會が此の傳説を育て上げるやうに骨を折らねばなりません。他の人々には、此の努力は何か取るに足らぬこと、無用なこと、どのみち甲斐なきこと、そして殆ど益のないことと見えるかも知れません。だが私にとつてはそれこそ努力して獲得すべき、そして凡てその他のものを犠牲にすべき唯一の藝術の目標なのです。私の年齢では家に引籠つてゐることが爲になります。吾々の求めてゐるものは、外面にはなく、内面へと向つてゐるものです」。又ハンガリア音楽の促進のために、彼の住所をベストに定めて欲しいといふベストの音楽學校理事會の要請も、彼は次のやうに拒絶した。「然し若しかすると、後になつて、ハンガリアのために何か作曲するといふ適當な機會が起るかも知れません。グランのミサ曲の前例に倣つて、例へば特別な動機の場合に、何かテ・デウムか、或はそれと似通つたものが私に委さるべきでした。このためなら私は喜んで最善を盡したことでせう。そしてかういふ仕方でのみ、私はハンガリアへ歸るといふことを適當だと思つてゐます。」

一八六二年の秋、リストはその上、悲しい報知を受取つた。九月十一日彼の娘ブランディエヌが、聖トロローベのオリバー領で死去した。そして其處は、彼女が二三週間前に一人の子供をまうけたところであつた。リストは、この報知のために病みついてしまつた。今や既に第二の子供を、その若い盛りを奪ひ去つてしまつたこの苛酷な運命の打撃に對して、彼は宗教と自分の仕事との間に、再びだん／＼と慰めを見出して來た。「ブランディエヌは、私の心の中にダニエルと並んで住んでゐます。兩人は何時まで、私にとつては、贖罪の如く、淨化の如く、そして *Suisum corda*（心を擧げて主を仰がん、ミサ中の文句）と叫ぶ代願者のやうなものなのです。吾々が地上に生きてゐる限りは、その日／＼の仕事が果して行かなければなりません。私の日々の仕事も、中斷されるやうなことがあつてはなりません。私の心の涙のために、私は謂はゞ「ラクリモーザ」（涙を流す）を作り、私の愛する人達のために、激情に



點火し、そして私の愛する死者達を、精神的にも、肉體的にも、骨壺の中に守りおほせなければなりません。かういふことにこそ、私の藝術の課題は置かれてあり、目指されてゐるのです。」

ローマに於て、彼は社交的義務を負はされ始め、仕事することは殆ど不可能となつてしまつた。「過ぐる二三ヶ月は、非常に多くの面倒なことがあり、私は今尙實に腹立たしく思つてゐる程です。でも私は、以前の計畫を徹底的に實行しなければなりませんので、私は完全に閉ぢ籠らなければなりません」。かういふ企圖のために彼は次のやうな提言に容易に従つて行つた。此の提言といふのは、リストが一八三九年のローマでの滞在の頃から既に知つて居り、價值を認めてゐたバチカンの文書係長タイナー神父から來たものであり、街の真中にある彼の住居を、オラトリオ派所屬の、タイナー神父も住んでゐたマリオの丘の上に、マドンナ・デル・ロザリオ僧院の一部屋と交換するといふ提言なのであつた。一八六三年六月二十日、リストは凡そ町から一時間かゝる所にある此の新しい住居に移轉した。此の新居からは意のままに、ローマやカムパニヤ地方、更にアルバンやサビーネの山々を望むことが出來た。七月十一日には、法皇ピウス九世が此の地に彼を訪れ、凡そ半時間ばかり留り、その間リストに「ハルモニウムと勉強用小ピアノとで、彼の技倆を試す一寸した試験を行つた。」二、三日して法皇は、彼に謁見(彼のローマ滞在中の最初の謁見)を賜はり、聖母の彫刻がしてある美しい寶石を彼に贈つた。ピウス九世は、リストに非常に好意を持つてゐた。そして喜んで、彼の教會音樂改革を實行に移させる積りでゐたらしい。だがこの立派な考へは、ローマの司教達の反對と無理解とに會つて失敗してしまつた。彼等の要求に反對してまで、法皇は彼の意志を貫徹することは出來なかつた。リストもかういふ事態になれば、その日から彼の生活は最早や心安いものではなくなつたのであらう。ピウス九世の死後、リストのバチカンとの關係は消滅してしまつた。

リストは、今や完全に引籠つて生活した。彼が當時交際した少數の人達としては、二人の教區侯ボナバルテとナルデイ、ロシア公使館書記官フェリックス・フォン・マイENDORF男爵とその夫人、王女として生れたゴルトシャコフを算へることが出来る。——或る祝典演奏會で、吾々のために演奏して欲しいといふケルンの寺院建設のための社交への勧誘を、リストは彼の「當分の作曲の仕事」にかこつけて斷わつた。そして同様に、ペテルスブルグ招待も斷わつた。アムステルダム音樂協會「Zelus pro Domini dei」(聖堂に捧ぐる熱情)は、當時としては、稱讚に價する除外例を爲してゐた。といふのは、その音樂協會では凡ゆる他の音樂界の如く、名人リスト若くは指揮者リストに眼を向けずして、作曲家リストに尊敬を拂つてゐたのである。アムステルダム音樂協會は、グランのミサ曲の上演を機として、彼に名譽會員の免狀を送つて來た。オラトリオ・キリストの斷片、法皇讚歌はペトルス生誕一八〇〇年祭に聖ペートル寺院で唱はれたのであるが、此のオラトリオ・キリストを熱心に勞作する傍ら、リストはベートーヴェンの交響曲の彼のピアノ總譜の校訂に従事した。そして彼はまた、それに續いてベートーヴェンの絃樂四重奏曲のピアノ編曲を行はうと思つてゐた。彼はその際出來得る限りの素材さと云ふことに心掛けて來た。「私が四十歳時代には、ピアノをやつと處理することが出來、ピアノを圍つて仕事することが出來た結果として、今や演奏者が必要な程度に苦しみ、そして適度な努力をすれば、能ふ限りの音と力の作用は演奏者の意のままになるといふことに非常に注意するやうになりました。此の意味合ひに於ても、私の改良癖は、慢性の、良くなる望みのない疾病となつてゐます。そして公衆は、直ちにベートーヴェンの交響曲の新版によつて、此のことの正しい見本を受取ることでせう」。

一八六四年三月二十一日に、リストは新兵舎の會堂で、ローマ法皇への獻金のために、「宗教樂演奏會」を催した。彼は全く、ローマの音樂生活から退いてゐたのであるが、教會の好意に報いるために、此處で唯一度だけ公衆の前に



現れたのである。彼は自分で、二三の宗教的な楽曲を演奏した。此の催しにあつては、法皇所屬の教會合唱團が、合唱の役を引受けて協力し、四人の大僧正が教會の講演を受け持った。その夕べの収入は約二萬リラを計上した。その年の夏、長い間仕事を邪魔するやうなことが、リストに近づいて来た。即ち、先づ彼は七月の中頃、二三日間テイボリのデステ別荘のグスタフ・ホーエンローエ大僧正の所に留つた。此の別荘は、モデナ大公からグスタフ・ホーエンローエ大僧正に、終身譲られたものである。そして此處から續いて法皇廳の夏季の別邸、ガンドルフオ城に行き、そこで彼は法皇のために度々演奏した。續いて八月にはドイツへの長い旅行が行はれた。これは彼がワイマールに別れてからの、最初の歸還であつた。ブレンデルとの頻繁な文通の中で見ると、リストは第三回の音楽家總會の議事に關係を持つて来たし、そして終に、若しもビュローがカールスルーエの祝典の指揮の地位に就くならば、自分がどうしても出て行くと續いて約束してゐる。「私は貴方に率直に申しませう。たとへほんの短い間だけでも、ローマを去るといふことは、私には少くとも不都合なことです。そして私は、所謂有力階級の、つまらない厭らしいことの中に於てよりも、私の當地での隱遁生活の中に、より多くの満足を見出すといふことを邪推しはしないでせう。然し事態が好都合であり、二三人の愛する友人が役に立つてくれるといふことを、貴方が保證なさるやうに、ほんたうにさうならば、凡ての他の疑惑は除かなければならず、そして私の快諾は、試験に打ち勝たなければなりません。たとへ私に、出發のための決斷が非常に重々しく落ちかゝるとしても、私は六月の初にカールスルーエへの旅券を調べさせます。そしてビュローが、その音楽祭の指揮の地位に就くといふことを豫想すれば、その地の音楽祭には、どうしても出席致します。」

八月十日に、リストはローマを出立して、マルセーユ、ストラスブルグを通つて、カールスルーエへ赴いた。此處

では、色々と彼を失望さすやうなことが待ち構へてゐた。ビュローは猛烈な神經熱のために、ミュンヘンに引籠つてゐた。新しい趨勢の滲透に關するベルリンでの激烈な闘争と、名人としても、教師としても、音楽學校の大立物たる骨身をけづるやうな活動が、彼の精力を完全に汲み盡したのであつた。バイエルン王、ルードウィヒ二世によつて、最大の危急を免れ、ミュンヘンに呼ばれてゐたワグナーの招待に應じて、ビュローもミュンヘンへ赴いたのであつた。ワグナーはミュンヘンでは「王様の御前演奏家」として、二千グレンの俸給を貰つてゐた。ビュローは、既にミュンヘンで病氣になり、その爲にカールスルーエへ赴くことは不可能であつた。コジマはビュローの悲しい状態を知らせる爲に、父リストのところへ現れた。そのため、レーウエンベルグの樂長ザイフリッツが來て音楽祭の指揮を受持つた。リストの作品では、八月二十二日から二十六日まで催された音楽家總會に、十三番のブサルムとメフイストワルツと祝典樂が演奏された。その他ビュローの女弟子トッパ嬢が、リストのソナタを演奏した。作品は皆、滿場を揺がすやうな歓迎を受けた。リストは又も古い友人達から挨拶を受けることが出来た。即ちアゲネス・ストリート・クリンドウォルト、モウクハノフ侯爵夫人、顧問官ハイナルド、ギルレ、ラッセン、ブルックナー、ジンガリーデル等々であつた。宮廷の人達は、バーデン・バーデンに滞在してゐたので演奏會には來なかつた。音楽家總會の終了後、リストは直ちにジマを伴つてミュンヘンに旅立つた。彼の來訪は、たゞ獨り病めるビュローのためであつた。リストはワグナーを、王様の許にゐるといふことで非常に信頼してゐたのであるが、ワグナーは、八月二十八日、日曜のその日になつても、自分の友人に挨拶するために、ミュンヘンへ急行するといふやうなことをしなかつた。ビュローの病床で彼等は三年の疎遠の後、再び一緒になつた。火曜日の午後リストは友人に従つてシュタルンベルグ湖畔の、その別荘に行き、そこで彼等は最近の出來事をみんな語り合つた。彼はそのことに就



いて、ローマの侯爵夫人に報告した。「ワーグナーのことと云つたら、もう彼女は殆んど狂喜の沙汰ではありません！ サロモンは當にならなくなりました。太陽の下に新しいものがあるのです。私は昨晩より、このことを全く確信してゐます。——といふのは、ワーグナーは自分に贈られた王様の手紙の二三を私に示してくれたからです。結局そのために、私共の間には別段變つたところがある筈はないのです。私が『榮譽ある男』と云ふ別名を與へた彼にとり、押付けられた偉大なる幸福は、出来るだけ彼の性格の頑固なところを和らげることになるでせう。ワーグナーは、彼の『名歌手』で私を教育してくれました。そして私は、返禮として『祝福』を彼に見せました。彼はそれに非常に満足の様子です。名歌手は、フモールとガイストと優雅な活氣を持つた大作です。それはシェークスピアの如く、明るく、美しいものです。」

ミュンヘンから、リストはストットガルトを通つてワイマールに赴いた。深く感動しつゝ。彼はアルテンブルグの部屋に再び入つて行つた。此處には一八六二年以來、侯爵夫人の侍女アウグスト・ピツケルが管理人として住んでゐた。宮廷の人々は又ワイマールにゐなかつたので、リストはレーウエンベルグにホーエンツォーレルン侯爵を訪れ、次に、なほ二三日ベルリンのビューローの所に留つた。それから、またしても彼のワイマールへ歸つて來ることを懇願し、そして何故侯爵夫人との結婚が、ウィットゲンシュタイン侯爵の死んだ今日となつても行はれないかを、了解しなかつたワイマール大公の客となつて、ウィルヘルムス・タールに暫くゐた後、彼は十月二日に、母を訪ねてパリに入つた。母はブランディヌの結婚以來、オリビールの所で暮してゐた。彼はブランディヌの奥津城に詣でた。聖トロベ(寺院)を通つて、彼は十月十八日に、マリオの丘にあるローマの幽居に再び歸つて來て自分の仕事を始めた。當時彼は専ら、或るローマの高僧によつて起草された大きな宗教樂の仕事と修正に従事してゐた。そしてその宗教樂と

いふものは、一年中の教會の祝典全部を、グレゴリアンの歌で充してゐたものである。

一八六五年の三月にもう一度、リストはピアノ演奏に驚嘆させられるやうな機會が起つた。彼は又もやローマ法皇への獻金のために(今度はカピトール會堂で)演奏會に共演した。この時の出來事を、彼はブレンデルに宛てた手紙に自分でから述べてゐる。「ローマにある種々の樂團が、一つの演奏に集つて來たといふのは、今度が初めてであつた。それでこの演奏は完全に成功し、又好評を博したので。演奏會は、聖なる父に委ねられ、聖なる父によつて承諾されました。前年の如く、細かい部分の準備の方式と一緒になつて齎された——(貴族や長官の貴婦人達數人が、入場券を分擔し、ほんの少ししか残らず、貼札は少しも用ひなかつた等)事態の例外的性格が、私の共演を決定しました。私は『カンテイク』を演奏しました。そして喝采が終らなかつたので、尚ロッシーニの『シャリテ』の、私の改作したものを附け加へました。ローマに於て教養を求めるものは、皆出席しました。そして會堂は溢るゝばかりでした。」とかくするうちに、リストはほんとにこつそりと、ドミニコ教團の僧サルアと共に、下級僧職授與の試験準備をした。彼がかういふ過程を計畫したといふことは、侯爵夫人の他は法皇と顧問官ホーエンローエしか知らなかつた。この顧問官ホーエンローエは、侯爵夫人とのリストの結婚を妨害しようといふ自分の目的が確定的となつたのを見た時に、リストに非常に近寄つて來、彼の凡ての教會に關する色々の計畫に於て、正當にもリストを後援した。そして自分で出來得るだけのことをして、リストの負擔を軽くしようとした。リストは、四月二十五日に彼から僧職を授與された。そして、それからヴァチカンにある、ホーエンローエの家の部屋に移り住んだ。後程ホーエンローエは、ティヴォリのデステ別荘の三つの部屋を、永久に使ふやうにと彼に與へた。リストが僧職に入り込む準備のために、ラザリストの隱遁的孤獨に打ち沈んでゐた日の前日、彼は尙、バルベリーニ邸の輝かしい社交界で、ウェーバーの舞踊へ



の勧誘と魔王と、彼の名手時代の輝かしい作品を二つ演奏した。この奇妙ではあるが、未だ理解し得る状態は、悪意ある解釋を蒙つた。それは謂はば、世の中から名手として、最後の別れを告げるやうなものであつた。彼が一カトリック僧となつたといふ報らせは、自然に大評判と無数の噂の種を呼び起した。リストは平靜な心で凡てを耐へ忍んだ。彼にとつては、この道程は決して變化を意味したのではなくて、彼の以前の信念の、一つの確證を意味したのであるが、この過程を理解することは出来なかつたのである。

一八六五年五月、デッサウで開催され、彼の異教徒の戦と百三十七番のプサルムがプログラムに載つてゐた第四回音楽家總會に、リストは出席しなかつた。そして又、ミュンヒェンに於けるトリスタンとイゾルデの初演にも出席しなかつた。が彼は八月の初めに、音楽學校創立二十五周年を機に開催される、第一回ハンガリア音楽祭に参加して、其處で自作の聖エリザベート初演の指揮をするために、ベストへの招待に應じた。リストはベストでは市立僧侶官邸にあるシュウェントネル僧院長のところに泊り、親切にもてなされた。八月十五日に聖エリザベートの初演が行はれた。共演者の數は五百を算し、聴衆の數は二千人を超えた。喝采は非常に激しく、批評の側からも、受けは非常に好かつたので、即座に二十二日の再演が決定された。「上演は賞讃に價するものでした。合唱と管絃樂のムムバは、或る種の神聖な熱意を以て、その課題を果し、或る箇所で、熱狂さを表現して餘すところがありませんでした。特に、若いパウリ・マルコウィクス夫人に依つて、壓倒的な感情を表して唱はれた、エリザベートのパートは、完全にその榮光を表しました。」とリストは侯爵夫人に報じてゐる。ハンス・フォン・ビューローとコジマと、ウィーンのエドアルド・リストは、その夫人とアウグスツ男爵とを伴つて、この祭典に急行した。續いて八月十七日に、ハンガリア作曲家だけで、即ちエルケル、モツソニー、フォルクマン、リストの大演奏會が行はれ、ダンテ交響樂と最後にラコツツイー行進

曲の指揮を受持つた。ダンテ交響樂は、第一樂章全部を繰返すことを求められた程の感動を惹き起した。彼は感謝の意を表すために、レメニーやビューローと共に、告別演奏會を催し、彼は自分で、二つのフランツィスカの傳説と自作のアヴェマリアと愛の歌とを演奏した。収益は慈善の目的のために割當てられたのであるが（その三分の一はレオポルドシュタットの新しい教會のために）、一萬二千マルク以上を算した。グラン大寺院の創立日に、リストはビューローやシュウェントネル僧院長と共に、大僧正を訪問しようとして、そこへ旅行した。この旅行から機會を與へられて、彼はオーストリア兩陛下のための戴冠式ミサ曲の作曲を、一八六七年に完成した。九月二日から八日まで、リストはビューローやレメニーと共に、スツェグスツァルトに、友人アウグスツを訪れて滞在した。此處では日曜の夜、彼のためにセレナーデが獻ぜられ、約八千人の人々が家に集まつて來た。リストはピアノを開け放たれた窓に引寄せ、レメニーとハンガリア狂詩曲を弾き、そしてビューローと二人でラコツツイー行進曲を弾き、大衆を恍惚とさせてしまつた。九月十日に、彼はローマへの歸路についた。彼はエリザベートの總譜を、前以てビューローに渡してしまつた。といふのは、彼は差し當つてそれを出版する意志はなく、これからの上演は總てビューローの指揮の下に行ふこととしたからである。彼はそこで、エリザベートに關する多くの申込みを先づ斷つた。理由は次の通りである。即ち「人々の云ふやうに、近來私の態度の中に現れて來た幾分かの上は、大體以下のやうに理解されてゐます。即ち、數年の間リストは、その交響詩や、ミサ曲やピアノ曲に於て、唯混亂せる非難すべきものを書き誌して來た。そしてエリザベートに於て、彼は幾分物の分つた態度を示してゐるやうに見える。だが……然し私は決して、私の作曲に與へられた懲罰を、信すべきもの、正當なるものとして受けようと思つてゐないので、エリザベートの、表面上緩和された状態に對して輕卒に賛同することは、私のためにならぬことだと思ひます。」



ローマに於て、リストはオラトリオ・キリストの仕事を再び取り上げた。その中の一曲、スターバト・マーテル・スベツイオーサは、一八六六年一月の初めに、聖マリア寺院で唱はれ、そして同月、ローマのダンテスカ會館の開館のための、リストの主催の下に創立された管絃樂團の第一回演奏會で、彼のダンテ交響樂が初めて上演された。聴衆はそれをどう考へてよいかわからなかつた。人々は、成る程味はあるが、形式のないものだと思つた。二月にリストは、バイエルン王の招待を受けた。王は同月二十四日に、ビューローの指揮の下に、エリザベートの特別演奏を命じたのであつた。だが、リストは前々から、三月にパリへ行くと云ふ約束をして居つたので、それに應ずることは出来なかつた。エリザベートはミュンヘンで三回演奏された。それから暫くして、タツソーとメフィストワルツとファウスト交響樂との演奏會が續いて行はれ、「一曲一曲毎に、昂められて行く熱狂を収めた。」王様は感激させられて、リストにミカエル勳章を贈つた。

三月五日にリストは、デュッセルドルフ市長の招きに應じて、聖ユースタツシュ寺院に於て催されるグランのミサ曲の演奏に出席しようと、パリに入つた。非常に平凡な表現のために、結果はまち／＼であつた。そして新聞批評はその作品を論駁した。ベルリオーツはこの晩のことに關して、ジュルナル・デ・デバに掲載された批評を、その友人ドルティグに見せた。ドルティグは否定的な判断をしてゐたのであつた。「私からこの苦い盃を取り去られるやうに」と、彼は特にそのミサ曲に關して書いた。ベルリオーツ自身はそれを「藝術の否定」だと云つた。數日後にエラール會館で、リストの或る交響詩が演奏された時には、彼は仰山らしく會場から走り出してしまつた。といふのは、彼にはその交響詩が「音樂とは反對なものと思はれた」からである。そこでリストは最も著名な批評家を自分の所へ招いて、總譜を手持ちながら無定見なる攻撃に對して自分の作品の正しいことを主張した。人々はこのミサ曲を實際聞いたも

のより以上に批評するやうになつた。リストが如何に眞面目に藝術のことを考へてゐたかをよく知つてゐたに違ひなかつた幼な友達のドルティグさへも亦、この聲樂曲を他の人達と同様に云々することが彼の心を痛めなかつたといふことは疑はしいと思つたけれども、リストはこの事態にそんなに重要な意味を置いてゐなかつたやうである。ミサ曲をもう一度やつた時にはもつと受けがよかつた。リストはパリ滞在中は、又もやオリヴィールの所に、而も彼の母がほんの最近まで住んでゐた部屋に宿泊した。母のリスト夫人は、その息子が作曲家としてこのやうに現れて來た時、息子の最初の勝利の場所にはもう生きてはゐなかつた。彼女はその年の二月六日に、七十四歳で肺炎のために倒れた。オリヴィールとその弟は、彼女の最後の時まで忠實に介抱したのであつた。リストはパリに於て再び急速に社交生活の渦中に引き込まれてしまつた。彼が一僧侶——一定の役なきカトリク僧になつたといふことは、僅かに彼の引力を強めたかに思はれた。彼はダグー伯爵夫人をも二回訪問した。この機會が交際の最後の分裂の時となつた。彼女はこの度も前以て、新聞紙上で彼女の婿に書かせて、リストの事を書き立てた。ナポレオン三世からリストは繰返し謁見を賜はり、數々の高貴な賜り物を戴いた。

リストはパリからアムステルダムに向けて小旅行をした。そこではビューローが、四月二十五日に演奏會を開くことになつてゐたのだつた。この月の経緯をリストは侯爵夫人に對して、次のやうに述べてゐる。「四月廿五日水曜日、私がヴァイカンに入つて來た記念日に、『十三番のプサルム』と二、三のピアノ曲とで大演奏會が催され、その中で『大波にもまれる聖フランツィスクス』と、私の管絃樂に編曲したシューベルトの幻想曲とが、ビューローによつて演奏されました。聴衆は恐ろしく一杯でした。實に素晴らしい出来でした。そして喝采は數分間止まなかつたので、私は感謝の意を表すために舞臺に登りました。かうして人々は、オランダ語で『吾等が尊敬する藝術、吾等の英雄フ



ランツ・リストに』と銘の入つた非常に美しい、どつしりした銀の月桂冠を、私に贈りました。」四月二十七日にピュローの第二回の演奏會が、前奏曲とピアノ曲とで催され、そして同じやうな成功を収めた。そしてダランのミサ曲の素晴らしい演奏（それは既にアムステルダムでは八回目であつた）を以て、二十九日に、非常な効果を収めた滞在は終つた。オランダ王妃の懇望に應じて、リストは歸還前に、今一度ハーグで王妃に御機嫌伺ひをし、最も丁寧なる御言葉を賜はつた。リストはパリに尙五半月ばまで滞在して、有力なる個人的な交際仲間の中で、自分の作品を理解さすやうに熱心に努力した。この滞在の眞の目的は、パリに於て作曲家として、將來に有意義であると思はれるやうなことを遂行することであつた。だが結果は、ほんの僅かしか期待に副はなかつた。

リストはローマに歸つて後間もなくヴァティカンを去つて（六月二十二日）、再び前の住居マドンナ・デル・ロザリオに移つた。といふのは、ホーエンローエは憎正に敘任されて、アルバーノに移住したからである。ヴァティカンの彼の居間は彼の後繼者に引渡さねばならなかつた。マリオの丘に在つてリストはオラトリオ・キリストを完成した。十月一日に、彼が數年間手がけて來た、この大曲は完成した。それから彼は直ちにハンガリアのための戴冠式ミサ曲を始めた。戴冠式に於て、彼の作品には、僅かの時間しか與へられることが出來ず、そして當事者は彼に「出來るだけ短い時間といふ制限」を條件として持つて來たので、非常に永くかゝるクレドを止めて、獨自の和聲をその下に附けたアンリー・デュ・モン（一八一〇年から八三年まで）のロワイヤール・ミサ曲から、簡単な定旋律を持つて來た。三週間でその作品は完成された。だが十一月二十二日には既にリストは、又もや彼の住居を變更しなければならなかつた。彼は今度はサンタ・フランチェスカ・ローマーナ寺院に移つた。そしてその寺院は、コンスタンティンの大伽藍とテイトスの凱旋門との間にあつて、大廣場とバラティンの丘の素晴らしい眺望のきく所であつた。金曜日の午前中に彼は

此處で、友人と、大抵はイタリア人であつたが、二、三の弟子とを引見した。このマチネーに何時も參加する者達はスガムバッティと、イタリアに於けるドイツ音楽に大きな貢獻をしたピネルリー三人兄弟、彼等の伯父ロマキオッティ、デンマーク人、ランクリーデとクララ・シューマンの女弟子、ナディーネ・ヘルビヒであつた。スガムバッティは、ダンテ會館（フレッツァ街）で開催され、そして就中ローマ市民に初めてベートーヴェンの交響曲の認識に至る道を招いたところの古典的演奏會をその時指揮した。リストは前稽古や演奏には大抵出席した。

とかくする中に、戴冠式ミサ曲の演奏に關する色々の事柄が、囂々と問題になり始めて來た。そして此の上演は嘗てのダランのミサ曲と全く同様な種々の困難に突き當つたのであるが、リストの友人達の骨身を惜まぬ斡旋と、この作品に好意を持たされたエリザベート王の、上演に關する個人的な調停とのためにそれは可能となつたのであつた。云ふまでもなく、リストは一段と高い立場から、如何なる誘ひにも應じるやうなことはなかつた。反つてそこには、彼の祖國の首都に戴冠式祝典のために、彼を呼び寄せたところのハンガリア國立音樂學校の指導といふことがあつたのである。リストは六月四日に到着した。彼はローマ法皇の個人的委託によつて、帝冠を戴かれる陛下への高貴なる贈物を持參した。皇帝は彼に謁見を給ひ、この際御自身のフランツ・ヨーゼフ功勞章といふ騎士十字架を授けられた。戴冠式後、彼は陛下の御宴會に招待された。六月八日に執り行はれ、そしてその間に於てハンガリア戴冠式ミサ曲はその器樂の聖餐式曲と一緒に、禮拜と共に初演されるといふことになつたのであるが、その戴冠式にはリストは不思議なことに、何の招待も受けなかつた。そこで彼は音樂家達に交つて合唱に入り込まねばならなかつた。アブラニーの述べてゐるやうに、かうして民の聲は、彼とハンガリア藝術に、一民族の生命の中には稀にしか現れて來ない程の満足を與へたのであつた。そしてこんなことがあつた。リストは王様より先に市立會堂、戴冠式の行はれた丘と宣誓



式の行はれた廣場の近くにあつた彼の住居に到着せんがために、既に王冠を戴いた王様とその従者がオーフェンの城から出て来るのを待たなかつた。リストは徒歩で歩いて行つた。オーフェンのマティアス教會から吊橋を渡つて宣誓式の廣場まで、そして廣場では宣誓式の行事が行はれる筈であり、十萬の人が人垣を作つてゐた。無数の棧敷は上流の市民に占められてゐた。誰もかも戴冠式の行列を待ち設けてゐた。その時烈しい萬歳の叫びが起つて來た。そして行列は長々と續いて來た。皆祝典の行列が近づいて來たものと思つた。がそこに見られたのは、誰も通つてゐない祝典の街路の中央に、祭りのための黒い僧服を身につけた巨匠リストのこちらにやつて來る姿だけであつた。そして彼は一步々と考へ込んだやうな風に、期待外れのした、氣乗りのしない歡迎に會釋をしてゐた。——二、三日後にリストはローマに歸つた。だが七月の終りには、もうワイマール大公の招きに應じてテューリンゲンに赴くために、彼は再びそこを後にした。このローマ滞在の短い間に、オラトリオ・キリストの斷片的上演がスガムバッティの指揮の下にダンテ會館で行はれた。聴衆の感銘は、さして深いものではなかつた。

七月二十九日にリストはワイマールに到着して、再びアルテンブルグの彼の住居に入つた。侯爵夫人の數室以外、家の部屋は皆貸してあつた。今度は侯爵夫人の部屋も他の目的のために宮廷から懇望された。そのためにリストは彼の「青い部屋」を永久に渡したまゝでゐなければならなかつた。だがリストは、遲鈍な、不明瞭な口實の下に隠れた侵入を超越して喜んでその部屋を斷念した。アルテンブルグは彼の今度の滞在の最後の時に明け渡され、ワイマールの地下室に集められてゐた家具や、貴重な品々等の種々の物品は公けに競賣に附された。——リストはワイマールで聖エリザベートの練習を行つた。それは八月二十八日に、ワルトブルグ城の築城八百年記念祭に、その地で演奏される筈であつた。だがその前に彼は二十二日から二十五日に亘つて第五回音楽家總會の催されるマイニンゲンに赴い

た。祭典總指揮は今度はブレスラウのレオポルド・ダムロッシュであつた。この音楽祭は凡ゆる従前のものよりも優れてゐた。そして參加したものとみんなに、最大の満足と與へた。エドアルド・リストはウィーンから、オリヴィールはパリから、文化史家・フロレンスのヒルデブランドの妻であり、そこで「ケルビーニ協會」を創設して、ドイツ音楽と同時に、リストに對して活潑に共鳴してゐたローソー夫人が到着し、そしてベーター・コルネリウスはマイニンゲンで、リストが非常に喜んでゐるのに出會つた。巨匠リストは、彼が未だ僧職に就かない時から僧衣を身につけてゐたのであるが、僧衣を見て吾々が感じた何とも云へない當惑は、この時すっかりなくなつてゐたし、吾々が昔と變らない精神的に何時も若々しい同情を持つた、思ひやりのあるリストを、彼の中に見出したときには、もうすっかりと氣持がさつぱりとした、彼が何か變つてゐるところがあるとするれば、それは唯彼の本性を完成させ、そして淨化させた心の平安の中にだけ在るのである。そして此の平安は、彼が過去數年間に得て來たものであつた。自分のものに反對なものをやつつけたり、激して罵つたりすることは、もう彼には全然なくなつてゐた。彼はもはやそんなことはないだらう』と、むきになつて怒るやうなことはなく、自己自身と激しく戦つて獲得した親しげな此の僧衣は、彼の本性をだまつても云ひ表すものである。そして次の言葉の中に、充分それが納得される。『そんなこともあるでせう』と。このやうにコルネリウスは、彼がリストとの再會で受けた印象を述べてゐる。

リストはザルツング教會合唱團によつて唱はれる、教會演奏會の二十三番のブサルムと祝福讃歌、三日目の室内樂の夕べに於ける彼の二つの物語曲（ハインツ嬢の演奏に依る）、最後の演奏會に於ける山嶽交響樂によつて、音楽家總會のプログラムを獨占してゐた。そして彼は祝典終了後、マイニンゲン大公から騎士團司令官の十字架を戴いた。リベンシュタイン温泉場への小旅行に利用せられ、そしてその夜更に室内樂の夜會が催された休息のための一日の



後、續いて八月二十八日に聖エリザベートの上演を以て、ワルトブルグ音楽祭が行はれた。主役はミュンヒェンのディ  
ーツ夫人が唱ひ、リストは自分で指揮した。リストの最もよく知れ渡つたこの作品の効果は、ワルトブルグ會館の歴  
史的環境にあつて、正に壓倒的のものであつた。そして熱狂は、宮廷儀禮の制限を皆突き破つて捲き起り、何時まで  
も終りさうもない歡呼の聲となつて行つた。翌日、聖エリザベートはミューラー・ハルトウングの指揮によつて、アイ  
ゼナハの國立教會で繰り返された。リストは尙十四日間、大公の許でウィルヘルムスタールに滞在した後、ビューロー  
を訪れるためミュンヒェンに赴いた。

ビューローの家の家族關係は、破局の直前にあつた。既に久しい間悲劇的なものとなつてゐたハンスとコジマの結  
婚生活は、もはやそのまゝずつと續けることは出来なくなつた。コジマは既に數年來、自分の胸中の情熱を込めて、  
ワグナーの方へ行かうと努力してゐた。そしてワグナーは、自分に永い間缺けてゐた家庭といふものを與へ、そ  
して自分にとつてまた精神的に近い協力者となり、戰友となるべき婦人を、彼女の中に遂に見出さなければならなかつ  
た。ビューローの健康は、この出来事によつて永遠の傷手を負ひ、二人の關係はお互に離れて行かねばならなかつ  
たのであるが、そのときには事態はもう餘りにも遅過ぎた。それ故、今となつて必要なことは、唯世間に對して妥協  
の道を見出すことだけだつた。そこでリストは、ほんの一寸した口實の下に計畫されたのであるが、全く秘密にトリ  
ブセンのワグナーを訪れる小旅行を企てた。そしてワグナーはミュンヒェンの破局以來、晴々しい氣持ちで、此處  
を逃避の場所と定めてゐたのであつた。リストはお晝過ぎ間もなくトリブセンに到着し、夜遅くまでワグナーの所  
に居つた。その時音楽が行はれた。リストは名歌手の總譜を全部、初見で非常に素晴しく演奏し、ワグナーは、そ  
れについて唱つた。三幕を過ぎて、リストはもうすっかり魅了されてしまつた。——彼は驚嘆と魅惑の餘り、この場

所をもう一度演奏しようとして、止めた時に、ワグナー以外に誰も、これを作ることは出来ないと言明  
した。十二時頃、寝なければならなかつた。といふのは、リストは次の朝五時頃には、もう旅を續けて發たねばなら  
なかつたからである。彼の訪問の目的と内容を、彼はその時は非常に秘密にして居り、ミュンヒェンに歸つた時、唯次  
のやうに云つただけだつた。「私はワグナーの所にゐました。私はさうするより他仕方がなかつたのです。だがこ  
の氣持は、セントヘレナに流されたナポレオンのやうなものなのです。」今日では、吾々にとつてこの突然の訪問の  
原因は、もう少しも秘密ではない。ワグナーとビューローの家庭のごたごたの噂が、永い間話題の對象であつた。  
人々はコジマが來春、人目に立たないやうに別れ得るやうに、ビューローの許に、尙二三箇月は靜かに辛抱した方が  
よいといふことに一致してゐたのだつた。だがそんなに永くは續かなかつた。といふのは、コジマは子供達と一緒に  
ビューローの留守に斷乎としてワグナーの許、トリブセンへ移つたからである。リストもそれに同意した。そこで  
當分の間は、自分の娘とも、ワグナーとも交際することは、彼にとつて非常に困難なこととなつて行つた。——

リストは一八六七年十月の終りに、再びローマに出て來たが、その冬の數箇月間は社交的な生活が彼を煩はし、仕  
事のことを考へることも出来なかつた。メキシコのマックス皇帝の悲劇的な結末の印象に基いて作曲された、男聲の  
ための鎮魂曲、次の一年中の仕事の唯一の收穫であつた。「私は大衆の淺薄極まる好奇心の對象となりながら、哀れ  
な、何の收穫もない冬を無爲に過しました。製造者自身が、クリスマスの日私の所に持つて來てくれた豪華なアメ  
リカ製のピアノは、段々數を増して來る訪問客を斷る口實の役目をしました。」四旬節の頃と同様に、謝肉祭にも、  
リストはこのアメリカ製のピアノを弾いて聽かせないが、然しそれを聽かねばならないといふことが、訪問客の間で  
返り言葉となつた。「かうしてその素晴らしい樂器は、私にとつては全く重荷そのものとなりました。」と、リストはワ



イマール大公にこぼした。

七月にデッサウで催され、そして如何にも藝術家の合唱のやうに彼の十三番アサルムを演奏した音楽家總會には、彼は、丁度その時ローマに於ける自分の活動の解決に抑へられて、残念ながら出席することが出来なかつた。彼はこの時、もうローマから餘り遠く離れまいと思つた。そしてこの年には、唯近邊へ、而も友人の僧侶ソルファネルリと一緒に旅行しただけであつた。「私達は岩の中に掘られた寺院のある未開の浪漫的な土地、マドンナ・デルラ・ステラへ向けて巡禮と共に旅を始めました。そして其處は私の友人の祖父が、約八十年前に隱者として死んだ所です。そこから私達はアシッシへ向ひました。」(そこにはリストの守護の聖人が住んでゐたのだつた)。「そしてロレットへも向ひ、そこで私達は二三日間、立派な僧侶である彼の父の所に留りました。最後に、彼の叔父フェニルリ伯爵は、私達の願ひを聞き届けて下さり、七月十四日から八月三十日まで、アドリア海岸のグロッタ・マレで懇ろなる待遇<sup>もてなし</sup>を受けました。私達の心と精神の主なる仕事は或ひは海邊に於て、或ひは私達が途中出會つたシトロイヤオレンヂの林の中で、私達の祈禱書を一緒に讀むといふことでした。」ローマに歸つた後、彼は去年の冬と同様な防害を避けるためにデステの別荘に引き返した。此處での彼の主な仕事は、コッタ版で出てるウエーバーとシューベルトの全集の校訂と彼のピアノ練習曲「ピアノリストの練習と技術」の執筆とであつた。ライプツヒのカーント版で出てる、聖エリザベートの修正も久しい間の願ひだつた。リストは、その聖エリザベートを皇帝ルドウィヒ二世に捧げた。彼はルドウィヒ二世にはその例を見ない程の、藝術に關する斡旋のために、最高の共感と尊敬とを懷いてゐた。その上、この理想的な素質のある君主は、リストが以前、あのやうに進んでワイマールで實行しようとした、その計畫を理解し凡てを信用して實行に移させようとした。現在ルドウィヒ二世が、ワーグナーに對するやうな、先の見える、而も獻

身的な後援者は、その當時彼には一人もなかつたのであつた。

リストは段々と、カトリック教會音楽を再び救済しようといふ彼の盡力は、皆權力あるローマの僧侶階級の退嬰的な反對に遭つて、水泡に歸したといふこと、そして人々は、彼の作品をイタリアに於てどういふ風にして行つたらよいかといふことを完全に分つてゐないことを知つて來たので、この際友人の招待に應じてドイツへ歸ることが一番よいと思つた。彼は、再び音楽界と密接な接觸をとつて行き、そして彼自身、或は他の人の興味ある作品の演奏から、自分の創作の刺戟を得ることの必要を感じた。そこで彼は遂に、彼のローマに定住することを止めて、毎年永い時をドイツで過し、唯侯爵夫人のために、出来るだけの隱遁の生活の中に、自分の仕事に捧げられるべき一年の中の二三箇月をイタリアで過すことに決心した。ローマ滞在中(一八六一—一八六九)にも、これと云つて一つも素晴らしい收穫は示されなかつたといふものの、その年には、將來にとつて重要な意味を持つ作品、特にオラトリオ・キリストが出來たのであつた。アルテンブルグ時代には交響曲作曲家リストは、一新軌道に乗つて來たことを示したのであつたが、それと同様にこの年には教會作曲家として、彼は圓熟の域に達したのであつた。



一、この期間の主なる出来事

リストがまたもや、毎年二三箇月をワイマールで過すといふ約束をした以上は、そこを自分にとつて再び愉快なる住居にし直すといふことが問題であつた。アルテンブルグは引渡されて、他の人の所有するところとなつた。といふのは、リストにとつても、このアルテンブルグは餘り適當でなかつたからである。そして選ばれたのは宮廷庭園で、宮廷庭師の住んでゐた公園の入口にある小さな田舎びた家であつた。此處は彼のために用意された三つの小さな部屋と一つの女中部屋のある二階になつてゐた。ゾフィー大公妃は、御自分で色々と氣を使つて、この尊敬する巨匠の住みよいやうに家具を調へたのであつた。實にそれは最初は、たゞ或る夏の別荘を思はずやうなものだつた。そして公園の綠蔭への素晴らしい眺めを持ち、住宅を取り巻いて啼き廻はり、大抵早朝五時頃に起きる巨匠の眼を覺まさした小鳥の唄の聞える部屋々々は、かうした環境をそよるに充分なものであつたが、永く住むのには、就中冬には耐へかねるものであつた。殆ど六十歳にもなつて、もはやこのやうな住ひは少しの満足も與へることが出来なくなつた。人の住宅が必要であるといふことは、全然無視されてゐたのだつた。例へばこの住宅には炊事場が一つもなかつた。そしてずつと後になつて、彼の健康のために料理屋から取り寄せた食事では満足することが出来なかつた時、そのために

非常に困つてしまつた。そこで料理するために時間も場所も足りなかつたので、大抵は罐詰類から成つてゐた彼の食事、一階の小さな炊事場で、彼の家政婦パウリーネによつて作られねばならなかつた。

註　今のアベル夫人はアルテンブルグで侯爵夫人の娘として生れたのであるが、それからリストの死に至るまで、リストの家政婦として宮廷に住み、今日も尙リスト博物館の番人として、そこに住んでゐる。

晩年になつて段々増大する老齡のため、勞苦と共に、自然もつとはつきりと認められるやうになつて來た愛する女の心遣ひと心安らかな住居のないといふことは、今や激しく身にこたへ始めて來た。給金を拂つて傭つた見知らぬ召使に助けられて、リストは一日中何にもすることなく、その邊りを歩き廻り、夕方になると彼の淋しい家に歸つて來るのだつた。彼の弱々しい、感受性の強い本性は、年老いた獨身者の運命といふものを、他の凡ゆる人よりも非常に痛烈に感じなければならなかつた。ゲザ・チヒー伯爵は、大抵あつさりした好機嫌に隠されてゐるリストの内面的な悲歎をはつきりと照し出した或る出来事のことを述べてゐる。即ちリストは或る晩、招待されてゐたのだが、その家の主婦が病氣してゐたので、社交界はぎり／＼の時間になつて取り消されてしまつたのである。チヒーは、リストが見られるのは誰一人頼るところのない年老いた藝術家の運命なのです。……召使には暇をやりました。今は私の家には誰もいません。燵は冷えきつて居り、凡てのものは陰氣に曇つてゐます。さうなんです、私達は色々なお祝ひごとや、明るく、きら／＼と輝くやうなサロンは持つてゐますが、決して安らひの所を持つてはりません。心に感激を與へる多くの音が鳴り止めば、後は沈黙です。」チヒーは、彼をその家に導き入れて、話相手をしてやらうと彼の腕をとり、熱い涙をその手に注いだのであつた。……



リストが今一度、ワイマールに入つた時（一八六九年一月半ば）には、首都は再び、以前とは全然別な仕方ではあつたが、思はざる飛躍をして居つた。たとへ彼の現れたことが影響を與へたにしても、彼はもはやこの町の公けの音楽生活の中に入らなかつた。彼の作用は丁度ドイツ音楽界に對しては、磁石のやうなものであつた。そして凡ゆる人は、彼の助言を求め、自分の作品や草稿を彼に調べて貰ひ、そして彼の教へを受けようと、我先にとやつて來た。ワイマールは、音楽のメッカとなつた。そして若い音楽家達は、こゝで藝術の洗禮を受けんものと巡禮の旅をしてやつて來た。確かに、彼の作曲家としての創作を段々に後方へ押しやつたりリストの教師としての活動の擴がりは、一八六九年から始まる。「私は、此處では二三頁の樂譜を書く時間しかない程です。然しそれもむづかしいやうです。といふのは、既に六人のピアノリスト達が、ベルリン、ハムブルグ等から來てゐるからです。間もなく十二人にはなるでせう。そして尙、名聲と幸福を得んと熱心に努力してゐる多くの諸君がやつて來るでせう。」

リストがワイマールに入ると直ぐ、宮庭庭園では最も活潑な生活が展開された。成長しつゝある若い人達は、その教へを聽かうと、この宿舎の周圍に押し寄せて來た。夏には大抵四十人から五十人の若い藝術家達が集まつた。リストは、もう本當のレッスン等は出来なくなつた。宮庭庭園の音楽には、見る目も美しいベヒシュタインのグランドピアノが置いてあつた。製造者が、リストに對する懇懇の情から贈つたものであり、そして、毎年新しいのを取り換へさせたのであつた。一週間三回、四時から六時まで、弟子達は演奏して見せるためにやつて來た。リストは食事の後には、何時も休息した。そしてその間弟子達は、巨匠の白い頭が窓に見えるか、或は召使が音楽室の戸を開くかするまでは、公園若くは廊下に集まつてゐた。皆演奏しようと思ふ曲の樂譜は机の上に置いた。リストは近寄つて來て何れかを選んだ。彼が、彼自身の作つたものを手にした時は、彼は「誰がこのつまらないものを弾くんですか」と、屢々

云つた。さうすると「私です。先生」といふ聲が聞えた。彼はその時、或る人には冗談半分に横面を殴つて、「ねえまあ聞かせてごらんさい」と云つた。フェリックス・ワインガルトナーも、かういふ「レッスン」に出席してリストと一八八三年に初めて會つたのであるが、かうした「レッスン」のことを次のやうに記してゐる。「第一印象は、新參者を實に狼狽させるやうなものであつた。階級のところで、既に私は烈しい叱り聲を聞いた。扉が開かれた時に、私はリストが多くの人々に取り巻かれて、ピアノの前に立つてゐるのを見た。そしてピアノには、青白い青年が腰かけ、彼は實にまづい演奏をしたに違ひなかつた。といふのは、リストはその青年を見下ろして殘酷に懲らしめてゐたからである。『私が君達の汚れた洗濯物を洗ふために居るのだと思ひますか』と、非常に激しく叫んで、樂譜をグランドピアノの上に投げ棄てた。實に下劣な餘興の後でも、私は曾てリストが、吾々の最初の面會の時程怒つてゐるのを二度と見たことがなかつた。その青年はホウ／＼の態でピアノから逃げ出して行つた。そしてリストは激しく振り返り、偶然に私の上に視線が落ちた。すると直ぐ彼は靜かになつて、訝かし氣に私を見つめた。私は自分の名前を云つて、私の手紙のことを話した。『よろしい／＼』と彼は呟いて、親しさを手に手を差し出した。私は、彼が見知らぬ客に對して自分の不機嫌さを、そのやうにも急速に鎮めてしまつた克己心に驚嘆した。今や私は彼をつく／＼眺めた。私が彼の肖像畫によつて心に描いてゐた、すつきりとした脊の高い姿は、もはや見えなかつた。彼は肥つて居り、そしてその背中はかなり曲つてゐた。そのため彼は、ほんたうよりも小さく見えてゐた。涼しさうな眼が力強い頭から異様な程に光り出て居り、その頭からは長い雪のやうな白い毛髮が房々と垂れてゐた。足どりは少し曳きずつてゐた。その時、一寸したつまらぬ演奏が行はれ、リストは注意を與へて矯正しながら止めさせた。時々、彼は自分で二三小節弾いた。そして他の人では指使ひが崩れてしまふやうな技巧的な困難さを、彼が如何にも無造作に演奏して征服して行



くのをみるといふことは、記憶すべきことであつた。演奏の撰擇や順番を彼は自由に決めた。そして彼の注意は短く適切であつた。素晴らしい演奏が行はれたときは、彼は心から有頂天になつて褒めた。彼は屢々、缺點を指摘するのに、皮肉の中にかくして云ふのだつたが、然し誰も彼のいふことを本當に理解する程細かく聞いてゐる人はゐなかつた。そして實際は辛辣な批判なのであつたが、それを褒めたのだと思つた。彼がいら／＼させられねばならなかつた時には、もう無能力といふことは、はつきりと非常に目立つて居らねばならなかつた。がその時でさへも彼は度々、否定するのでも、少くとも、見かけは、和らいだ言葉であるのだつた。嘗て非常に禮儀正しい若い婦人がショパンのバラードを全く素人臭く弾いたことがあつた。リストは激昂して歩き廻り、『なんだ、こんなもの！』と、大きな聲で呟いた。私達は皆、次に何が起るのかと期待してゐた。彼女が弾き終つた時、彼は親しきうに彼女のところに行つて彼女の髪の上に祝福するやうに手を置き、額に接吻した。そして低く『貴方は直ぐ結婚なさい。可愛い子よ——さやうなら』と云つた。とう／＼私は演奏する番になつた。私は後程『幻想の繪』といふ標題の下に出版されたピアノ小曲集を持つて來てゐたのだつた。第一樂章の豫期されなかつた和聲進行は、リストをして私に勇氣を起させるやうな『ブラボー』といふ言葉を叫ばしめた。そして彼は後の箇所でも、それを再び繰返した。三番目の曲では私は左手のあるパッセージで弾き損ねた。彼は私の手をとりながら、『しくじつちやいけません、そんなことをするのはたゞ——音樂學校だけです。』と云つて、演奏をさへぎつた。そして私はそこをもう一度弾かねばならなかつたが、今度は旨く行つた。音樂學校では、リストはよく云はれなかつた。そして彼は凡ゆる機會に、この組織に對して皮肉をいひ放つた。そして殊に好んで『腐つた卵料理』といふ尊稱を、音樂學校に與へてゐた。

教授の仕方については、ベルンハルト・シュターフェンハーゲンが次のやうに語つてゐる。「リストの氣持はなか／＼

豫測し難いものである。然し彼が一度誰かの性向を掴むと、殆ど決してそれを再び見失ふやうなことはないと思はれる。これと同様に、然し彼に共鳴しない人々は、彼に近寄るといふことは、確かにむづかしい。否、殆ど不可能なことである。彼の嫌ひな人、或ひは彼に無關心な人（それは四角ばつた——凡庸な才能の人達なのだ）は非常な危険な空氣を自分の周圍に持つてゐる。そして、皮肉の霰が降るのである。何故なら技巧は、彼には少しも尊敬の念を起させず、彼はそれを簡単に自明なものと思つてゐるからである。彼の教訓は皆、折にふれての技巧上の忠告と共に、曲の精神的內容にまで及んでゐる。物凄い技巧家であつても、同時に音樂家としてはつまらないやうな人は、丁度根本的に缺點のある弟子のやうに虐待され、そして音樂學校（特にライプツヒヒとストットガルト）に行くやうに命ぜられた。しかも人間が出來てゐれば、技巧の點に於ても吾々は非常に學ぶところがあるのである。だが、吾々は巨匠の技巧的神祕を觀るためには、人間が出來上つてゐなければならぬ。そして特に褒める場合には、彼は忠告を與へながら／＼と歩き廻るのである。彼は、バハ、ベートーヴェン、ショパンには實に過度と思はれる程の敬虔さを持つてゐる。バハ、ベートーヴェンを同じやうに、何でもなく彈くのであるが、——偉大で而もそれにも拘らず、詩と浪漫性に充ちてゐる。彼は常に自分の弾いてゐるのを感じてゐる。吾々の中の一番若い人でも、彼がベートーヴェンに對して抱くやうな空想を抱くことは出來ないのである。彼は然し、凡ての所謂形式張つた『作られた』音樂に對しては、抑へ難い嫌惡を懷いてゐる。彼の最大の酷評は『貴方は批評家になるのによく適してゐます。』といふ言葉である。

アルテンブルグの嘗てのやうに、宮庭庭園でも毎日曜毎に、十二時から一時までマチネーが催された。若しアルテンブルグでは、音樂的な催物を以て社交的交際の團體があり、之を開くために皆獨自の特徴を表したとするならば、



人々は此處では限つて純粹の音樂の享受をしたのであつた。その中にはワイマール大公がゐたのであるが、選り抜き  
の聽衆が何時もこの演奏會に出席した。開會には大抵新しい室内樂の作品が紹介され、リストは屢々自分で共演した。  
それから弟子、或は居合せた藝術家が演奏した。このマチネー以外には、勿論八〇年の初めまでつゞいただけだつた  
が、時々リストの所かマイエンドルフ男爵夫人の所で、小さな音樂の社交界が行はれた。之に反して最後の年に、ず  
つと續けて準備されたのは、「湖畔のシュタール宮殿」に於ける日曜の午後であつた。そしてこの名は、リストが戯れ  
に名づけたものだつた。彼の友人のアドルフ・シュタールの二人の娘は、アルテンブルグでもう彼の女弟子となつて  
ゐた。そして父の死後ワイマールの白鳥の湖の畔にある會計官ハイの家に居を定めて音樂院を開いて居つた。リスト  
は彼女達にとつて、常に父のやうな、友人であつた。そして、その女弟子達にも激しい關心を示してゐた。日曜の午  
後はいつても彼等の家で音樂が行はれ、そしてこの夜會は間もなく、ワイマール以外にも一般に知れ渡つて來た。

リストは若い人達を、身の廻りに置いて置くのが好きだつた。そして青年達やお嬢さん達と、自由に愛想よく、愉  
快に交際した。そしてワグナーが云つたやうに、彼の「太陽のやうな性格」は、到る處に感ぜられた。彼の最も親  
しい人との時折りの不和は、忽ちにして解けた。といふのは、彼は自分が正しいことに對して、ほんの一寸した誤り  
を犯したと知つた時には、どうしても反抗することが出来なかつたからである。「若者達」の生活は、一樣に非常に緊  
張した仕事をする場合には、著しくポヘミア的のものであつた。そこには酒を飲むことと、必ず起る嫉妬と子供らし  
い陰謀とを持つた戀愛があつた。——凡てのものは、調和なき自然のまゝだつた。ワイマールの俗物根性を映して、  
此の生活は自然と非常に悪いものになつて來た。そこでリストに最も親しい人の前でさへも、かういふ惡評を受ける  
やうになつた。非常に大勢の中には、未だ往々にしてリストの非常な善良さを惡用した下品な輩もゐたといふことは

成程悲しむべきことではあつたが、よく考へて見ればそんなに不思議なことでもないのである。事態はリストが餘り  
にもひどい善良さと、弱々しきさから（然し、それは後年さうであつたに過ぎない）、「弟子達」を宮庭庭園に入るこ  
とを許したといふ違反よりも、もつとうるさいものとなつてゐた。かうした人々は、一般にピアノを弾くことが出来  
ず、何か高位高官の紹介状を持つて來て、先生にうまくとり入れることだけを知つてゐたのであるが、それ故、嘗て  
ビューローが皮肉を云つたやうに、人々は度々リストのところでも最もまづいピアノ演奏を聞くことが出来たといふこ  
とがあり得たのである。だが、リストの犠牲的な獻身的な氣持は、不毛の土地に落された穀物の種のやうなかうした  
人達を誤りから救ひ出したのである。屢々五つか六つの、華やかに飾り立てた馬車に乗つて企てられたイエーナやゾ  
ンデルスハウゼンへの風變りな旅行も、毎年繰返された習慣に屬するものであつた。ギルレはイエーナで毎夏、所謂  
「陽詰祭り」を催した。その時、午後には大抵そこで演奏會が行はれ、リストは自分で指揮した。そして續いて、夜は  
ギルレの庭園でビールと數百の焼いた陽詰とで、小さな酒宴が催された。十二時過ぎに陽氣な藝術家の一群は、巨匠  
を眞中にして、ワイマールへ歸つて行つた。

ゾンデルスハウゼンへの小旅行は、ローコンチェルトのためであつた。外觀はいつの時も、非常に似てゐたのであ  
るが、この催し物について、リストの女弟子パウリーネ・エルドマンズデルフェル・フィヒトネルは、次のやうなまざ  
まざとした描寫を行つてゐる。「リストが明日のローコンチェルトにやつて來る」——この喜ばしい報せは口から口へ  
と傳はつて行きました。吾が愛するゾンデルスハウゼンは、毎年二三回リストをその城壁の中に迎へるといふ特權を  
持つてゐました。そして彼の音樂は、彼の人間そのものと同様に、常に此處で物凄い熱狂の中に謳歌されました。エ  
ルドマンズデルフェル（一八七〇年から八〇年までテューリンゲンの首都で樂長として活動してゐた）は、當時は新ド



イツ派の熱心なる先覺者としても同様に、不評判を以て知られておりました。私は巨匠を接待するために宮庭庭園を荒してもよいといふ許可を受けました。そして私は、丁度特にリストの『ヘクサメロン』も含み、その上にリストが、『私の愛する友達パウリーネ』と書いてみた楽譜包が着いた時に、私達の藝術家の集まりが花園の中をあちこちと移されるやうに準備しておきました。ですから巨匠が、その楽譜を私と連弾で演奏しようと思つてゐたといふことは少しの疑ふ餘地もなかつたのです。然し私はその時は、未だその曲を全然知つてゐなかつたのです。そして、それを一通り見て非常にむづかしいといふことが分つたので、私はリストが忘れるやうにと希望しながら、包の一番下に置きました。私達は日曜の朝、巨匠を停車場に迎へてから、私達のところへ御案内しました。そこにはレオポルド王子もその中に居られたのですが、招待された人々は皆來ておりました。冷たい飲物でさつぱりとした時に、私はリストの望みによつて、ベトリーとウィハンと一緒にラップのハ短調三重奏曲を弾きました。それに續いて、順々にソロの演奏が行はれ、最後に巨匠は、彼の『悲愴協奏曲』を私と演奏しました。それから嵐のやうに要求せられてラコツィー行進曲を附け足しとして弾きました。その行進曲は、私にリストの『ヘクサメロン』のことを想ひ出させて、恐怖を呼び起しました。私は逃げ出さうと思ひましたが、間もなく捕まつて、リストの所へ連れて行かれた時に、リストは心から笑ひながら、私の歎願するやうな眼差しに答へました。『勇氣をお出しなさい。私がうまくやつてあげませう。』それから彼が云つた通りにやつてくれました。といふのは、私の方に書いてあつたところでも、むづかしいパッセージは彼の手の方に入れて弾いてくれましたから。そこで彼は、その曲をいつも人を感動さすやうな善良さを以て、私のために非常にやさしく作つてくれました。午後には、巨匠はグランドピアノにむりやりに坐らされ、シューベルトに基づく幻想曲を作りました。それは大したものであつて、決して忘れることが出来ない程のものでした。』

この年々に、宮庭庭園のお伽の城へ入ることが許されてゐた人々は皆、最も素晴らしい想ひ出の中に日々を過したのであつた。そしてその時の魔力は、永遠に消え去らないであらう。——残念だが、然しもう決して歸つて來ないであらう。

## 二、一八六九年より一八八六年までの事件

リストのローマ滞在中、ワイマールでは多くの變化があつた。即ちデインゲルシュテットは一八六七年にウィーンに招聘されて行き、ワイマール劇場の監督としての彼の地位にはローエン男爵が就いて居つた。彼は士官の出であつたが、以前に藝術に關心を持ち、グッコウの談話集の中に、藝術に關する論文を書いて居つた。かくしてリストは、彼に注目するやうになり、大公に紹介したのであつた。ローエンの指導の下にワイマール歌劇は、間もなく喜ばしい飛躍をして來た。そしてリストは、ローエンに對して人間として非常な尊敬の念を懷いて居り、間もなく交友關係を起すやうになつたのであるが、彼は、ローエンに忠告を與へる忠實な味方となつた。がとかくする中に、大事などころでは行き違ひがあつたといふことが、ポツ／＼分りかけて來たので、人々は、出來ればもうそれ限りで實際を元通りにした方がいゝと、皆骨を折つたのであつた。勿論、社交界から逃げ出すところまでは行かなかつたが、リストは、先づ公衆の前へ出るといふことを控へたのだつた。彼の訪問客は、實に溢るゝばかりであつたので、殆ど息つくことも出來ない程、應接に暇なかつた。宮廷にもまた、屢々彼は召された。

彼は一月二十五日に宮廷演奏會で、レメニーの旅行延期によつて、不意に出來た獨奏の部分の脱落を聴衆に對して



埋め合わせるために、自由に選んだ小曲を演奏した。そして數日後劇場で催された管絃樂演奏會に出席し、そこで彼の山嶽交響樂が演奏された。リストがワイマールに居合せた時に、ブロンスアルト、ルビンシュタイン、タウジヒが宮廷の招きに應じて演奏し、そして彼等の尊敬する巨匠との愉快な再會を謳歌した。弟子は差し當り、唯の四人しか到着してゐなかつた。そしてそれらの中には、特にアンナ・メーリッヒと小ヨゼフィーが目立つてゐた。彼を非常に信用してゐたエルンスト侯を訪れたゴータを通り、彼がアイゼナハのバハ記念碑のために演奏會に出たマイニンゲンを通じて、リストは三月二十五日にウィーンに着いた。此處では、彼の聖エリザベートがヘルベックの指揮の下に演奏されることになつてゐた。リストは何時ものやうに、エリザベートホテルに入つたが、間もなくシュッテンの宮廷にゐる従弟エドアルドのところへ移つた。そしてそこに彼は、それから毎年、而も彼の命名日(四月二日)には大抵客として滞つた。

エリザベートの演奏は四月四日に假裝舞踏會々館で、エーン嬢が主役をつとめて行はれた。そして聴衆全部の素晴らしい喝采を収めたので、その作品は、十一日に再び演奏されねばならなかつた。ヘルベックは、それに關して次のやうに報じてゐる。「結果は私の非常に大膽な期待をも凌ぐものだつた。器樂の序奏の後に、もう無數の喝采が起つた。かうして各曲目の後や、各章の終つた後には、リストは舞臺に呼び出され通しだつた。リストの到着する前、既に或る社交界の演奏會で彼のブレリユードと、ゾフィー・メンテルが演奏した變ホ長調協奏曲は明らかに成功を収めてゐたのだつた。人々は初めの中はその女流藝術家を嘲笑つてゐたのだつた。そして彼女が「トライアングル協奏曲」のプログラムに載つた時、失敗するに違ひないと云つた。だが、彼女は自分の意志で頑張り続け、完全な勝利を獲得したのだつた。リストは感謝の意を表すために、ウィーンに彼女を訪れた。そしてこの日から彼女の友情は始まり、リス

トの死に至るまで續いた。ウィーンにはアウグスト男爵もやつて来て、彼に敬意を表すために二つの演奏會が準備されてあつた。ベストへもう一回、小さい旅行を企ててはと説き勧めた。躊躇しながらもリストは承諾した。だが、その前に尙彼はレーゲンスブルグでビューローと密かに會つたのである。ビューローは、其處で舅の好みに従つてローマ法皇への獻金のために演奏會を開き、その最後にリストの作品を演奏した。リストは八月に計畫されてゐるラインの黄金の上演のために、ミュンヒェンに來ることをビューローに約束した。然し最大の喝采を収めて催され、ビューローが五月十日に指揮したミュンヒェンに於ける聖エリザベートの第六回の再演には、リストは自分の仕事のためにローマに歸ることを餘儀なくされたので、出かけることが出来なかつた。

四月二十六日と二十八日には、ベストで、二回のリスト演奏會が催され、エルケルはダンテ交響樂とハンガリア交響樂とを指揮し、リストは自分で戴冠式ミサ曲を指揮した。そして的確なる成功を収め、リストのために行はれた歡迎會はウィーンのものに劣らなかつた。ベストから直ちに彼はローマへの歸還の旅を始めた。こゝには次の夏に計畫されたアドルフ・シュテルンのテキストによるベートーヴェンのカンタータと、彼が今なほ完成しようと思つてゐた二つの新作、即ちオラトリオ、ポーランドの聖スタニスラウスとハンガリア皇帝ステファンとの仕事が彼を待つてゐた。

ラインの黄金の上演に出席するといふビューローに與へた約束に強ひられて、止むなくリストは八月の半ば仕事を中止してミュンヒェンに急いだ。だが、その間に此處では、廣範圍に亘る大變化が勃發して居つた。ビューローは、ゴータが彼から別れた時、その職を辭してしまつた。といふのは、ワグナーとの友情に負ふところのあつた彼の地位には、現下の情勢ではもはや居ることが出来ず、そして何時までたつても絶えない個人的並びに職業的な色々なゴータは、彼の健康を損つてしまつてゐたからである。リストはビューローが、ミュンヒェンから完全に引退してしまふ



といふことに決して同意しなかつた。そしてリストはビューローを新しい方向の先覺者として、どんな犠牲を拂つてもそこに止めて置かうと努力して居つたので、少くとも音樂學校の彼の地位は保つて行くやうにと忠告した。だがビューローはミュンヘンの苦惱に充ちた數々の思ひ出を見棄てゝしまつた。ハンス・リヒターは今やビューローの代りにワーグナーの代理者として、ラインの黄金を指揮しなければならなかつたが、彼は總稽古の後で缺點だらけの演出のために自分が責任を持つ事は出来ないといつて身を引いてしまつた。それ故上演は二三週間延期されねばならなかつた。そして澤山の馳せつけたワーグナーの友人達は、手を空しくして再び別れ々になつて行つた、リストも直接ローマへ歸つた。彼は自分の娘とワーグナーと共に凡ゆる世間との接觸を避けた。今はベルリンに滞在して居たビューローとも彼は會はなかつたが、ビューローの母を再三訪れた。イタリアに歸つた後リストは、ほんの小時ローマに留り、冬中は邪魔されずに仕事が出来るやうにと、デステの別荘に赴いた。彼にオラトリオを作る計畫を起させたポーランドのジミーエンスキーの「聖スタネスラヴィー」といふ抒情詩的傳説を、彼は翻譯して貰ふやうにコルネリウスに送つた。後日はつきりと認められるやうに、彼を殆ど感激もさせ得なかつたこの題材をリストが選んだのは唯熱申したポーランドの女のやうに、ポーランドの司教の讚美を熱願してゐたウィットゲンシュタイン侯爵夫人を喜ばすためであつたといふことは、かなり確かなことである。吾々が、今に見るであらうやうに、彼女の關係が段々と冷やかになつて行くと共に、この作品に對するリストの興味もだん／＼薄くなつて行くのである。

大公の誕生日に、リストは再びワイマールに到着した。彼の「音樂の家神」に護られた滞在の頂點をなすものは、一八七〇年五月二十六日から二十九日に亘つて催される音樂家總會であつた。そしてこの音樂家總會は來るべきベートルヴェンの第百回目の誕生日に因んで、大規模のベートルヴェン祭となる筈であつた。人々は一八六一年に既に「ワ

イマール大公陛下が忝くも、最も深き慈悲の御心より創立後間もない協會の總裁に就き給うたといふことよりなる高き庇護を感謝して想ひ出しながら、そしてドイツ藝術の促進に獻ぜられた凡ゆる努力に對する高き意義を正當に評價しつゝ、ワイマールの、この祝典を催すといふことに決めてしまつてゐた。此の十年の間に全く多くのものが變つてしまつた。かくして協會に一番盡した最初の理事長たるブレンデルは死んで、彼の仲間からなくなつてしまつた。リストは計報に接して（一八七八年十一月二十五日）、次のやうな言葉を以て彼のことを追想した。「彼はどちらかと云へば、正直な尊嚴な性格を持つてゐました。そして彼が生活した環境の中では、稀に見るやうな人でした。ブレンデルは誰にも先んじて、而も誰よりもよく『ワイマール』の理念を理解し、そして少しの遠慮するところもなくそれに没頭しました。私は非常に彼に負ふ所がありました。『新音樂雜誌』は、私が正しいと思ふやうな事柄のために、非常に盡して來ました。それは人々の要求するほんの僅かなもの、荒野に於ける一聲でしかありませんでした。——が然し、それは結局は一聲だけのことはあつたのです。」ブレンデルの後繼者としては、カール・リーデル（ライプツヒヒ）が協會の主席に上つた。だがリストのローマ滞在中、一時は存在の意味なきまでに衰微し、切迫してゐた「全ドイツ音樂協會」がだん／＼と或る高さに達したのは、主として、死に至るまで忠告を與へ、自分から進んで援助しつゝ味方となり、そして稀に見る良心と誠實とを以て、凡ゆる音樂家總會に出席したリストの功績なのである。ワイマールのベートルヴェン祭には、凡ゆる方向から著名な音樂家が急行して來た。リストは祝典の中心點であり、魂であつた。だが表面的には、彼は實に著しく控へ目にしてゐた。彼は友人の切なる願ひにもかゝはらず、ワイマールで自分で演奏するといふことは決心出來なかつた。人々は實に今尙、最後には、でもリストがその善良さから快諾するであらうと希望しながら演奏者の名前を出さずに、ハムマークラフィールソナタをプログラムに載せたのだつたが、期待は報



いられず、その曲目は取止めとなつた。嘗てワイマールで興へられた痛手は、今に至るも完全に癒えてゐなかつた。四日に亘る祝典の最後の演奏会で初めて、一八五九年の記憶すべきベートーヴェン演奏會以來、リストは音楽協會との不和と、だん／＼激しく現れて来るタウジヒの「未來の音楽」に對する嫌惡にも拘はらず、リストがその解釋のために引受けた變ホ長調協奏曲を指揮し、第九交響曲でその催しの榮ある最後を飾るために、ワイマールで再び指揮臺に上つたのだつた。その演奏では、その前にベートーヴェンの作品九十七番の三重奏曲よりのアンダンテで大天才に敬意を表したベートーヴェン・カンタータが非常な熱狂を呼び起して居つた。巨匠から高く評價されてゐたサン・サーンズは、無数の來會者達によつて認められたやうである。そしてサン・サーンズの名前は、この年に初めて音楽家總會のプログラムに載つたのである。

リストは尙、大公の命令によつて劇場で催されたワーグナーの作品の特別上演に出席するために、六月の半ばまでワイマールに滞つた。そしてそれからラインの黄金と「ワルキューレ」の上演に列席するために、ミュンヘンに赴いた。ワーグナーとの個人的な交際は、すつかり杜絶えてゐた。そして彼の娘コジマとも、彼は娘がビュローと別れてからは少しの接觸もなかつた。おまけに彼女のワーグナーとの結婚の報せさへも、彼は新聞で初めて知つたのだつた。だがこの軋轢は友人の作品に對する彼の感激を少しも抑壓することは出来なかつた。ミュンヘンからオーベルアムメルガウへの小旅行は、ほんの幾らかの満足と興へるものとなつた。キリスト受難劇は、實にリストに崇高なる印象を與へたのであるが、音楽は彼には我慢の出来ぬものに思はれた。

イタリアの政治的關係よりすれば、彼がローマに歸ることは、望ましいものと思はれなかつたので、リストはアウグスト男爵の招待に應じて、ミュンヘンから男爵領スツェグスツアルトに行つた。此處で彼の前に現れたのは、彼の

友人の家庭に於ける仲々した憩ひの場であつた。そして彼はそこで愉快な三ヶ月を過した。彼の弟子フランツ・セルヴァイスは、彼について此處に来てゐた。またレメニー、ミハロヴィッチュ、ゾフィー・メンテルの如き、他の音楽家や友人達が、或は永い間、或は一寸した間訪れて滞つた。今度の仕事は、大部分以前の作品の新版の改訂であつたのであるが、リストがスツェグスツアルトで、その仕事に没頭して暮してゐたあひだに、彼の將來に重大な結果を生ずるやうなことが準備されてあつた。アウグスト男爵とアンドラシー總理大臣によつて、リストを引續いてハンガリアのものにしようといふ方法が計畫されてゐた。ハンガリアの教會音楽と世俗音楽とを含めての一般的指導者たるべきハンガリア國立音楽學校の創立は近き將來にあり、リストはその校長に任命されようとしてゐた。リストはこの提議を受け容れる氣持のあることを表明し、差し當つて十二月の中頃ブダペストで行はれるベートーヴェン祭を指揮することを約束した。リストが名づけたやうな、この「世間への復歸」によつてリストと侯爵夫人との間は、甚しく不和なものとなつた。彼女は虚榮心と名譽慾とから、彼を非難し、猛烈に叱責した。この點に關しては後年のバイロイトに關してと同様に、彼等の間には決して意見の一致は得られなかつた。スツェグスツアルトからリストは、再びハイナルド僧正をカロサに訪れた。この人は物事に激しい興味を抱いてゐた、聰明な、共感的な人であり、特に非常な音楽熱を持つた人だつた。リストは既に、以前ローマで彼とは面識があつた。そして後年、常に復活祭前の週間は彼の所で過した。

十一月十五日にリストは、皇帝陛下臨席の下に偉大な成果を収めて進行したベートーヴェン祭の前稽古を始めるために、ブダペストに移つた。シュウェントネル僧院長は、彼を再び懇ろに待遇した。リストは今や、實に活潑にベストの音楽生活に關與して來た。クリスマスに彼のオラトリオ・キリストの一部は、彼の指揮によつて演奏された。そし



て二つの愛好家音楽會も彼の指揮の下に行はれた。その一つは色々な作曲家達から成る完全にハンガリア的な演奏會であつた。彼の國民交響樂ハンガリアとイ長調協奏曲(彼の女弟子ヤニーナの演奏による)もプログラムを飾つた。彼はまた、現代の方向にある若い力強い、有望な人達を仲間に入れることによつて、ベストの音楽生活を飛躍せしめんものと努力してゐた。第一級の人として、彼はワーグナー一派の中に人となつたハンス・リヒターを國民劇場の監督として得た。

リストが五月の初め、ワイマールに赴くためにベストを後にした時には、彼のベスト移住問題は尙決定されてゐなかつた。彼は六月半ばに初めて、次のやうな原文を有つた役所の指令を受け取つた。「皇室使徒たる皇帝陛下には、忝くも吾が貴顯閣下達の、六月十三日の最高決議を以て、音樂の分野に於て盡された貴下の功績に對し、無税にて顧問官の稱號を授けられ、同時に毎年四千フロリンの俸給を許可し給ふものなり。」

今や毎年ベスト滞在を繰返すことが必要だつたので、リストは自然ともうそれ以上シュウェントネルの厚遇を求めることは出来なかつた。そこでアウグスト男爵は音樂學校の開校まで彼が住むべき家を世話してやつた。パラティン街二十番地に稍、適當な家が見つかつた。リストは一八七一年の夏の數箇月は、大抵オラトリオ・キリストの訂正をしなから、再びワイマールで過し、また彼の作品が一つづつ演奏された附近の町の二三の演奏會に出席した。かうして彼は七月二日に、ライプツヒヒに赴いた。そしてそこではリーデル合唱團が教會演奏會を催した。タウジヒは此處で巨匠と落合つたのだつた。彼は、その時はもう非常に興奮状態にあつた。そして他日彼はチブス熱のために病床に倒れたのだつた。初めの中は、皆は未だ希望を持つてゐたが、七月十六日から十七日にかけての夜再發し、朝方死んでしまつた。遺骸はベルリンへ移された。彼の最愛の弟子で、而も最適の後繼者の餘りに早かつたこの最後は、リスト

にとつて非常な打撃となつた。

リストがドイツ聖チエチリア協會の第四回總會と、ウィット博士の指揮による教會演奏會に出席したアイヒシュテットを通つて、彼は十月の初めにローマに歸つて來た。此處ではビエローが誕生日に訪れて來て、彼を非常に喜ばした。その年の終りには尙リストの度量の廣さから美しい行爲がなされた。といふのは、彼は、その夏ローベルト・フランツを二度訪れたのであつた。そしてその時フランツは、だん／＼進んで來る豊疾のために職務を實行することが不可能となり、物質的に苦しい状態になつてゐたのだ。リストは直ちに援助しようと決心した。然しフランツが施しを受けねばならないといふ恥かしい思ひをせずにすむやうに、彼は全ドイツ音楽會の「ベートルヴェン財團」を創立した。そしてそれは功勞ある音楽家に補助金を與へるといふ目的の下に續けられることになつた。フランツはこの財團から報酬を送られた。そしてリストは、彼の財産からこつそりと尙百ターレルを加へた。次の年にも彼は力を盡してローベルト・フランツのために斡旋した。ローベルト・フランツは後年「彼がゐなかつたなら、私は餓死するの他なかつたでせう。」といつた。「君は本來フランツといふよりは一體、ヘルフェリツヒ(人助けの義)といふ名の方がよかつたね。といふのは、僕は君のやうに喜んで人助けをする人間を今まで、誰も見たことがないからだ」といふ、アドルフ・シュタールの言葉通りのことを、リストは何時もよく實行したのであつた。

彼がほんの少し前に、再び移つて來たベストで、一八七一年十一月の總會に、リストにとつて非常に煩はしい事件が起つた。ヤニーナ伯爵夫人といふ、彼の以前の女弟子が彼に對して殺人の企てをしたのだつた。一八六九年に彼女は、彼の後を追つてローマに來て居り、そして愚かにも彼に戀してゐたのだつた。リストの初めの中の拒絶的な態度は、彼女の自制心を失はせてしまつた。彼女の奔放なコサック人の血は最も冒險的な行ひをさせたのであつた。限り



なき嫉妬に燃えて、男に變装し、彼の行爲行動を監視し、そして何とかして彼を自分のものにしようと試みた。リストは自分の僧侶の誓ひとの内面的な葛藤に苦しみながら、永い間彼女の誘惑に抵抗して来たが、ティボリに於ける二三日間は、彼女は彼のものだつた。それから(一八七〇年)、彼女はリストに従つてワイマールにやつて来た。そしてその小さい町では、僅かな評判を惹き起すだけでは濟まないやうな彼女の舉動によつて、到る處に彼を吹聴して廻つた。彼女が或る日嫉妬から、彼を射ち殺すと脅した時、町から出て行くことを命ぜられた。だが彼女は再びベストに彼と一緒にやつて来た。それから彼女は金を手に入れるためにアメリカへ赴いた。それにも拘はらず好ましい結果が得られず、且つリストの冷淡さを氣づいた時に、彼女は彼を殺すことに決心した。然し彼女がベストで彼と相對した時、彼女は自分で毒を仰いだのであるが、リストの誓ひを聞いて解毒劑を飲んだのだつた。彼女は今や、自分がもうこれ以上リストの心を惹くことが出来ないといふことを知つたので、怨みを残してベストを去つて行つた。その時尙寫すやうにと彼女に預けてあつたリストの草稿を、彼女は一部分焼いてしまつた。彼女は數週間後に報復手段としてロベルト・フランツの假名の下に「コサック婦人の想ひ出」と云ふ一文を公表した。そしてその中でリストを悪く云ひふらした。その後ほんの暫くしてから「ピアノリストの回想」といふ、第二のパンフレットを續けて出し、それは一見リストの手に成る第一回のものに對する答辯の如く思はせる手筈になつてゐた。この印刷物を彼女はリストの凡ゆる友人達や、法皇や、ワイマール大公等に送つた。醜聞はリストの僧衣に聯關して非常な評判となり、彼に非常な都合な事態を惹き起した。ローマに於ては事態は非常に悪いものと認められて来た。そして事態が一層大きな結末に至ることなく過ぎて行くといふことは、唯法皇廳に對する彼の受けのよさに負はねばならなかつた。だが彼はこの年は永遠の都ローマを避ける道を探つた。たとへその事件が、彼に非常な鬱憤を惹き起したとしても、リストは後年も決

して敵意を以てヤニーナのことを思つてはゐなかつた。彼の死ぬ二三日前に、彼はゾフィー・メンテルに「ヤニーナは決して悪いのではなかつた。唯變り者だつた。」と云つた。

侯爵夫人もこの出來事に苦しんだのであるが、彼女はそれについて妥協する可能性を求めた。實に彼女は、まだリストを非難する何等の權利を持つてゐなかつた。彼女がリストを斷念した時、彼女はアルテンブルグ時代の經驗に照らして、リストのやうな氣質の人にあつては、このやうな出來事に至らざるを得なかつたといふことを、充分知つてゐた筈であつた。リストは正に、女なくして生きるといふ性質ではなかつたし、そして女に忠實であることの出來る人でもなかつた。一體彼は、一般に、彼の生涯に於て一度でも一人の女に誠實なまゝであつたことがあつたらうか。それは疑問である。彼が屢々、種々なる桎梏に束縛されてゐた事情は、眞にそれとは正反對なことを表してゐる。リストは單なる侯爵夫人達とか、伯爵夫人達を、自分の戀人と呼ぶのには、一種の弱さを持つて居つた。そこで、彼は本當に自分に屬する女に、恐らく注意することなく通り過ぎてゐるのであらう。彼のものとなり、彼に交際を押しつけた多くの婦人達の、誰一人として彼を完全に満足さすことは出來なかつた。ダグー伯爵夫人との年々は、直ちに消滅してしまつた愚かな青年の激情であつた。そしてウィットゲンシュタイン侯爵夫人との關係は、それ以上に精神的な友情であり(リストが屢々用ひた「魂の雙子」といふ表現は、實に適切なものであらう)、それ故に、決して完全に消え失せるものではなかつた。そして晩年になつて既に僧衣は、一婦人と關係を續けて行くといふことに妨げとなつた。そこにはどつちみち急速に消えて行く種々のエピソードがあつたのである。

一八七一年のクリスマスにリストはルビンシュタインの指導の下に、音楽社交界で催された彼のクリスマス・オラトリオ(オラトリオ・キリスト第一部)の演奏に出席するために、ウィーンに旅行した。ハンスリックを先頭とする批評家



達は、いふまでもなく、その晩の成果を何の斟酌もなく罵倒した。作品の凡ゆる眞の批評的觀察を無視した。何といふ偏見多き觀點から、人々は當時尙リストと相對立してゐたかを、ブラームスの次のやうな當日の判斷は最もよく示してゐる。「私達は此處で、リストの『オラトリオ・キリスト』を三十日に聞きました。そしてこのものは非常に空々しく、退屈に、痴鈍に、そして無意味に思はれるので、私は今度は如何にして、必要缺くべからざる眩惑が齎されるのか分りません。」ビューローは丁度その時もウィーンに滞在して、二三の演奏會を行つた。彼はリストに従つてベストへ歸つて來た。そしてそこで二回のリストの夜會を催し、同様に二三日後プレスブルグでリストの夜會を開き、その結果その教會音樂協會は「グランのミサ曲」を練習するといふことになつた。

註 一八三二年に創立されたプレスブルグ教會音樂協會は、一般にリストの作品の普及に偉大なる功績があつた。

例へば、「ハンガリアの戴冠式ミサ曲」は、一八四七年から一九〇八年までの間に三十回も演奏された。

リストがベストに滞在してゐた間、そこには活潑な音樂生活が一般を支配してゐた。日曜日ごとに大抵町の教會管區にあるシュウェントネル僧院長のところでもチネーが催され、アンドラシー伯爵、ハイナルド僧正、エメリヒ・スツェヘニー伯爵の如き、最高の貴族達や、文筆界、藝術界の選り抜きの人達がそれに參加した。リスト自身、或は丁度通りがかりでベストに滞在してゐる音樂の大家達が演奏して聞かせた。リストの弟子達で、この年に一部分はワイマールで、一部分はベストで彼のところに滞在した。その人々の名前は次の通りである。エメリヒ・カストネル、アントン・ウアシユルッフ、ゲザ・ツイヒル、パウリーネ・フィヒトネル、ラウラ・カーラー、ヨハンナ・クリンケルフィス。ベストのハイナルド僧院長の許にあつては、またこのマチネーでリストの合唱曲を演奏したリスト協會が組織せられたのであつた。

リストが何等かの仕方でも、絶えず積極的に參加してゐた大公妃の誕生日祝賀の宮廷演奏會のために、彼は再びワイマールにやつて來た。相變らず此處では、彼はたゞパウリーネと従僕とに面倒を見て貰つてゐただけだつた。後になつて更に侯爵夫人の仕送りもあつたのであるが、その他ショルンといふ女の人の名に於て彼の幸福は氣遣はれたのであつた。リストは彼女が母と共に屢々住んでゐたアルテンブルグ時代から既によく知つてゐたのであるが、非常に喜んで彼女を迎へ、そして戯れに、彼女を自分の「神慮」だと呼んだ。八年の間には、この關係は勿論不愉快なものに變つてしまつた。「宮廷庭園」の中や「宮廷庭園」をめぐつて起つた（彼女はそのため「宮廷庭園」の筋向ひに住んでゐた）凡ゆる事件を、文字通りローマの侯爵夫人に報告し、そして屢々、リストと書簡上の衝突を惹き起した彼女を、リストは煩さい「監督官廳」として迎へたのだつた。

この夏（一八七二年）には、今や又祝典劇場の基礎工事といふバイロイト計畫の第一歩も踏み出されねばならなかつた。リストは、ワーグナーとの關係の中絶のために、準備されてゐたバイロイトの企畫に對して、差し當りかなり無關心な、無縁な状態にあつたのである。だがタウジヒの報告は充分満足と與へたのだつた。そして彼は、直ちに三つの後援證書に署名した。リストは、次のやうにヘッケルに書いてゐる。「私の僅かな収入では、殘念なことに莫大な寄附は許されませんでした。それにもかゝらず、私は四年この方全ドイツ音樂協會の一員としてライプツヒのワーグナー協會に加はつて來てゐます。そして貴方は私を友好的な態度で、貴方のマンハイム慈母協會に誘つてくれますので、失禮ですが一八七一年から七三年までの寄附金總額十五グルデンを同封して送ります。」とかくする中にまたトリプセンからのフォン・モウクハノフ夫人の感激的な敘述によれば、首尾よくリストと娘のコジマとの間には再び交通が行はれ出したのであつた。今やバイロイトの基礎工事の日も近づいてゐた時になつて、ワーグナーは友人リス



トをこの日に呼ばないといふ氣にはどうしてもなれなかつた。といふのは、リストはこのバイロイトでずっと後までこの祝典劇場の演奏に選ばれないやうな曲には興味を持つてゐなかつた人だし、又このリストに、ワーグナーはどれ程恩恵を蒙つてゐたかをよく知つてゐたからである。ワーグナーは數年に亘る完全な自制にもかゝらず、せめて彼の機嫌を直すために訪問してみようと思つてゐた。かくして彼は祝典の四日前に、懇ろなる招待狀を彼に書き送つてゐる。

だが、その前既にリストはどんなことがあつてもバイロイトへは行かないことに決めてゐた。彼は侯爵夫人に對してかうする義務があると思つてゐた。この事態に於て最後に勝利を占めたのは、氣むづかしい、そしてワーグナーの藝術的な姿を見違つてゐた婦人の意志に對する斟酌であつた。然しワーグナーの文書が着いた時、彼は深く心を動かされた。そして將來、自分と約束してゐる束縛から離脱しようといふ固い決心が出来た。激しい感動の餘り、彼は筆をとつた。「高潔なる愛する友よ、貴君の手紙に深く動かされて、小生は言葉では貴君に感謝することが出来ませんが、色々と小生を拘束してゐる凡ゆる陰影とか、氣兼ねとかは消滅するであらうといふこと、そして吾々は間もなく相まみえるであらうといふことを心から切望致します。その時になれば、貴君には吾々二人から小生の心がどうしても離れることが出来ないものであることが、はつきりと分るに違ひありません。貴君が獨りでは出来ないやうなことも出来る場合には、貴君の『第二の』もつと高い生命の中に小生の心が親しく甦つて來るといふ風に。吾が凡ての愛の如く、神の祝福吾等と共に在れといふ、天の恵みはこゝにあるのです。フランツ・リスト七年五月二十日、ワイマールにて。この一文を郵便で送るのは小生は嫌ひです。貴君は五月二十二日に、數年來小生の考へと感情をよく知つてゐる或る婦人から之を受けとるでせう。」

この婦人はゴルチャコフ内親王として生れたオルガ・フォン・マイENDORF男爵夫人であつた。アミー・ファイは彼の著書「ドイツに於ける音楽研究」の中で、マイENDORF男爵夫人の人格について次のやうな記述を行つてゐる。「人々は彼女のことを一般に黒猫と云ひました。彼女は中位の大きさで、華奢で、すらつとしてゐますが、特別に優美で、何時も黒い非常に簡単な着物を着てゐます。然し誰でも彼女の生れつきの典雅なことを氣づかずに濟ますことは出来ません。彼女の顔色は蒼白く、髪は眞黒です。彼女は氷のやうな冷かさや熱帯の熱さの印象を同時に與へます。ルチフェルの誇りは全世界に對して向けられ、——その一方、一人々々にどこまでも熱中して行くのです。彼女は美しいといふのではありませんが、彼女の長男を、大學に入れる準備かしてあつた程、言葉や學問では非常に教養があります。」リストは一八六三年の夏、ローマで彼女と知り合ひになつた。彼女は當時、ローマにあるロシア公使館書記官の妻であつた。當時既に、その情熱的な婦人は、自分がリストに興味を持たれてゐることを感じた。そして自分の上に及ぼされるかに思はれた魔力を避けるために、社交界では屢々彼を敬遠してゐた。然し間もなく、彼女の抵抗力はなくなつてしまつた。一八七一年マイENDORF男爵が死んだ時、彼女はリストの方へ向つて來た。彼女は、その實よい高等學校へ行かねばならなかつた四人の子供と共に大都會に住むだけ裕福ではなかつたので、ワイマールへ移るといふことが彼の氣に入るかどうか問合せた。そして孤兒となつた子供達に「保護」の手を與へてくれるやうにと切願した。(註、この敘述はリストに宛てた男爵夫人の未發表の手紙による)たとへリストが、今や凡てがどうなつて行くべきかを明らかに豫見したとしても、彼は反對することは出来なかつた。おまけに又、誰に對してもワイマールでの滞在を拒むといふことは彼の採り得る道ではなかつた。男爵夫人はワイマールに移つて來た。リストは初めの中は彼女の愛の告白に對して激しく闘つて來たのであるが、この情熱は彼がほんの少し前のヤニーナ事件で、初めて危



機に瀕せしめた僧侶の誓ひと再び衝突するに至つたのである。然し男爵夫人は勝利を確認して、かう彼に書き送つたのであつた。「私が望んであるやうに、二三日間に恐らく私があゝの最初の日に既に行つたやうな私の告白を、貴方は餘すところなく聞いて下さることを拒みはしないでせう。そして貴方を非常に不正にまで追ひやり、良心に對して遠慮させてゐる重壓から貴方は必ず解放されることでせう。」間もなく彼は、漸次に力強い影響を彼に與へたこの婦人のもとなつて行つた。何がこの逆ふべからざる力を彼女に授けたかは、今日に至るも尙解かれない秘密である。人々は折々リストのマイエンドルフ男爵夫人との關係を、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人とのリストの結びつきの比較的弱い反復、多くの似通つたところを持つたものだとするのである。彼の側よりすれば、主として彼を惹きつけたのは、この婦人の廣い精神的教養と高い知性とであつた。そして彼女の家庭に於て、彼は元氣のあるまどみや、晩年になつて激しく缺乏に苦しんでゐた家庭生活の埋め合せを見出したのであつた。リストがワイマールに滞在した時は、何時も彼は夕方を男爵夫人と共に過した。そして演奏會や音樂祭には、屢々彼女と同伴で出かけて行き、ローマやベストからは彼女と活潑な手紙の交換を行つてゐる。

人々は、この關係のいつに變らぬ珍しいやり方を見て、野暮なものだと思つたのであるが、リストのワーグナーへの返事を男爵夫人によつて送達させたことは、バイロイトで機嫌を悪くさせてしまつた。ワーグナーは、そこでリストの訪問を延期した。八月になつて初めて彼は友人に改めて次のやうに依頼してゐる。「吾々は丁度貴兄をお訪ねし度いのですが、喜んで迎へて下さいますか。苦しもあの返事の送達によつて、ワイマール中を誤解させたこの氣分について吾々を窮境に陥れた困つた状態が齎されなかつたならば、吾々がどんなに疲れきつてゐても貴兄の美しい、高潔な返事を受けとつた直後、既に貴兄を訪問するために出發したことでせう。今でも尙、吾々の貴兄を訪問することが、

誰か或る人との何かの協定を思はせるに違ひないといふことは、吾々の感情に反することです。之に反して小生がこの前の五月に、バイロイトで貴兄との再會を待ち焦れてゐたやうな、高尚な意味で再び貴兄に挨拶することが出来るといふことは、唯一の望ましいことです。貴兄の一言は、この吾々の心からの願ひを成就する可能性を判然とするに充分なものです。小生はこのことを願ひします。貴兄の返事の來次第、吾々は貴兄のところへ旅立ちます。」リストの心からなる招待に應じたワーグナーは、コジマと九月三日に、三回目の訪問をしてワイマールに到着した。

この時から再びも通りの交際が始まつた。ベストへの歸途、リストは八日間バイロイトにワーグナーを訪れて滞在した。「和解」の謎はウィットゲンシュタイン侯爵夫人には分らなかつた。そしてワーグナーが嘗て、彼女に與へた「嚴しい傷手」は今に至るも治つてゐなかつた。そこで彼女はリストを猛烈に非難した。將來に於ても、彼女はこの問題を少しも了解してゐなかつた。——「ローマ、ワイマール、バイロイトの三つの汚點以來、私達の間は分裂してゐます。私はもはや貴女には慎重なる熟慮なしに書き送ることは出来ません」と、リストは既に一八七三年に不平を洩らしてゐる。

ベストに於て、人々はこの冬彼の演奏を聴く機會を屢々得た。彼は一八七三年三月二日に一千ターレル以上を收めたローベルト・フランツのための夜會を催した。そして二三週間後に、アンナ・チヒー伯爵夫人によつて催された慈善夜會で彼は共演した。一枚十五グルデンづつの入場券は、内々の方法で即座にハンガリアの貴族達によつて買ひ占められたので、非公開の演奏會となつた。皇帝陛下もその夕に臨席された。——一八七三年二月八日はベストにとつてハンガリア議會が殆ど満場一致でハンガリア國立音樂學校の基本金を可決したといふことによつて、記憶すべき日であつた。前の冬には、アンドラッシーによつて提出された提案が意外にも却下されたので、事務は延期されねばな



らなかつた。リストはその覺悟を以て、一年の一部分の間、自分の力をこの新しい施設のために捧げると聲明し、そしてその名譽校長に任命された。四月十三日に、リストは彼の友人大勢とともに、彼の作品のために盡した教會音樂協會がグランのミサ曲を演奏したプレスブルグを訪問した。ルドウィヒ・ノールがその夕の饗宴でリストのために行つた乾杯の辭は、來る冬のリストの名譽のための大記念祭に對して、根本的な刺戟を與へたといふことによつて、この小旅行は意味深いものとなつた。

リストがベストに滞在してゐた間に、彼がこの夏も再びそこで過さうと思つてゐたワイマールは、音樂的な大行事に對する準備をしてゐた。それはオラトリオ・キリストが初めて全曲演奏されることになつたのである。出演者達はイエーナ、ゾンデルスハウゼン、アイゼナハ、ワイマールから集められ、そしてミルデ夫妻は成功せんものと専ら力を注いだ。一八七三年五月二十九日に、そのオラトリオ・キリストはリスト自身の指揮の下に、プロテスタント教會で、選ばれた聴衆に聴かされた。ワグナー夫妻もバイロイトから、同様にミハロウィツェ、アブラーニ等もベストから馳せつけた。悲しいことにその演奏はほんの少ししか稽古が出来てゐなかつたので、全然いゝ出来ではなかつた。——夏はいつものやうに過ぎて行つた。ワイマールに來てゐた弟子達の中では、次のやうな人々が擧げられる。

ファイ嬢、ガウル嬢、マルタ・レムメルト、オット・レスマン、ラーテルト、ロシア人メツツドルフ等々。八月にリストは、招待に應じてバイロイトへ行き、ホーエンローエ大僧正を訪れて、シリングスフェルストへ行つたが、それから大公王子の結婚式の祝宴に参加しようと、またワイマールに歸つて來た。彼は九月七日にドイツ皇帝兩陛下臨御の下に行はれた宮廷演奏會で、ウエーバーのポラッカ・ブリランテと彼のハンガリア狂詩曲を一つ演奏した。そして次の日に劇場でベートーヴェンの第九交響曲を指揮した。おまけに彼は大公の希望によつてV・フォン・シッフフェルの「ワ

ルトブルグの花嫁歡迎」といふ祝典劇に音樂を書いたのであつた。そしてそれは二十三日にワルトブルグ會館で上演された。

それからリストが十月の三週間をローマで過してゐる間に、ベストでは大事件が起りつゝあつた。だが一八七三年には、十五回目にリストの藝術家としてその行路が新しく始められた日が再びやつて來た。彼が十一歳の少年としてベートーヴェンから藝術の洗禮を受けた彼の忘れ難い夕べと共に彼は(一八二三年)公衆の前に現れたのであつた。リストのハンガリアの友人達は、彼の藝術家記念祝典の機會を逸するやうなことはなかつた。ベストの住民が、この名譽ある日に擧つて協力したといふことは、その祝典を國民的祝祭にまで高め、かうして榮譽ある記念碑までも作つたのであつた。「リスト記念祭委員會」が組織され、その中には藝術界と並んで、ハンガリアの貴族階級や僧侶階級も選ばれてゐた。委員長はハイナルド大僧正で、全體の中心人物は書記アブラーニであつた。ハンガリア國民に對して彼等の「偉大なる同郷人」を一致協力して讃へようといふ叫び聲は、熱狂的な反響を呼び起した。リストのハンガリアに歸還するに當つて、代表者は既に國境まで來て彼を迎へ、その後十一月八日に祝典は始められた。リストが繰返し繰返し、歡呼の聲を叫ぶ民衆のために、窓のところに立たなければならなかつたセレナーデの後で、ベスト市によつてハンガリアホテルで催され、數々の名士達が參加した歡迎の夜會は、全世界から集まつた視はれる人リストの無数の友人達を一堂に會せしめた。この比較的內々での祝祭の後、次の日に假裝舞踏會館に於ける大マチネーによつて、民衆の間に藝術家に對する眞の歡迎と稱讚が行はれた。アブラーニの詞によつてハインリッヒ・ゴッビーの作曲した「リスト・カンタータ」が、ベストのリスト協會の演奏で祝祭の幕を開けた。これに續いて非常に祝典に熱中してゐた演説家の一人、參議官パウ・フォン・キラリが立ち上つた。そして感激的なハンガリア語で、ベスト市の名に於て



證狀と共に黄金の月桂冠をリストに贈呈した。それ以後ベスト市はずつと毎年三人の音楽家に二百グルデンの奨学金を與へ、リストは終生この藝術家の選に洩れなかつた。それは全くリストの精神を尊敬してのことであつた。感に打たれて彼は進み出た。そして興奮と悦ばしい感謝に吃りながら「私は貴方のものです。——私の才能は貴方のものです。——私が生きてゐる限り、私はハンガリアのものです。」といふ誓ひの言葉が、唇から押し出された。それから續いて、その他の祝賀品の贈呈が行はれた。ウィーン市は、二つの高價なアルバムをベルメスベルゲルに委託し、ローエン監督官とラッセン樂長は、ワイマールの祝賀の辭を齎し、一般ドイツ音楽協會の委任によつてフォルクマンは、銀の月桂冠を贈呈した。それに續いて、プレスブルグの教會音楽協會の心からなる祝辭、少壯ロシア作曲家達の祝辭等々があつた。そして一番最後に、一人の少女がベストの孤兒達の感謝の言葉を述べて、巨匠に月桂冠を贈呈した。リストは孤兒達のために、再三演奏會を開いてゐたのだつた。そしてこれが素晴らしい祝祭の感激的な最後であつた。それから午後には、飾り立てられた假裝舞踏會館でハンス・リヒターの指揮の下に、リストのオラトリオ・キリストの素晴らしい演奏を行ひ、祝典に藝術的な結末を與へた。十一月十日の大祝賀宴會はリストを讃へる最高點となつた。ベストとオーフェンの著名な人々は此處に全部集まつた。歡喜と興奮の大浪は、高潮して行き、乾杯に乾杯が續き、喧噪の音も少しも愉快な氣分を曇らすことはなかつた。ハイナルド大僧正は歡迎の辭を述べ、次のやうな思ひ切つた言葉で結んだ。「リストが國民の方へ歩み寄つたのは、初めてである。今や國民は吾々の方に歩み寄つてゐる。」リストはフランス語で謝意を表し、氣輕な様子で、非常に小さい時代から彼とハンガリアの間に起つた關係を述べた。そしてハンガリア音楽の發展のための乾杯の辭を云つて結んだ。ワイマール大公、ビュロー、ワーグナー、多くの弟子達の外國から送られた無數の祝賀電報が最後に讀み上げられた。

國民劇場の祝典上演と、音楽愛好家の社交界によつてその會館で催された盛裝舞踏會を以て、藝術界では稀な出來事に算へ得るこの莊嚴なる祭典は、その翌日完全に終りを告げた。リストはこの凡ゆる人の期待を遙かに凌駕する程の、ベスト市が自分に對して表した敬意のために、非常な責任を感じ、何とかして感謝の負債を少くし度いものと思つた。彼は冬の間に慈善演奏會で度々ピアノ演奏家として弾いて聞かせ、數回、教會演奏會で指揮し、そして五月半ばまで滞在を延ばした。ベスト市が記念祭に彼に贈つた金の花環を、彼はその他の高價な贈物と一緒に、この唯一の祝典を記念するために、ハンガリア國民博物館に寄附した。

一月の初めに、リストは招待に應じてウィーンに行き、フランツ・ヨーゼフ財團のために演奏した。彼は丁度三十年前と同じやうに今度も、ウィーン人を感じさせて非常に熱狂させた。リストに心服してゐたベーゼンデルフェルは數日後リストに敬意を表はすために、或るピアノ工場の音楽サロンで素晴らしい夜會を催した。そしてウィーンの音楽界の人達は皆參加した。此處でもリストはパウリーネ・フェヒトネルと共演して、自分の藝術的才能を惜し氣もなく與へたのだつた。フランツ・ヨーゼフ皇帝は「ハンガリア音楽の促進と慈善目的の奨励に盡した彼の功績を讃へて」、フランツ・ヨーゼフ勳章の騎士十字架章を贈られた。

尙、その他に二つの記憶すべきリストの演奏會が、この年の初め（一八七四年）に行はれた。二三週間、彼の友人フォルバックスのスツェヘーニ伯爵のところへ客となつて滞在してゐたリストは、二月十二日にエーデンブルグに行つた。それは、彼が九歳の少年として初めて現れた時に、彼の未來を決定してしまつたこの土地で、エステルハツィ侯爵夫人によつて催された慈善演奏會で演奏するためであつた。彼はエーデンブルグ市代表の委員に迎へられ、そしてその上、夕方に市長からはドイツ語で長い挨拶を述べられ、あらん限りの方法で敬意を表された。その晩の純收入



は三千グルデン以上に達した。

四月の半ばに、リストはとうとう再びプレスブルグへ赴いた。それは自分が慈善演奏會に積極的に共演することによつて、ほんの少し前彼が其處に居た時に、二度目にグランのミサ曲を演奏したことのある其處の教會音樂協會に、感謝の意を表すためであつた。彼はゾフィー・メンテルと連弾でワルキューレの騎行を演奏したのであるが、彼の願ひによりメンテルは、彼と共にその晩の榮譽を分つたのであつた。

ワイマールの宮廷も、この年にリスト祭を計畫したのであるが、リストは非常に氣乗りがしなかつたので、誰にも邪魔されずに、夏と秋を通して作曲の仕事に専心するために、五月の半ばベストからローマへ直行した。そこで大公は嫌々ながらもリスト祭を思ひ切つて、その代りに大公家の勳章をリストに贈つた。ワイマールに於ける藝術的事態が、今も尙少しも愉快なものでなかつたことは、これをローエンに宛てた次のリストの手紙が明らかに示してゐる。そしてローエンはこの手紙に接したのが原因となつて、或る提案に従つて外國に行くためにワイマールを去らうと思つたのである。「私は残念なことにはワイマール劇場の『藝術的』事態を永久に建て直すといふことの、所謂不可能さを貴方ほども知つてゐませんでした。空腹に慣れてゐたダールカンの馬の比喻は、それが死んだ時に明らかな教訓を與へてゐます。それなのに貴方は人々が欲しがりに違ひない程、そして貴方が安全な航海を續けて行ける程上手に、立派に船を操つて來ました。且つ、他所の『ミューズの殿堂』に輝いてゐる黄金は、まだ辛うじて澤山の<sup>まがしもの</sup>擬物を隠してゐるに過ぎないのです。『拒絶するな』といふ言葉は、貴方の世間的知識を托すべき、貴紳の正しい標準の如く思はれます。そして私は、貴方が慎重な熟慮の擧句、私の正しい意味での利己的な、とは云つても一般の人々——と特にワイマールの——の關心に副ふやうな願ひを充し、その間は『藝術のワルトブルグ』にゐる氣持で辛抱されるやうに

希望致します。……貴方は『トリスタンとイゾルデ』をやるだらうと皆云つてゐます。そして管絃樂員の中でなかなか大切な老練な人々が數人引退するといふことです。遅くてもいゝからどうしてもおやりなさい。ワイマールの政體のため色々な遅延とか制約とかは、明らかに貴方の責任ではありません。貴方は賢明に、而もどこまでも貴方の意志と照らし合せて、それらに耐へ忍んで行かねばなりません。……而も、私がある中に飛び込んで實行するには餘りにも遅すぎるのです。若し人が小事を大事と比べる事が出来るならば、私はドイツ帝國教壇の氣むづかしい自白の文を引用します。『且つ、余は人々が砂中に疲れ果て、居り、自らの無力をよく知つてゐるといふことを經驗して來たのである』(ビスマルク侯、七三年一月二十五日)」

リストは熱心に仕事をしながら一八七五年二月半ばまでデステの別荘に留つた。ベストで既に作曲されてゐた死せる詩人の愛(ヨカイの譚詩による)といふメロドラマは、すつかり印刷されてゐた。そして新しく出來たものには、侯爵夫人が彼を注目させたロングフェローの詩によるストラスブルグの鐘とか、マールリンクの鐘とか、聖チエチリアの傳説とかがある。リストはスタニスラウスにも作曲し、第一景のピアノの拔萃を終へた。だがそれ以後の場面の詩には全然同感しなかつたので、彼は當分その作曲を止め、歌詞をコルネリウスに送り返した。然しコルネリウスは、リストの願ひを充すことが出來ないで、十月二十日に若くして死んでしまつた。かうしてこの年の仕事はそんなに捗ることが出來なかつた。

リストは何時ものやうに、數週間ローマへやつて來た。彼はその時はヴィコロ・デイ・グレイツイに留つた。同じ家には彼の弟子のアメリカ人、ピンナーとポーランド人、ユールス・デ・ツアラムブスキーが泊つてゐた。二人は非常に才能ある弟子であつたが、巨匠よりも先に死んでしまつた。リストは何時も夕方には雜談をしに侯爵夫人を訪れた